

明治天皇御集研究

三井甲之著

国文研叢書

No. 18

明治天皇御集研究

社団法人 国民文化研究会

三井甲之 著



—— 明治天皇 御尊影 ——



故三井甲之先生みついでいこうしの名著

『明治天皇御集研究』

を再刊するに当つて

小田村寅二郎

(亜細亜大学教授・本会理事長)

この書物は、今から五十年前の昭和三年（一九二八年）に、出版界の老舗・東京堂からその初版が出されたものである。以後、昭和十六年に第四版が出たあと、絶へて顧る人として少く、絶版のままとなつて今日に至つた。

しかし、本書に凝結された三井甲之先生の、「学問についての研究方法論」の展開は、先生の畢生のひつせいの労作（先生は時に四十五歳）であるばかりでなく、今日の日本の思想界・学界に見られる文化系列諸学における「研究方法そのものの混迷」に対して、必ずや絶大

な示唆を与へるもの、といふにやぶさかではない。詳しくは、本書全ページを通じてそのことが明らかにされるものと信ずるので、私がここに多言を費すことは慎しみたいと思ふ。どうかご精読を、いなご心読を賜りたいと念ずるものである。

著者・三井甲之先生は、二十四年前の昭和二十八年四月に七十一歳を以て長逝された。先生は、甲府市外に代々伝へられた名家に生れられたが、一高・東大と進まれ、東大國文科に入学するや、「根岸短歌会」の月刊『馬酔木（あしび）』に連作短歌六首を發表されて以来、大学在学中から正岡子規（註、子規は先生の大学入学に先立つ二年前に病死してゐるが）の道統に真剣に取り組まれた一人であつた。

そのご生涯を通じての、多岐にわたる論考は、全集に集約されるほどの多量のものであるが、戦後の日本では、時代風潮に障^さへられて、つひにその企画が日の目を見ることになかつた。わづかに、私も同人の企画で、ご逝去の年の十月に、隔月刊誌『新公論』を「三井甲之追悼号」として特集したことや、昭和三十三年に、先生が生前によく参拝されたお宅のお近くにある、山県大弐先生が祀られてある山県神社の境内に、先生

の名歌といはれる

ますらをのかなしきいのちつみかさねつみかさねまもる大和島根を

を刻んだ大きな歌碑を建設し得、かつ同年四月『三井甲之歌集』を編して同人知友に頒布し得たにとどまつた。そのほか、宮崎五郎氏によつて『三井甲之書簡集・無限生成』（昭和三十二年刊）『三井甲之選集』（昭和四十年から連続出版）、また松田福松先生によつて六百頁に及ぶ『三井甲之存稿』（昭和四十四年）が、そして若い仲間の亀井孝之君ほかの諸君による「斑鳩会^{いかるが}」から、三井先生がご晩年に「永訣の書」としてお書きになつた『今上天皇御歌解説』と先生の東大での卒業論文を骨子とした旧作『万葉集論』が合せて小冊子（昭和四十二年）にして出されてゐるぐらゐである。近代日本における出色の文学者・思想家に対しての追慕としては、何とも不釣合な現象と思はれてならない。

それはさておき、昭和五十一年といふこの年は、今上天皇御在位五十年といふ劃期的な年であつた。さまざまな天皇抹殺論が横行するわが日本ではあつたが、両陛下の御健在を祝ふ国民も決して少くはなかつたやうであり、潜在的な意識の中に見られる日本国民の天皇崇敬の姿は、十分に看取せられたものと言へたであらう。かうした記念すべき

年に當つて、わが国民文化研究会は、文化系列諸学の是正に取り組んで二十年を過したが、やうやくにして年来の悲願でもあつた。わが道統の先達せんだう・三井甲之先生のこの論作を、このやうな形で再刊するを得たことは、まことに有難いことであつた。原本を出版した東京堂に長く在籍された畏友・石井良介氏のご尽力で、東京堂からのご了承が得られ、かつまた、先生のあとを継いでをられる三井広人氏からのご快諾と合せて、ここに上梓の運びとなつたものである。関係各位に心からの御礼を申し上げる次第である。また、校正段階で関正臣氏、長内俊平氏ご夫妻、名越二荒之助氏にご協力を得たこと、いくつかの疑問点について夜久正雄氏にご相談にのつていただいたことも有難く、また、奥村印刷の篠原勝美氏にもいつもながらのお世話になつた。

どうか本書が、多くの方々、とくに大学生、若い社会人の方々に「輪読における必携書」として、真剣な研究の対象に取り上げられる日の近かからんことを祈つて、本書再刊の経過報告に代へさせていただきますこととする。

なほ本書の再刊に當つて、原本と相違した次の諸点について、読者各位のご了承を賜

りたいと思ふ。

一、原本の「目次」では、各章（章といふ名称は本書では見当らないがそれに該当するもの）の「各題名」の次に、実に詳細な小見出し的な「小題名」が沢山につけられてあつた。そのために「目次」だけが二十余ページにもなり、本書の予定ページに大きく支障が生じたこと、他方、現代的なセンスから見ても、これを割愛した「目次」にする方がすつきりしたものになりさうに思はれて、「目次」の「小見出し」はすべて割愛させていただいた。

ついては、原本の「目次」の第一章についてだけ、ご参考のためにその「小見出し」の要領を左にご紹介申し上げておくことにしたい。

一、歌 — その一 —

(1) 思ふことありのまにまに表現する言の葉のまことの道……(2) 非常時につくらるるまことの歌と『もとの心』としての『をさな心』……(3) 神の心に通ふ人の心のまこと|| 永久生命……(4) 独白としての歌・芸術の中心・神のひらきし『しきしまのみち』……(5) 作歌の苦心と歓喜……(6) 歌の伝統と任務……(7) 自由なる新綜合詩への期待

といふごときであり、四十三章全部についてこのやうな「小見出し」が「目次」につけられてゐたのが、原本のそれであつた。

二、半世紀も前の「原本」では、当時の「文章」に共通して見られたやうに、「句点」がたいへんに少いため、現代の若い人々には文章の区切りがつかみにくい所が多く、大切な文の内容を理解し損ふ危険が感ぜられたため、関正臣氏と私とで協議の上、思ひ切つて沢山な「句点」を加へたこと。

三、「ふりがな」をかなり沢山に付けたこと。御製の中にも、それを加へたのは、若い方々の勉強・研究に少しでもお役に立てたいための作業であつた。

四、巻頭に掲げた、明治天皇さまの御尊影は、私の先代が居室に飾つてゐたもので、昭和初期に頒布せられた大きな額入りのお写真（印画紙焼付け）を、縮少して挿入したものである。明治神宮の千葉博男氏にその謹写の年月をお調べいただいたが、明治四十年ごろのご尊影ではあるまいか、また、あるいはご尊影そのもののお写真ではなくて、画家に画かせたものをお写真に撮つたものかも知れない、とのご返事をいただいた。付記して謝意に代へさせていただきます。

五、奥付の「著者略歴」の横に掲載した著者の写真は、前記の松田福松先生編の『三井甲之存稿』の扉から複写させていただいたもので、二十五歳ごろの著者のお顔を選ばせていただいた。

付記、なほ本書には、明治天皇の御製が沢山に載せられてあるが、各御製の下に、御詠作の年を明記したのは「原本」の通りであるが、「原本」では、単に「明治三十七年」を（三七）と記すのみであったが、判りやすく受け取れるやうにと考へて、（明治三十七年）と記載した。

ちなみに、明治天皇の御歌は、総数で九三、〇三二首であり、そのうちから八、九三六首が謹選されて『新輯明治天皇御集』として昭和三十九年に公刊された。しかし本書の著者三井甲之先生が、本書を執筆された時点では、当時までに公表されてゐた明治天皇の御製は、総数でも約二千首弱であったことを、念頭にお入れになつてお読みいただきたいと思ふ。

昭和五十一年十二月二十五日

目次

故三井甲之先生著『明治天皇御集研究』の再刊に当って……………	小田村寅二郎……………	1
『明治天皇御集研究』の序文……………		
はしがき……………		13
序論Ⅱ祖国礼拝・国民宗教経典明治天皇御集拝誦・宣言……………		18
『明治天皇御集研究の本文』……………		
一 歌一(その一)……………		31
二 歌一(その二)……………		39
三 神……………		47
四 神のまもり……………		54
五 戦死者の生ける霊……………		59
六 義務一(その一)……………		67

七	義務―(その二)……………	74
八	個人と国家―(その二)……………	78
九	個人と国家―(その二)……………	85
十	建国の事実と精神―(その二)……………	93
十一	建国の事実と精神―(その二)……………	101
十二	故郷とすまひ―(その二)……………	109
十三	故郷とすまひ―(その二)……………	116
十四	神社……………	124
十五	自然と人生……………	132
十六	自然鑑賞と表現技巧―(その二)……………	141
十七	自然鑑賞と表現技巧―(その二)……………	149
十八	自然鑑賞と表現技巧―(その三)……………	157
十九	自然鑑賞と表現技巧―(その四)……………	165
二十	有限自然より無限人生へ……………	173

二十一	戦争と平和……………	181
二十二	無限世界の統一中心……………	189
二十三	国家興亡史的法則と天皇統率兵馬大権……………	196
二十四	国家刑罰権と国民思想……………	204
二十五	不正行為の心理分析……………	212
二十六	道徳的法則—個人修養と安心立命……………	219
二十七	道徳的法則—個人反省と国民教育……………	226
二十八	世……………	234
二十九	道……………	242
三十	無疲倦不断防護戦闘意志の源泉—(その一)……………	250
三十一	無疲倦不断防護戦闘意志の源泉—(その二)……………	258
三十二	国語読本の御製—(その一)……………	265
三十三	国語読本の御製—(その二)……………	275
三十四	国語読本の御製—(その三)……………	282

三十五	『明治天皇御集』と国民教化―(その一)……………	289
三十六	『明治天皇御集』と国民教化―(その二)……………	298
三十七	坤徳対照―(その一)……………	306
三十八	坤徳対照―(その二)……………	313
三十九	坤徳対照―(その三)……………	320
四十	坤徳対照―(その四)……………	327
四十一	研究方法論―(その一)……………	334
四十二	研究方法論―(その二)……………	341
四十三	研究方法論―(その三)……………	348

はしがき

(昭和三年—一九二八—) 三井甲之

今ここに『研究』といふは、『明治天皇御集』を国民宗教經典として拝誦しまつるとともに、かしこかれども御集を学術的研究対象に選択しまつることによつて、著者の志す文献文化史的研究を実現せむとするのである。

この文献文化史的研究方法は、その本来の性質よりして、著者の短歌長詩を中心とする芸術的表現及び他の文献文化史的研究によつて補足せらるべきものである。

『明治天皇御集』の大御歌おほみかうたは、すべて明治天皇の天皇としての人生観を表現せさせ給うたものである。著者がいまここに、大御歌について解釈し批判しまつるところのものは、ただ大御歌によつて著者のこのころによびめさめしめられたところのものを、著

者のまづしく足らはぬ知識と体験とに基く能力のかぎりに於いて、つつしみて述べあらはしたものである。

精神科学的研究は、研究者の知識よりもその体験に依拠するところ多く、その知識的分析の作業も研究者の体験に基くものなるが故に、おのづから知識的研究に踟躕きよくせきせずして、円融無礙えんゆうむげの、常倫じょうりんを超出したる活動を示すべきであつて、ここに概念的認識の知的作業が芸術的創作に接触しようとして、それと同時に研究者の体験を暗示しようとするのである。故にその研究は、宗教的儀礼の嚴肅と熱情とをもつて従事せらるべきである。人生研究は発心求道はつしんぐどうの活動となつて、自然科学的研究者の人生に対する態度とは異つたところの態度を要求するのである。(大正十四年—一九二五—)

○

おほけなくもいま『明治天皇御集』を研究し、それを発表せむとするのである。われは大御歌を拝誦はいじゆしまつりてわづかに安心を得しめられつつはかなく生くる民、大御歌を拝誦はいじゆしまつることによりて生くる勇氣を得しめられつつある民、これまことに『神のまも

り」と現しく思ひつつある民である。しかして民のつとめを尽さむがために、身のほどをもかへりみず、ここに『明治天皇御集研究』を出版せむとするのである。

されば、大御歌はかくのみこそ謹解しまつるべけれといひ、研究法はこれにこそ限れといふのではない。しかしながら、誤れる研究法と解釈とについては、これに批判を加ふることを怠らざらむとするのであつて、ここに『研究』の意義があると信ずるのである。

また此の研究は、完成せらるることなき連続事業であり、研究者のはかなき生活と祖国無窮の生命との交通によつて、同信の友らの、また一般の人々の矯正補足分析綜合のもとに、永久に生成すべきものであつて、日本国民に与へられたる神聖なる義務の対象である。

この如き学術的態度は、あらゆる人間の罪悪行為を悲しみ嘆きつつ『神のまもり』をいのる求哀懺悔・捨身求道の至誠心によつて支持せらるるのである。

こひねがはくは、ちはやぶる神の御稜威を『ことのはのみち』によりて現しくしめさせ給ふ『しきしまのみち』の経典『明治天皇御集』を拝誦しまつることによりて、ちは

やぶる神の心をうつせみの人の心につながらしめられむことを、うらなげきこひのみまつるのである。(昭和二年—一九二七—)

○

『明治天皇御集研究』は、その一部分を大正十四年(一九二五)二月より雑誌『日本及日本人』に連載したのであるが、今回その大部分を整理補足してここに一卷にまとめたのである。故に本書は、嚴密の意味に於いていへば『明治天皇御集研究』の『一部』である。しかしながら著者が、明治・大正・昭和三代の大御代おほみよにつかへまつりつつ、全身の力をあつめたる研究は、本書に結実したものであることを告白せむとするのである。

本書は、専門学术界の特殊知識的要求にのみ応ぜむとするものではなく、すべての職業とあらゆる境遇との人々、ことに心身勤労生活者と不安苦惱生活者とに対して、明治天皇の大御心おほみこころをあふぎいただきまきまつるべき機縁をつくらむとこひねがふのである。また、これが精神・文化・社会・歴史科学の正しき研究方法及び任務であると信じて、学界の批判を求めむとするのである。

著者は、学者・学生・教育家・軍人・実務勤労者また教化修養・理財政治的公共団体に本書を提供せむとするものである。また、新時代の女性ことに家庭の主婦が『坤徳対照』に、女性道徳の手法をあふぎまつり、社会理想の問題を解決せむとする純情の青年学生が、マルクス主義の個我功利道徳と『しきしまのみち』の『やまとだましひ』とを正確の心理学的見地と芸術的体験とより対比して、知識より批判へ、批判より実行へと、ここに心絃共鳴の世界を見出すことの如き、これ著者の限りなき期待の一例をしめすものである。(昭和三年―一九二八―)

序　　論——祖国礼拝・国民宗教經典 明治天皇御集拝誦・宣言

(大正十二年——一九二三年——)

明治天皇神あがりましましし時、われら驚き目さめしめられ、われら国民のつとめいよいよ重しと気づかしめられたのである。大正三年(一九一四)世界大戦はじまり、同じき年の対独宣戦は、戦争開展に於ける世界勢力関係を支配する重要条件を決定し、大正八年(一九一九)ヴェルサイユ平和条約成りて、技術武器中心の戦争は思想言論中心の戦争によつて延長補足せられ、大正十年(一九二一)皇太子殿下摂政に任ぜられさせ給ひ、同じき年ワシントン会議開かれ、国際思想戦はその終結に導かれ、諸国の主権に關係する重大の軍備制限条約成り、大正十二年(一九二三)九月一日東京を中心として、大震災につぐに大火災をもつてして、その破壊の威力世界を驚かし、その惨状世界大戦戦場のそれに比較せられ、ここに破滅没落より創造革新への復興原理を求め、国民思想の趨向を反省

せしめられしが、かしこくも同じき年十一月十日『国民精神振作の詔書』をくださせ給うたのである。

われら明治の御代にはぐくまれ大正の御代に国民の責務を分担するもの、如何なる精神原理及び思想信仰によつて各個人及び全国民生活をみちびくべきか。われらは信ず、われらはわれらの祖国日本を礼拝すべしと。われらは信ず、祖国日本の精神はかしこくも、明治天皇の大御心にすべをさめしめられたりと。われらは信ず、明治天皇の大御心は『明治天皇御集』に表現せさせられたりと。かしこくもわれら日本国民は『明治天皇御集』を拝誦しつつ、明治天皇の大御言をさながらにいただきまつるのである。申すもかしこかれども、明治天皇はたふとき大御身にましまして、祖国日本のために大御身をささげつくさせ給ひて神あがりましましたのである。また祖国日本のためにその身をささげたりしものま心はみな、明治天皇の大御心にすべをさめしめられたのである。われらは『明治天皇御集』を拝誦しつつ、かくのごとしとしぬびまつるのである。

明治天皇神あがりましてよりこのかた、国家制度・社会組織の重要な地位をしめし

人々の公共生活に対する道徳、歴史伝統に対する宗教、科学研究を指導する哲学、実人生を表現する芸術は、悲しむべし、そのいちじるしきものの多くは、祖国日本のためにその身をささげたりし人々をしぬぶことをわすれ、またそをすべをさめさせ給ひし、明治天皇の大御心をしぬびまつるべきことをわすれ、おごりたかぶりさまよひたりしあとのみであつた。国民生活の表面に浮きあがりはびこりたりしものは、われらの分析の対象であつて帰依の対象ではなかつたのである。このごとき世のさまにいきどほろしき心をいだきてひそみだえつつありし人々は、もろともにいま立ちいづべき時である。

われらは祖国日本を礼拝し『明治天皇御集』を拝誦しまつりてすすまむとするのである。唯一生命のゆくべき一すぢのみちをゆき、全国民にとつて同じき祖国日本をまもりて進まむとするのである。世界のいたりとどまるところにはたらかむとするわれらからの生命の血脈・祖国日本を、われらはともにもまもりて進まむとするのである。

われらの個体生活は、全体綜合生活の分析により生れたるものにして、孤立して完成せられたる個体生活はあることなく、まことにあるものは断ちがたく分ちがたき団体綜合生活である。しかしながら分つべき世界もなく、限るべき時代もなくはてなく流転す

る全宇宙は、『自然』であつて『人生』ではない。全体を区分し、区分を全体につながらしめ、分析と綜合によつて主客をわかち過現未をかきるとき、ここに生死意欲の人間生活が、無心自在の自然現象より開展するのである。これまことに人間精神開展の法則にして、個人生死・国家興亡は人類生活の運命である。

この法則は事實に開展して、ここに一定の伝統により、一定の土地に、一定の國語を話しつつ、一定の民族団体をかたちづくり、自足自立の統一的趨向を有する人間生活理想・ヒュマニテイに向つて進むところの、国家生活の諸形態が派生せしめらるのである。かくのごとくにして、ここに自然現象と人間文化とを分つ基準、一切の人生価値批判の基準、全体綜合生活の現実的区分限界が生成しつつあるのである。——われらにとつては、その限界はこれをいづくに求むべきか、それは家族、地方団体、また同信団体にあらず、しかしながら宇宙、世界人類、國際団体また東亞たるべくもあらず、まことにそはただ『日本』である。

世界文化史上の、また世界現勢に於ける日本は、日本民族団体であり、東洋文明の伝統及び理想の現実的把持者としての自立国家であり、また、対照補足せらるべき東西洋

文明の集中地点である。われらの祖国日本は、その分派としてのアメリカをふくむヨーロッパ文化単位と対立するところの、アジア文化の現実的総撰把持者としての自立国家である。祖国日本は、すでに確立せられたる世界文化単位であり、全ヨーロッパ統一の過程にある諸国家とは異りたる開展階次にあるものであつて、普遍的概念としての国家ではなく、まことにはただ『日本』とのみよぶべきである。故にわれら日本国民にとつては、『日本』は『世界』であり、『人生』である。『日本』は、われらの内心に生くるところの『宇宙』であり、『永久生命』であり、『信順意志』である。そは、祖国日本を防護せむとする実行意志であり、『日本はほろびず』と信ずる一向専念の信仰である。

自給自足のための民族団体の力学的統一と自立自主防護のための軍備とは、ヒュマニテイの要求であり、排外侵略の随意選択行為ではない。自立自主の強国数の減少は、交通を条件とする文化開展の、またヒュマニテイへの開展の不可抗的法則である。東洋文明の現実的威力としての相続開展は、朝鮮・台湾をふくむ日本及びアジア大陸の交通連絡補足協同を要求する。東洋文明の現実的威力としての開展は、世界人類文明にとつての絶対的必要である。それ故に、東洋に於ける日本がその自立を防護することは、世界

人類文明のために負ふべき最少限度の責務であり、人間生活開展の法則に随順することであり、またそれ故に、それは世界各民族各国家によつてその正しき理由を承認せらるべきである。人類文明は交通によつて開展し、交通は、対照的要素の強化補足によりて新生命を創造するのである。世界各民族各国家は、その国民經濟生活に於いて密邇みつじの関連を有するのみではなく、その經濟生活を攝取統一するところの全國民精神生活に於いても、密邇みつじの関連を有するのである。東西洋文明の連帶關係を確認すべきことを、われらがここに世界各國民に向つて要求せむとするのは、この故である。

きけ、長き間の日本の同盟国たりしところの、またつねに東西に呼応すべき西方島國民の『ブリトン』は決して、決して、決して奴隸とはならじ』とうたひつつ、見よ、世界の海波を世界交通路を支配せむとしつつあるを。また見よ、その分派アメリカは、アメリカ主義によつてその移民を選択同化しつつ、その國民的統一を完成してその母國に雁がん行せむとしつつあるを。われらは東方の海上に、民族の郷土アジア大陸をのぞみつつ、朝日をしめす国旗のもとに、祖国日本の自立のために、『かたしとて思ひたゆまず』、生死興亡の無常變易へんぎ原理のさらにそこに溯源さくげんすべきところの、『日本はほろびず』とふ不

可思議の信を実現せむとするのである。

事実として、国家の自由独立・自治主権の失はれむとしつつある今のドイツの惨状をみつめよ。国民文化の中堅としての中流階級とともに、国民教化諸機関の衰頽没落しつつある永続悲劇のいたましさをかがみとせよ。社会主義理論に於ける国家概念と史的事実としての国家との混同より起りし誤謬論理の人生実験として、此の世ながらの地獄の責苦せめくになやむところのドイツ国民生活のいたましさをかがみとせよ。

ロシア最近の革命は、地上天国の現出にあらずして、単に共産主義者政権獲得の政変であつた。彼等の政権獲得・思想宣伝戦の武器は、マルクスの窮極予定の歴史哲学と概念構図の弁証法とであつて、生命の不可思議創造と文化の不断開展とは、党派支配の権略によつて阻礙そがいせられたのである。しかしながら、かれらは今人心理の不可抗的法則と国民生活事実の制約とのもとに、その共産主義理論を矯正し、また、インターナショナル世界革命の名義によつて宣伝せられたる統一意志と支配計画とに、軍備的形式と戦略的組織とをあたへてその国民生活速度を速めむとし、ドイツに於いても、一九一八年の革命は、ただ無確信の政党首領跋扈ばつこのメロドラマなりしことを反省し、まことの民衆

本能革命は一九一四年の開戦とともに、国民総動員として適法にまた軍事的形式に於いて行はれたりしことをさとり、フランスに於いても、またイタリアに於いても、理智主義より生れたる国家敵視の社会主義理論は、すでにその人生試験を終りて事実感覚と国家思想とは伝統精神によつて統一せられ、いま全世界は、まことの宗教的礼拝の対象を人生そのものに見いだし、救済者を外に求めずして、解脱を内心に求め、人生の理想を同胞の内的平等感に求めむとしつつあるのである。

しかるに最近の日本に於いて、国家生活の事実と意義とを知らず、国家威厳の保持と祖国防護の用意とをわするることを誇りとして、大学と新聞雑誌とに巣くへるすべての偽新思想・偽進歩思想の宣伝者は、かれら自身、自立国民生活の廣大恩徳をかうぶりつつ、そは実に、祖国日本自立のためにその身をささげたりし同胞の靈の威力みょうりきの冥加みょうがによるものなることをわすれ、思想上の後進国ドイツ・ロシアの旧式哲学をまなばむとするところの忘恩の、またそれ故に無自覚のともがらである。かれらは個体概念にとらはれて国家生活の事実を知らず、平和概念にとらはれて祖国防護の用意を思はず、さらに理論と概念とを眩惑武器とする外国の宣伝に内応して、国民精神を混乱せしめたる個我執

着・理論偏重へんちゆうの近代的迷信者である。また国家制度・社会組織の重要な地位をしめつつ、奉公の忠義をわすれて個我の名利みやうりをめあてとし、祖国の恩徳おんとくに報ゆることを思はずして党派支配・閥族専横しんの肆心しんをたくましくしたりしものらは、国民思想を批判指導するちからもなく、かれらはともにひとしく、国家無窮の生命と国家現実の威厳とを防護することをおこたりつつ、眼前の効果と一時の享楽とに夢みつつあつたのである。この怠慢と無用意とは、震災につづく火災によつて、幾万同胞の生命を破滅てつめつの劫火てうかに投じ、極限の苦痛に悲泣せしめたのである。震災火災に対する帝都の無防備は、敵の襲撃しゆうげきに対する帝都の無防備であり、震災火災の悲惨なる実情は、享乐的平和主義者・忘恩的非国家主義者の残虐性のための犠牲である。この国家的不幸に対する責任を負ふべきは、直接救援の任務にあたる当局者のみではなく、最近十数年間の弛緩したる全国民生活そのもの、殊にその指導者としての歴代の内閣である。今は全国民をこぞりて、国家的重大災害と幾万同胞遭難の不幸とをまねきたりし罪惡しんちやうの深重なるを思ひ、五体を地に投じて懺悔すべきである。

この国民精神の趨向を反省して、これを思想悪化の名義によつて概括し、その対立概

念として思想善導の綱領を示し、また民力涵養を標榜して各種修養訓練の公共団体を組織し、さらにこれを普通選挙、社会政策を始めとして、国防教育交通産業の各方面また一般行政財政の实行政策の細目に分析すといへども、それら主義政策を、国民精神原理のもとに統一して生命化し綜合して活動せしむるために、国民礼拝の対象をさだめ、読誦の經典をえらばざれば、つひにそれらは、概念と名義との転換、形式と制度との改正たるにとどまり、国民现实生活内容の充実、国民精神生活内容の緊張は期待せらるべくもないのである。

故にわれらは信ず、全國民はいまひとしく『祖国日本』を礼拝し、『明治天皇御集』を拝誦しまつるべしと。これまで、明治天皇の大ききみめぐみのもとに生けるわれら國民のかなしきねがひなりと、われらここにこの信を告白宣言せむとするのである。

(大正十二年——一九三三年——十二月脱稿)

明治天皇御集研究

一 歌 — その一 —

歌

天地あめつちもうごかすばかり言の葉のまことの道をきはめてしがな(明治三十七年)

思ふことありのまにまにつらぬるがいとまなき世のなぐさめにして(同)

ときにつけ折にふれつつ思ふことのぶればやがて歌とこそなれ(同)

世の中にことあるときはみな人もまことの歌をよみいでにけり(同)

歌は、『思ふことありのまにまに』『ときにつけ折にふれ』てのぶる、その『まことの道』の実現である。そのまことは、天地又は宇宙意志をも感応せしめ、またいとまなくあわただしきこの『世のなぐさめ』となるのである。ここに、人生の自然開展に随順する神随かんならの道が実現せらるるのである。歌に表現するところのものは、『思ふこと』であるが、それは思ふことを『ありのまにまに』表現することであり、それ故にありのまにまに思ふことである。ありのまにまに思ひ、思ふまにまに表現するのである。

此のありのまにまに思ひまた表現するのは、一定の条件の下に於いて行はるのである。『ときにつけ折にふれ』といふ、それは一般の人々にとつては『世の中にことあるとき』であり、重大事の起つたときである。重大事が起つたときに『まことの歌』がよまるのである。平常にても世の中にことあるときの如き、心をつづけてをつてまことの歌をよむのが、まことの歌人である。

心

しきしまの大和心のをしさはことある時ぞあらはれにける(明治三十七年)

とよませ給ひたるも同じことで、国家有事の日にをしきま心のあらはれしめらるるをよませ給うたのである。

非常時にまごころがめさめしめらるるが如く、まごころそのままのをさな心の無邪気、のふるまひも『すなほ』であり、『つくろはむことまだしらぬ』ところの『もとの心』である。

心

すなほなるをさな心をいつとなく忘れはつるが惜しくもあるかな(明治三十八年)

心

つくるはむことまだしらぬうなる子のもとの心のうせずもあらなむ(明治三十九年)

とよませ給ひ、また

歌

おもふことうちつけにいふせまなご幼児の言葉はやがて歌にぞありける(明治四十年)

ことのはのまことのみちを月花のもてあそびとは思はざらなむ(同)

とよませ給ひ、この人生の自然開展に随順することは、人生の部分的手段としての遊戯ではない、としめさせ給うたのである。

このあるがままに思ひ、思ふままにあらはすところの『まこと』は、人生法則・人生原理に随順することであるから、それは遊戯ではなく、目に見えぬ超個人的全体意志としての神の心に通ふのである。全体意志としての神にむかひてはづるところのないことが、それがまことのなくさめであり、安心である。

神 祇

目に見えぬ神にむかひてはぢざるは人の心のまことなりけり(明治四十年)

めにみえぬかみの心に通ふこそひとの心のまことなりけれ(同)

かくよませ給ひ、また

歌

まごころをうたひあげたる言の葉はひとたびきけば忘れざりけり(明治四十一年)

とよませ給うたのである。ひとたびきけば忘れざる、まごころをうたひあげたる歌、これ人の心にすむ永久生命の表現である。はかなき此の世に、永久にのこりつたへらるるものは、忘れられざる記憶であり、感銘である。

○

歌の法則・原理は『まこと』である。このまことを表現する表現法・作歌法につきては、

歌

戦たたかひのいとまある日はものふも言葉の花をつむとこそきけ(明治三十八年)

ひとりつむ言の葉草のなかりせばなにに心をなぐさめてまし(同)

新しきふしはなくとも呉竹くれたけのすなほならなむ大和ことの葉(同)

むらぎもの心のうちに思ふこといひおほせたる時ぞうれしき(同)

と示させ給うた如く、事ある時にこそまことの歌は作らるのであるが、作歌には総合的直観と統一的静観とのために、一定の時間のゆとりと、時間の経過とを必要とするのである。『戦のいとまある日』に歌の作らるるのは此の故であり、それは語りつくせぬ思ひであり、概念的理解をこえた甚深微妙の心もちであるから『ひとりつむ』であり、『独白』としてあふるる思ひである。この思ひを『いひおほせるとき』のよるこびは、内心に於ける解脱の大歓喜である。

筆

思ふことつらねかねてはつくづくとふでのさきのみうちまもるかな(明治二十九年)
と表現の苦心をよませ給うた大御歌と対照せしめて、『いひおほせたる時ぞうれしき』
とよませ給ひたる大御言葉を解しまつるべきである。

をりにふれて

さまざまの世のたのしみも言のはの道のうへにはたつものぞなき(明治四十三年)
『ことのはのみち』は『しきしまのみち』であつて日本精神表現の中心は日本語であ

り、日本語の中心は歌である。

○

歌の伝統とその任務については、

道

ひろくなり狭くなりつつ神代よりたえせぬものは敷島の道(明治三十九年)

道

いとまあらばふみわけて見よ千早ぶる神代ながらの敷島の道(明治四十年)

寄道述懐

ふむことのかなどかたからむ早くより神のひらきし敷島の道(明治四十二年)

『神代よりたえせぬ』、『神代ながらの』、また『神のひらきし』敷島の道が歌である。

歌は詩の出発点また中心であり、詩は芸術の出発点また中心である。芸術は、総合的創造生命の客観化としての全人生・全人格的表現である。神代より、神代ながらの、また神のひらきし、とは芸術的総合性によつて個人的人格生活と民族的団体生活と、現実的生活事実と理想的精神要求との融合したる建国創業的精神の歴史的無極開展をしめし給

うたのである。故に歌は、国民のひとしくよみならふべきものである。

詞

ことのはの道のおくまでふみわけむ 政まつりごときくいとまいとまに(明治三十六年)

をりにふれて

ことしげき世にふる人もわがこのむ道にわけいるひまはありけり(明治三十六年)

道

いとまなき身も朝夕にいそしみぬ思ひいらりたる道の為には(明治四十三年)

をりにふれて

空蟬うつせみの世のことわざはしげくとも物学ぶまのなかるべしやは(明治四十三年)

とよませ給ひたる、『世のことわざはしげくとも物学ぶま』はあるべきで、多忙の生活を送りつつも『思ひ入りたる道』として、歌に志すべきをうたはせ給ひたるもの、とあふがるるのである。

詞

ききしるはいつの世ならむ敷島のやまと詞ことばの高きしらべを(明治四十三年)

をりにふれて

敷島のやまと心をうるはしくうたひあぐべきことのはもがな(明治四十五年)

とよませ給ひたる、高きしらべもてうるはしくうたひあぐべき歌、また一般的に詩をま
ちまうけさせ給へる大御心をしぬびまつるのである。されば、

をりにふれて

おもふこと思ふがままにいひてみむ歌のしらべになりもならずも(明治四十五年)

これまことに、三十一音の和歌の形式が、孤立形式より連作形式に、また和歌より分
肢したる俳句の発達を撰取しつつ、ここに新しき自由の、総合的の長詩形式に開展せし
めらるべきを暗示せさせ給へる大御歌である、とあふがるるのである。『思ふこと思ふ
がままに』とのたまはせ給ひたるは、将来の詩歌のよりどころとすべき原理をしめさせ
給ひたるもの、とあふがしめらるるのである。

二 歌 — その二 —

○ 雑誌『奉公』昭和二年（一九二七）七月号に、宮中顧問官・井上通泰氏謹話『明治天皇御集編纂に就て』が掲載せられた。それに『又各委員が自宅で原案を拝見しまするに、中々時間が費えまする上に、他のものところが拝見後非常に疲れます。私なども、最初は夜まで拝見しますと、其夜はキツト眠られませんでした。又当時頑健を誇つてゐました私も、御用の中途で高度の神経衰弱に罹りまして、一週間ばかり引籠りました程でございます。』とある一節は、特に注意せらるべきである。筆者も、『明治天皇御集研究』にとりかかりし当時、大御歌をつづけて拝誦しつつ精神は極度に緊張せしめられて、研究執筆の中途にして坐するに堪へず、たふれふしてやうやく元気を恢復したことが度々であつた。

大御歌は大体に於て、直観的叙述の連作短歌と申しまつるよりも、むしろ反省的思想詩としての独立短歌と申しまつるべきであるからして、これを拝誦しまつり御製作の御苦心のあとを辿りま

らむとするにすらも、精神は極度に緊張せしめらるるのである。

○

歌

戦たたかひのいとまある日はものふも言葉の花をつむとこそきけ(明治三十八年)

ひとりつむ言の葉草のなかりせばなにに心をなくさめてまし(同)

新しきふしはなくとも呉竹くれたけのすなほならなむ大和ことの葉(同)

むらぎもの心のうちに思ふこといひおほせたる時ぞうれしき(同)

心のうちに思ふことをすなほにいひおほすといふこと、それはすなほに思想することである。このすなほに思想するにあたりて、『ひとりつむ』とのたまはせ給ひたるは、深き意味のこもりたる大御言葉であるから、ここにふたたび引用しまつるのである。

源実朝が、『きざらぎの廿日はつかあまりのほどにや有けむ、北むきのえんに立出たちいでて、夕暮の空をながめて、一人をるに、雁のなくを聞きてよめる。ながめつつおもふも悲し帰る雁かりゆくらむかたの夕ぐれのそら』と詠み、一人をりて悲しき思ひに耽りつつ、また『梅花をよめる、我宿わがの八重の紅梅咲きにけり知るもしらぬもなべてとはなん』とも詠み

て、わが思ひの万人に通ふべく、又通へよと念ずるのである。ここに個人及び国民の性格があるがままに表現する芸術が、同時にまた、一般普遍的人生・心理法則と合致するのである。ここに芸術と精神科学と合致するとともに、個体は全体に融合して、そこに団体生活の無窮生命感が個人の精神思想生活に開展するのである。

されば大御歌に、『ひとりつむ』とのたまはせ給ひたるは、『千万の民と共に』と、のたまはせ給ひたると同じき大御心とこそあふぎまつるのである。

歌

千万の民のことばを年毎としごとにすすめさせても見るぞたのしきちよろづ(明治四十一年)

述懐

千万の民の力をあつめなばいかなる業わざも成らむとぞ思ふ(明治四十一年)

寄国祝

万民よろづたみこころあはせて守るなる国にたつ身ぞ嬉しかりける(明治四十三年)

楽

千万の民と共にたのしむにますたのしみ楽はあらじとぞおもふ(明治四十三年)

花

ありとある人をつどへて春ごとに花のうたげをひらきてしがな(明治四十五年)

これらの大御歌を拝誦しまつりつつ、『ひとりつむ』の大御歌を拝誦しまつれば、

述懐

わが身よにたつかひありてちよろづの民の心をやすめてしがな(明治三十九年)

の大御歌にあふぎまつる大御心を、二つの見地よりそれぞれに分ちて、またそれを相互につながらしめて、いただきまつるのである。

言の葉をひとりつむとは、稀有の精神・思想生活を開展せしむることである。あるがままに随順してすなほに思想することは非常にむづかしいことであつて、それは、心のうちに思ふことを思ふがままにいひおほすことである。思ふがままにいひおほすことによつて、思想がすなほに進行展開せしめらるのである。『おぼしき事はぬは、げにぞ腹ふくるる心地しける』とか『おぼしき事はぬは、腹ふくるるわざなれば』とかいふのは、所謂小我見の執着であつて、主観的欲求と自我的存在感とを排他的に主張しようとするものである。しかしながら『しきしまのみち』は、個我を全体に没入せしめ

て、万人に普遍なる心理的法則を作者個人の現実的精神生活の芸術的行業に求めようとするのである。

行路薄こうろのすすき

いづくをかわけてきつらむかへりみる野みちはすべて薄すすきなりけり(明治三十九年)

たどり来し一すぢの路も、いまそをかへりみれば、野もせに乱るる薄の中に没せらるるさまをよませ給ひし大御歌である。個体がその孤独のみちをたどりつつ、全体に没入する人生の軌道をしぬばしめらるるこの大御歌を拝誦しまつれば、我といひ彼といひ、個人といひ社会といふ、それらの差別概念は、自然と人生との渾融せらるるとともに、無限の世界と永久の生命とにみちびかるるのである。

国家の自立と個人の独立とは、人類の交通と国民の協力との出発点であり、またその基礎である。『ひとり』に分たるることは、やがて『ともに』結ばるることである。

天

ひさかたの空はへだてもなかりけりつちなる国はさかひあれども(明治三十九年)

朝ゆふにむかひなれたる久方ひさかたの空ははるけきものとしもなし(同)

『さかひある』地上の対立国家生活と、『へだてなき』宇宙の無限永久の生成とは、やがて生死に従ふ物的分析生活と、生死を超出する心的綜合生活と平行するのである。この有限生活を出でて永久生命に入る現実活動そのものに、『しきしまのみち』と『やまとだましひ』とのよりどころがあるのである。それは出離生死しゅうりしようじでもなく生死即涅槃しようじそくねはんは煩惱即菩提ぼんのうそくぼだいといふべきでもない。有限生活から永久生命に没入するところの、現実・具体的条件がやまとだましひの現実性を支持するのである。

朝ゆふにむかひなるれば天あまつ御空みそらも部分的存在としてながめられて、おのづからその綜合性はわすれらるるのである。しかしながら、天あまつみ空は『へだてなく』また『はてしなき』ものであり、またそれ故に、『そら』といはるるのである。地上の万物もまた、それを宇宙との関聯に於いてながむれば、それは無限世界の永久生命に没入せしめらるるのである。それが『すなほ』なる觀察と思想とその表現となりて始めて実現せらるるのである。此の実行が『しきしまのみち』である。

ひろくなり狭くなりつつ神代よりたえせぬものは敷島の道(明治三十九年)

近きよりゆかむとしてはなかなか遠くぞまよふ世の中のみち(同)

此のしきしまのみちは、神代より絶えせぬ一すぢのみちではあるけれども、ひろくなり狭くなり、盛衰あり消長あつて今日に至つたものであつて、それは、人生そのものの如き変化と複雑との交錯展転する悲劇的開展そのものである。しかしながら、その間に出没する生命意志と生活情操とは、そのままに無限世界の永久生命につながるのである。

此のしきしまのみちは芸術的創作及び鑑賞であつて、哲学・宗教的原理として神、仏、理想といひまた『中』といふよりも、むしろ道徳的に『仁』といひ『誠』といふにちかひのであるが、それは歌の題となるべきもので、歌そのものではないのである。

『しきしまのみち』は、歌である。歌は、『しきしまのみち』であり、『しきしまのみち』を規定する根本条件は、建国の神代にさかのぼり無窮の開展につながる祖国日本の現実的国民生活である。此の祖国無窮生命の真証は、『しきしまのみち』であり、まごころをうたひあげたる歌である。ここに『明治天皇御製集』明治三十九年の大御歌を引

用しまつる。

歌

まごころを限りなき世にとどむるもやまと詞ことばのいさをなりけり
すなほにてををしきものは敷島のやまと詞ことばのすがたなりけり

三 神

神とは『目に見えぬ神』であつて、この『かみの心に通ふ』のは『ひとの心のまこと』である。目に見えぬとは官覚的対象のみに限局せられずして、またしたがつて理論的認識にのみ限局せられぬところの、内心に味はるる永久の生命であり、不可説の感激であり、綜合的体験である。神とは超個人的生命であり、史的無窮開展の自立單位としての団体生命である。神とは団体生活意志であつて、それはやがてその団体を擁護しようとする意志であり、国家的自立意志である。それが建国以来一すぢにつたへられたのである。これは実現せられた事実であつて、いつはらぬまことであり、くもりなき鏡にあるがごとくうつるのである。これは統一せられたる唯一意志であつて、『千万の神もひとつに』また『ひとつ心に万民』の御国をまもる守護精神・防護意志である。

国民が一致協力する時に、それは史的精神と冥合し、現実国民意志が『神の心にか
ひ』また『かみの心に通ふ』のである。それが『まこと』である。『まこと』とは一致
協力であり融合統一であり、神ながらの道である。それは聖徳太子の十七条憲法に
『以和為貴』とある、その『和』である。
わをもつてたよとなす

ちはやぶる神といひ、神のみいつといふのは、此の国家自立意志の協力作用から生る
る強盛なる威力をいつたものである。神といふカミはウヘでありモトであるところの統
一者である。統一は生命のはじめであり、神代とは、この意味に於いての建、国、統、一、時、代
であり、文化、単位としての団、体、生、活、の、起、原、であり、故にまた紀元である。此の現実的綜
合意志に信順し帰依することによつて、人が人自身によつて解、脱、する近、世、的、人、間、宗、教
は、実に日本建国とともににはじまり今日につたへられたのである。

神仏を人間世界以外よりの救済者又は救世意志として、この外物の魔的威力によつて
解脱を求めようとする諸宗教に対して、人生宗教・人間宗教の源泉は、わが日本に、建
国以来自立国家日本の開展とともに、その險難の隘路をたどりつつ『い、つ、く、し、み』の、人
道、世、界、・至、上、人、間、世、界、へと流れそそぎつつある。

かくのごとく思想しつつ、つぎの大御歌を拝誦しようとするのである。

神 祇

や、す、か、ら、む、世、を、こ、そ、い、の、れ、天、つ、神、く、に、つ、社、に、幣、を、た、む、け、て、(明治三十五年)

ち、は、や、ぶ、る、神、の、ま、も、り、に、よ、り、て、こ、そ、わ、が、葦、原、の、く、に、は、や、す、け、れ、(同)

千、万、の、神、も、ひ、と、つ、に、ま、も、る、ら、む、青、人、草、の、し、げ、り、ゆ、く、世、を、(同)

述 懐

千、早、ぶ、る、神、の、か、た、め、し、わ、が、国、を、民、と、共、に、も、守、ら、ざ、ら、め、や、(明治三十六年)

神 祇

わ、が、こ、こ、ろ、お、よ、ば、ぬ、国、の、は、て、ま、で、も、よ、る、ひ、る、神、は、守、り、ま、す、ら、む、(明治三十六年)

国

ち、は、や、ぶ、る、神、の、御、代、よ、り、う、け、つ、げ、る、国、を、お、ろ、そ、か、に、守、る、べ、し、や、は、(明治三十七年)

鏡

く、も、り、な、く、世、を、た、も、て、と、て、千、早、ぶ、る、神、の、さ、づ、け、し、鏡、な、る、ら、む、(明治三十七年)

寄道述懐

なにごとに思ひ入るとも人はただまことの道をふむべかりけり(明治三十七年)

寄道祝

ちはやぶる神の御代よりひとすぢの道をふむこそうれしかりけれ(明治三十七年)

寄国祝

かしの実のひとつ心に万民まもるがうれし蘆原のくに(明治三十七年)

榎原の宮のおきてにもとづきてわが日本の国をたもたむ(同)

折にふれて

うつせみの世のためすすむ軍には神も力をそへざらめやは(明治三十七年)

ちはやぶる神の心になふらむわが国民のつくすまことは(同)

国民のひとつごころにつかふるもみおやの神のみめぐみにして(同)

神祇

世の中にことあるときぞしられける神のまもりのおろかならぬ(明治三十八年)

寄国祝

うけつぎて守るもうれし千早ぶる神のさだめしうらやすの国(明治三十八年)

をりにふれて

久方ひさかたのあめにのぼれるこちしていすずの宮にまゐるけふかな(明治三十八年)

さくすずの五十鈴いすずの宮の広前ひろまへにけふおほ幣ぬさをささげつるかな(同)

くもりなきあしたの空に神路山かみぢやまかうがうしくも見えわたるかな(同)

国

ちはやぶる神の心になふべくをさめてしがな葦原のくに(明治三十九年)

神 祇

日の本の国の光のそひゆくも神の御稜威みいづによりてなりけり(明治三十九年)

国民のうへやすかれと思ふにもいのは神のまもりなりけり(同)

かみかぜの伊勢の宮居みやゐを拝みての後こそきかめ朝まつりごと(同)

神 祇

目に見えぬ神にむかひてはぢざるは人の心のまことなりけり(明治四十年)

めにみえぬかみの心に通ふこそひとの心のまことなりけれ(同)

朝

世を守る神のみたまをあふぐかな朝ぎよめせし殿とのにいでつつ(明治四十一年)

寄道祝

葦原のみづほの国の万代もみだれぬ道は神ぞひらきし(明治四十一年)

柱

橿原のとほつみおやの宮柱たてそめしより国はうごかず(明治四十二年)

国

おごそかにたもたざらめや神代よりうけつぎ来たるうらやすの国(明治四十三年)

教育

わがしれる野にも山にもしげらせよ神ながらなる道をしへぐさ(明治四十三年)

神祇

わが国は神のすゑなり神祭る昔の手ぶり忘るなよゆめ(明治四十三年)

とこしへに国まもります天地の神の祭まつりをおろそかにすな(同)

をりにふれて

敷島のやまとしまねのをしへぐさ神代のたねの残るなりけり(明治四十三年)

ひと筋をふみて思へばちはやぶる神代の道もとほからぬかな(同)

国

天つ神定めたまひし国なればわがくにながらたふとかりけり(明治四十四年)
世はいかに開けゆくともいにしへの国のおきてはたがへざらなむ(同)

神 祇

いはらぬ神のころをうつせみの世の人みなにうつしてしがな(明治四十四年)
千早ぶるかみの力によりてこそわれをたすくる人もいでけれ(同)

神 社

いにしへの姿のままにあらためぬ神のやしろぞたふとかりける(明治四十五年)
をりにふれて

開くべき道はひらきてかみつ代の国のすがたを忘れざらなむ(明治四十五年)

四 神のまもり

光陰如矢あつごとし

思ふことつらぬかむ世はいつならむ射る矢のごとくすぐる月日に(明治三十七年)

折にふれて

思ふこと貫かむ世をまつほどの月日は長きものにぞありける(明治三十七年)

すすむべき時をはかりて進まずば危き道にいりもこそすれ(同)

うつせみの世のためすすむ軍には神も力をそへざめやは(同)

いかならむ事にあひてもたわまぬはわがしきしまの大和だましひ(同)

○

竜

わたなかに潜^{ひそ}めるたつも大空の雲をおこさむ時はあるものを(明治三十七年)

歌

天地もうごかすばかり言の葉のまことの道をきはめてしがな(明治三十七年)

世の中にことあるときはみな人もまことの歌をよみいでにけり(同)

盃

しづかにも世のをさまりてよろこびの盃^{さかづき}あげむ時ぞまたる(明治三十七年)

正述心緒

よもの海みなはらからと思ふ世になど波風のたちさわぐらむ(明治三十七年)

人

かくばかりことしげき世にたへぬべき人をえたるがうれしかり(明治三十七年)

世の中の事ある時にあひてこそひとの力はあらはれにけれ(同)

心

ちかひたるおのが心をしをりにて誠の道をわけつくしてむ(明治三十七年)

しきしまの大和心のををしさはことある時ぞあらはれにける(同)

山をぬく人のちからも敷島の大和心ぞもとゐなるべき(同)

折にふれて

思ふことつらぬきてはてて国民の心やすめむときぞまたる(明治三十七年)

○

これらの大御歌を拝誦しまつれば、帝政ロシアの軍事的侵略の魔手が朝鮮半島にまで及んで、我国の自立を脅威せむとした危機に際し、自立防護の興亡戦を戦はせ給ひたる明治天皇の大御心のいかにあらせられしかとしのびまつらしめらるるのである。

ロシアの軍事的侵略を撃退したる明治三十七八年戦役(一九〇四、五)より二十余年を経過したる今日、ソヴィエト・ロシアの共産主義赤化宣伝は、アジア大陸に及び、さらに直接間接に日本本土に潜行襲撃陰謀策戦しつつ、また帝国大学教授・流行新聞雑誌記者間にも半公認の赤化内応者を見出すに至るまで、危険思想の宣伝が放任せられ、遂に大正十四年(一九二五)京都帝国大学学生を中心としての治安維持法による学生検挙事件をも生ずるに至つたのである。

又一方には、アングロサクソンの世界支配意志の攻勢に対しても、実力的に抗争せねばならぬ事をかへりみたらば、日本の自立国家生活は悲壯なる国家的戦闘生活の継続であり、国民個人の運命もまた悲劇的であることを覚悟せねばならぬのである。

しかしながら、国防軍備計画、人口食糧問題、領土資源政策、保護助成事業等よりも先に決定せ

らるべきは、国内治安維持の問題である。身体・財産・居住の安全が保障せられざるところに治安が維持せらるべくも無く、治安の維持せられざるところに人民の幸福も『最大多数の最大幸福』もあり得ない。

また、南支那に於ける赤化暴動のために昭和二年（一九二七）三月、長江一帯の同胞が、掠奪、没収、凌虐、追放の憂目にあひたることは、共產主義とは人類交噬の獸心を覆はむとする仮面であり、罪悪行為に対する理論的口実であり、その標語は貪欲惨忍性誘発の偽科学的呪文であることの現代史的確証である。

東京朝日新聞ハルピン特派員昭和二年（一九二七）八月八日発、同日同紙上掲載・武漢政府顧問ボロヂン氏の第三インターナショナル東方策戦部への報告内容中『コムミンテルンの唯一の期待の的であつた農民革命も完全に失敗し、農民運動は組織を誤つたるアナアキズムの仕事を発揮するに至つた。余の努力に拘らず農民革命は何等効を奏せず、反対にこの運動は革命運動を妨害する結果となつた』といふ一節がある。

コムミニズムがアナアキズムと近親者であることは、コムミニズムが治安を脅威することによつて、理論的にも推知せらるべきである。レーニンがその共產主義に対する愚昧を懺悔したのは、彼が時代後れの共產主義者中に於いて、その首領としての卓越を示すものであつて、一般共產主義者は、共產主義理論を個我名利のための思想武器としようとするのみで、其武器の本質を知らず、共產主義理論の現世利益に随喜して居るものが多いのである。

軍事的侵略に対して国家的防護戦を戦ふ如く、赤化宣伝の陰謀も国家的威力をもつてこれを撃退すべきである。故に日本精神防護の思想言論學術批判戦は国家本来の事業たるべきである。

折にふれて

うつせみの世のためすすむ軍には神も力をそへざらめやは(明治三十七年)

軍事的防護戦に於けると同じく思想言論戦に於いても、『やまとだましひ』を發揮して、『やまとだましひ』の合成結果としての『神』と感応交通すべきである。この感応交通が『神のままもり』である。ここに『大和心のををしさ』又『山をぬく人のちから』が実現せらるるのである。祖先にさかのぼり子孫につながり全国民を統一したる天壤無窮の綜合団體生活が、神である。

をりにふれて

歳月としつきは射る矢のごとしものはみなすみやかにこそなすべかりけれ(明治三十九年)
をりにふれて

世の中の人におくれをとりぬべしすすまむときに進まざりせば(明治四十年)

五 戦死者の生ける霊

太刀

おのが身のみもり刀は天にますみおやの神のみたまなりけり(明治四十二年)

『天にます』とは、地上にあつて現実的感覚の対象となるものに対して、耳目に直接ふれぬところの、内心にしのびあぢはふところのものをさし給ふのである。それはみおやのみたまであつて、それを大御心にしのばせ給うてこそ、それがただちに大御身の御まもり刀となるのである。此の理想的でありまた同時に現実的であるところの、すなわち超感覚的であつて同時に感覚世界に反応するところのちからは、歴史的生命と現実生活とが、内心直接経験に於いて結合せしめらるるところのものである。これがまことの威力を有する思想・精神生活である。『みおやの神のみたま』は、現代人の思想・精神

生活に於いて生きしめらるるのである。

折にふれて

戦のにはにたふれしますらをの魂たまはいくさをなほ守るらむ(明治三十七年)

凱旋の時

外国とくこにかばねさらししますらをの魂たまも都にけふかへるらむ(明治三十八年)

をりにふれて

国の為いのちをすてしものふの魂たまや鏡にいまうつるらむ(明治三十八年)

をりにふれて

国の為いのちをすてしますらをのたま祭るべき時ちかづきぬ(明治三十九年)

社頭紅葉

もみぢばの赤き心を靖国やすくにの神のみたまもめでてみるらむ(明治四十二年)

これらの大御歌はすべて、戦のにはに於いて国のためたふれし兵士の『たま』をしぬばせ給ふ大御心をうたはせ給うたものである。祖国防護のためにその身をささげた人々を、みおやのみたまとともに、生き残りたる国民がその心にしぬぶ時、亡き人々の霊

は、生ける人々の心によびおこされ、生きてはたらかしめらるるのである。ここに永久生命は、同一国民の全体的協力生活のうちに、うけつぎつたへらるるのである。ここに個我は全国民生活のうちに没入せしめらるのである。此の全体生活に帰依没入するところが『入信』である。ここに個体意志は全体意志とつながらしめられ、現実的責務生活は歴史的精神生活と結合せしめらるのである。ここに各人の身分・地位・職業・所有能力等によつて分たるる生活諸形式を総撰するところの、全國民的信仰生活が実現せらるるのである。

それは身分・地位・所有等を機制的に平等化しようとするのではなく、歴史的伝統と現実的能力とに順応すべき生活形式の差別を認めつつ、それを公正化するところの原理を、國民全体主義の同胞感としての内的平等感激、すなはち個体生活の全体生活への没入感に求めようとするのである。

此の全体生活への没入感は、戦死者を追憶することによつてただちに実現せられ、われらの現実生活の穢れが浄めらるのである。祖国永久生命のために、国民生活のために個人生命をささぐるときに、個人の『死』は永久生命に没入し人は神となる。正岡子

規が『弔戦死者、匹夫ひつぶにして神と祭られ雲の峯』と詠じたのは、明治二十七八年戦役（二八九四、五）に従軍した彼が、当時の国民的感激を表現したものである。

湊川懐古

あた波をふせぎし人はみなと川神となりてぞ世を守るらむ（明治三十五年）

の大御歌は、戦死者及び一般祖国のために忠義を尽した祖先と同胞との霊の現実生活によびめさましめらるべきを、『神となりて世を守る』とこそよませ給うたのである。

写真

末とほくかかげさせてむ国のため命をすてし人のすがたは（明治三十七年）

折にふれて

かぎりなき世にのこさむと国の為たふれし人の名をぞとどむる（明治三十七年）
をりにふれて

万代よろづよもふみのうへにぞのこさせむ国につくししおみ臣の子の名は（明治三十八年）

写真

国のため命をすてしますらをの姿をつねにかかげてぞみる（明治三十九年）

をりにふれて

身をすてていさをたてし人の名は国のほまれと共にのこさむ(明治四十五年)
戦死者の写真をかけさせ給ひ、その名をとどめのこさせ給ひし大御心をあふぎまつるべきである。

また戦死者の家族の悲みをしのばせ給うては、

親

国の為たふれし人を惜むにも思ふはおやのころなりけり(明治三十七年)
折にふれて

たたかひに身をすつる人多きかなおいたる親を家にのこして(明治三十七年)

子

みなし子にかたりきかせよ国のため命すてにし親のいさをを(明治四十年)
とよませ給ひ、また戦死者をあはれみかなしみのび給へる大御歌

折にふれて

戦のにはもたたであた波に沈みし人の惜しくもあるかな(明治三十七年)

年へなば国のちからとなりぬべき人をおほくも失ひにけり(明治三十七年)

はからずも夜をふかしけりくのため命をすてし人をかぞへて(同)

よとともに語りつたへよ国のため命をすてし人のいさをを(同)

くのため心も身をもくだきつる人のいさををたづねもらすな(同)

をりにふれて

むかしよりためしまれなる戦におほくの人をうしなひしかな(明治三十八年)

身をすてし人をぞ思ふまのあたり軍いさのにはのこをきくにも(同)

をりにふれて

ますらをも涙をのみて国のためたふれし人のうへをかたりつ(明治三十九年)

また

をりにふれて

国のためうせにし人を思ふかなくれゆく秋の空をながめて(明治三十九年)

の大御歌ををろがみよみまつれば、国のため身をすてし民をあはれませ給ふ大御心をあふぎまつりて涙をもよほさしめらるとともに、大御歌のひびきはとこしへにわれらの

心にとどめしめらるるのである。秋のあはれとかなしさをよみて、かくばかりいのちのちからのこもつた歌は、まことに稀有である。これまた天皇の大御歌であるからである。

また戦傷者・癡兵はげいの上をしのばせ給ひ、兵士とともにたふれし軍馬をもあはれませ給うたのである。

をりにふれて

国の為つくさむ力ありながらたたれずなりし人をしぞおもふ(明治四十一年)

をりにふれて

国のためにたたれずなりし民草めぐみに恵の露をかけなもらしそ(明治三十九年)

軍馬

たたかひの場ばにすすみて乗る人と共にたふれし駒こまはいくらぞ(明治三十八年)

祖国のためにつくすといふことは、戦死にきはまるのであるが、一般奉公の責務をはたすことが道徳の基本法則である。ウントは、一九一四年の戦時小冊子『真の戦争に就いて』の終りに、『されば吾人をしてこの重大時機に於いて、またこの時機をすぎても

ながく、われらのカントの「人間にとつての最高のものは義務である、また此の世のたからのうちの最大のものとは道徳的意志である」といふ戒めを記憶せしめよ』といつてを

述懐

たたかひの道にはたたぬ国民もちぢに心をくだくころかな(明治三十七年)

国をおもふみちにふたつはなかりけり軍いくさの場にはにたつもたたぬも(同)

この大御歌からして、戦死につながらしめて一般国民的責務遂行の道徳的事実及び法則についての大御歌を拝誦しようとするのである。

六 義 務 — その一 —

をりにふれて

たひらかに世はなりぬとて敷島の大和心よ撓たわまざらなむ(明治三十九年)

心

ことなしとゆるぶ心はなかなかあたに仇あるよりもあやふかりけり(明治四十二年)

事ある時に祖国防護のために戦死したるものの霊は、神、すなわち祖国無窮の生命の
開展としての護国綜合意志にとけ入らしめらるるのである。しかしながら、事なき平和
の時においても、事ある時のそなへをなすべきで、油断すべきではない。戦時・平時の
区別なく祖国防護の用意をなして、国民精神を弛廃せしむべきではない。

をりにふれて

いたづらに時を移してことしあればあわただしくもたちさわぐかな(明治四十二年)
これまた平生(へいぜい)の用意を、即ち戦時・平時・有事・無事の区別なく国民がその義務をつ
くすべきを、をしへ給ひし大御歌とあふがしめらるるのである。

述懐

よの中はたかきいやしきほどほどに身を尽すこそつとめなりけれ(明治三十七年)

たたかひの道にはたたぬ国民もちぢに心をくだくころかな(同)

国をおもふみちにふたつはなかりけり軍の場にたつもたたぬも(同)

戦時に於いて、戦場におもむくものもまた戦場におもむかぬものも、その身分・職業
に依じて国のためにつくすべきである。国のために尽すことは、個的生命を全体生命に
とけ入らしむること、戦死者の場合と同じである。

折にふれて

なりはひはよしかはるとも国民の同じこころに世を守らなむ(明治三十七年)

をりにふれて

こころざす方こそかはれ国を思ふ民の誠はひとつなるらむ(明治三十八年)

身分・職業また分担任務は各別であつても、それは『国を思ふ』といふ原理にすべをさめらるべきである。各人はその義務をつくすべき職分を決定してこれを遂行することによつて、不安を懐いて疑ひ迷ふことなき確信をえて、勇猛精進すべきである。

道

ころざす方を定めて皆人の世にたつ道にまどはざらなむ(明治三十九年)

とよませ給ひたるにも、義務遂行は、単に奉公の犠牲をはらふのみではなくして、世にたつ道にまどはず、内に安心をうることであるときとらしめらるるのである。されば、

義

身にあまるおも荷なりとも国の為人のためにはいとほざらなむ(明治四十二年)

おのが身はかへりみずして人のため尽すぞひとの務なりける(同)

とをしへ給ひしとあふがるるのである。おのが身をかへりみずして国のため人のためにつくすといふことは、それが正義の人生事実内容である。正義の内容は義務であり、義務遂行は、その遂行者に安心をあたへ、確信をあたへ、勇気をあたふるのである。

中庸に『君子素ニ其位ニ而行』とあるも、かういふ意味に解釈して日本思想に同化せしめてこれを

攝取すべきで、それがただちに『不^{ソレ}願^{ハカ}乎^カ其^カ外^ガ』とつづくのは、その言葉は、限りなき人間の欲望と一般情意的要求とを無視して、これを理知的に整理して固定せしめ、総合的具体性を失つて、抽象的理論となるのである。概念的認識と抽象的理論とが、同時に芸術的表現の具体性を有することは、日本思想と日本語との本質的特色である。近世国語としての日本語が、此の言語の原始的特質としての、情緒表出性を保つてをるといふことは、それと漢文との比較によつても気づかしめらるのである。日本語が感覺的・直接的であるといふことは、それが未発達であり、その原因をたづぬれば漢字漢文の混用に基くものと見らるのであるが、またそれは、日本思想・日本精神の芸術的直観性綜合性に基くもの、といふ根本的理由をわすれてはならぬのである。

この日本語は詩としての和歌によつて、その直観的具象性をたまちつつ、同時に、一般抽象的道徳法則をあらはすので、ここにその『すなほ』であるといふ本質が示さるのである。ここに芸術と科学と、直接的表現と間接的思想とが平行随伴し、相互補足せしめらるのである。

さうしてこの義務遂行は、すなわち『民のなりはひ』であつて、そこに『ことしげき世』が開展せしめられ、また『ちよろづの民の力をあつむる』全国民の協力が、にぎはしく相互にたすけあひつつ、目的をつらぬきとほす威力となつて実現せらるのである。

以下に引用しまつる大御歌は、みな『民のなりはひ』を思はせ給ふ大御心よりよませ給ひしものであつて、単にある形式的教義理論をしめし給ひしものではないのである。

されば、国民の義務をつくすべきををしへ給ふ大御心は、やがて国民のなりはひを畏くも同感せさせ給ふ大御心である。

旅中情

草まぐら旅にいでは思ふかな民のなりはひ、さまたげむかと(明治三十六年)

旅宿夢

まぢかくもたづねし民のなりはひをこよひ旅ねの夢にみしかな(明治三十六年)

折にふれて

なりはひはよしかはるとも国民の同じところに世を守らなむ(明治三十七年)

さわがしき風につけても外国とづくににいでて世渡る民をこそおもへ(同)

をちこちの県守あがたもるひとつどひけり民のなりはひとはせてを見む(同)

旅中述懐

なりはひの暇いとまなき世を思ふかなしづが手ぶりをまのあたりみて(明治三十八年)

をりにふれて

花見つつ遊ぶ春日におもふかな耕たがへす民のいとまなき世を(明治四十年)

おのがじいつとめを終へし後にこそ花の陰にはたつべかりけれ(明治四十年)

宝

世の中にひとりたつまでをさめえし業こそ人のたからなりけれ(明治四十二年)

遊戯

世わたりの道のつとめに怠るな心にかなふあそびありとも(明治四十二年)

祝言

なりはひをたのしむ民のよろこびはやがてもおのがよろこびにして(明治四十二年)

工たくみ

外国におとらぬものを造るまでたくみの業にはげめもろ人(明治四十三年)

をりにふれて

みちみちにつとめいそしむ国民の身をすくよかにあらせてしがな(明治四十三年)

をりにふれて

国民の業にいそしむ世の中を見るにまされる業たのしみはなし(明治四十五年)

終りの一首は国民のその業にいそしむべく、またその業にいそしむを見そなはし給ふ

をよろこばせ給ふ大御心を、うたひ給うたのである。また、民のなりはひをしのばせ給ひしこれらの大御歌ををろがみよみまつりてのち、

述懐

千万ちよろうの民の力をあつめなばいかなる業わざも成らむとぞ思ふ(明治四十一年)

民

千万のたみのちからを集めてぞ国はゆたかになすべかりける(明治四十四年)
の二首ををろがみよみまつり、また

業

千万の民と共にもたのしむにます業たのしみはあらしとぞおもふ(明治四十三年)
の大御歌ををろがみよみまつれば、義務をつくし、生業にいそしみ、職分をはたすべき道徳的法則、また道徳的命令は、それをささふところの全国民協力から生るる祖国無窮の生命につながり、抽象的理論と概念的法則とは、目に見えずとも、しかしながら言のはのみちとして耳にひびき、また心に味はるところの、直接経験に結びつけらるることをうなづかしめらるるのである。

七 義 務 — その二 —

カント哲学は、現日本にとつては實際の官学ともいはるべきものであるからして、その『実践理性批判』に於ける彼の公式『汝の意志の格率が、常に同時に一般的立法の原理として妥当たるべきやう行為せよ』を批評して、それを日本精神と対照せしめよう。

カントの道德律は先天的のもので、經驗に先^きだ、それに依らずに成立し、實際的適用の特殊条件に煩はされずに妥当たるべきものである、とするのであるから、それは無条件義務命令である。此の道德律は、人間行為の官能的動機から説明すべからざるものであり、またそのみならず、官能的動機はこの道德律と相反するものであるとするのである。

桑木岐翼博士は、『カントと現代の哲学』に於いて、此の無条件命令を説明して、『範疇の統一を受けて先天的性質を帯び得る所に知識の知識たる所がある如く、道德の道德たる所は正しく其の先天的即ち普遍妥当的必然的たる所に存するのである。然らば如何にして道德に於て此^{こゝ}普遍妥当性を保証すべきか。曰く、凡て行為が欲求に動かされれば經驗的で先天的とならないから、之を離れ

ばよい。……換言すれば自己が經驗的欲求的自我より轉じて先驗的理性的自我たるに至つて道德的法則が実行せられるのである』といひ、また『かく見て道德的法則は、理性的人が感性的人に対する命令といふことが出来るのである』といふ。

この人間の官能的欲求と道德律との抗争からしてカントは『良心』を導き出して、それをして、吾人の行為が道德律に適合するか否かを裁断せしめようとするのである。

此の良心説と、また道德律と官能的欲求との対立といふことに於いて、カントの倫理学は基督教道徳と頗る近似してをる。これは、理論的認識を官能的世界に局分し、それを人間叡智から発する実践的自由と対立せしめたと同一筆法を用ゐたものである。この形式と内容との分離といふことは、元來、直接經驗の人生事実に形式の無い内容もなく、内容の無い形式もないのであるから、そこに錯誤を生ずるのである。先天的叡智的形式と經驗的官能的内容といふ対立がそれである。カントに於いては、道德律は形式原理であるからして、無条件命令は經驗的行為内容に適用せらるべきものであり、また一方では、此の經驗的内容は先天的形式と抗争するといふことになる。即ち道德的と官能的との抗争といふことは、道德的形式と官能的内容との抗争といふことであるが、単に形式としての道德的法則といはるるものも、実際には、それが官能的内容と抗争するには、単に形式だけではなく内容を有するものであるけれども、それをカント流の公式化によつて覆蔽したものである。これは浄土穢土対立説と同じことであつて、浄土は現実穢土生活經驗に基き、そのうちの極楽的内容をのみ有するものを浄土とし、それを穢土と対立せしむるのであつて、欣求浄土に純化せら

れたるところの、人間官能的欲望のあらはれに外ならぬのである。心理的動機なしになさるる人間行為はなく、学説教義の開展もまた、それは人間の所為であるからして、それは人間行為の法則に従ふべきものである。元来カントのいふ先天的形式といふものは、経験的内容に整齐を加へ、そしてそれを先天的と名づけたに過ぎぬのである。故に先天的を説くものは、超越的形而上学的神を説くものと同じく、その動機をたづぬれば、自己を神としようとするものである。高尚なるが如く見ゆる道徳説の多くが、自我觀念利己欲望、又は自矜感情を、その実内容とするものであるのも同じことである。

学匠沙汰をするものに対して、自力難行道・聖道門の名をあたへ、実人生の無極開展と複雑関聯（じりきななむぎようどう しんどうもん）とに随順する他力易行道・浄土門（たりのきいようどう じょうどもん）をとなへた親鸞（しんらん）の宗教改革と、啓蒙思潮の完成者としてのカント思想、又は親鸞以前の日本仏教と対照せしむるときは、認識と体験と、また、科学と芸術との融合による生命化的調和統一をなすべき国民精神の開展に於いて、日本が先進国であるといふ事実を明かにし、『やまとだましひ』としての国民性格の威嚴を知り得るのである。

しかるに現日本に於いては、早稲田大学教授・安部磯雄氏は、大正十四年（一九二五）二月発行『中央公論』誌上の『学校教育を社会生活より分離する迷妄から』といふ論文中に、『古来日本人には哲学がないと云はれて居るが、それは哲学の有無の問題ではなく、元来我国には思想の發達がないといふのが本当である』といつてをる。これは随分極端の意見であるが、これが流行新思想としての社会主義思想の先達の一人の意見である。

また、カントの無条件命令には、『一般的立法』といつて、そこに能動的自我のみでなく、多数行為者を予想せしむるといふことは、それが純先天的でないことを明かにする。複数の道徳的人格といふ概念は、比較の後に意識に入り来るところの外的経験である。すべて純論理的概念関係も、経験的行為から抽象せられたるものである。

元来カントの倫理学は、基督教徳の禁欲精神とルツテルの活動的信仰とをつたへ、北方ドイツ人の厳粛人生觀を反映したものであつて、之を『人權宣言』の權利過重思想に比するときは、その義務感の厳格なることにその特長を認めねばならぬのであるが、しかしながら、カント思想の弱点は、その形式主義から、抽象的靜觀主義となり、個人的瞑想主義となり、利己的自矜主義となり、つひには非現実的・反祖國主義となり、外國の思想宣伝に対して抵抗力なき夢想的空論家を養成するに至るのである。

カント思想に対照せしめて、日本精神の『義務』思想内容を宣説することは、現日本國民思想の趨向に対して刻下の急務である。

八 個人と国家 「その一」

寄玉述懐

きずなきはすくなかりけり世の中にもてはやさるる玉といへども(明治三十七年)

玉

さまざまの玉をあつめてきずなきはえがたきものとさらにしりぬる(明治三十八年)

玉

人みなのをらびしうへにえらびたる玉にもきずのある世なりけり(明治四十三年)

宝ともいふべき玉はなくならむこまかに瑕きずをもとめいでなば(同)

しらすを光なしともおもふかな磨きたらざること忘れて(同)

聖人君子といひ、完全なる個人人格を観念することは、人が自然または外物につかへ

てをつた時代の名残なごりである。外界に不可思議威力をみとめ、それをまさに目さめようとする個我に結びつけ、ここに個人主義的自我覚醒と個人解放とが実現せられつつ、同時に、自己を神化せむとするに至るのである。カントの『先天的』に宗教臭味のあるのは、そこに此の自己神化思想がひそむからである。それを誇張すれば、明治時代に現はれた『自称神仏』思想、または『举世混濁而我独清』（にしてひとりきよし）といふ、すべて『世間を軽かろんずる』（山鹿素行『謫居童問』）思想であつて、經驗的と先天的とを分つのは、浄土じやうどと穢土えいどとを分つと同じ心理的動機が、各別の史的条件の下に表出せられたものである。それらはすべて魔力信仰の余波である。知識、富財、地位、権力、それらは必要でありまた意義あるものであるが、それに偏執へんしゆうするとき、そこに原始的魔力信仰が、諸種の近世的形体をとって現はるのである。

ひるがへつて『玉』の大御歌を拝誦しまつれば、個人の未完成・不完全を信知せさせ給へばこそ、きずなき玉はえがたし、とはよませ給ひたるなれ、とあふぎまつるのである。

カントの義務道徳論とフランス革命の人権宣言とを比較すれば、そこに義務を説くこ

とと権利を説くこととの著しき対照をみとむるのであるが、しかしながら、それら二つの思想の眼中に置くところのものは、ひとしく個人人格である。その当時にあつては、個人を解放し自覚せしむることは切実に要求せらるべきであり、またそれは、各時代の各国民にとつてその歴史・社会的条件によつてそれぞれの程度に要求せらるべきであるけれども、それをそのまま今日に適用すべきではない。

個体自我に魔力的神仏思想の名残をとどむる思想にあつては、国家・社会がそれ自身の生命・精神価値を有する事は信知せられずに、それは個人道徳性開展の補助手段となるのである。カントの国家観が民約論の支配下にあるのは此故である。

まことの人は、『きずある人』である。『自由平等人』は、『聖人君子』とともに、考へられ作られたる抽象虚仮人であつて、眞実人ではない。カントの義務道徳論とフランス革命の『人權宣言』とは、個人主義の同じ根から発した個人的義務思想と個人的権利思想とである。

此の『個人主義』にうちかつことが十九世紀の仕事であるべきであつたが、所謂『社会主義』はこれを成就しなかつたのである。抽象平等完成個人の迷信を去れば、そこに

は名利愛欲の生成眞実人が、全体生活の協力のうちに没入しようとする。

○
鄰となり

さしなみのとなりにかよふ道ならむ籬まがきの竹のひまのみゆるは(明治三十九年)

さしなみのとなりの人をたのみにてひとりや老おいが庵いほにすむらむ(同)

山家鄰

谷川のおなじ流ながれの水くみて鄰となりへだてぬみやまべのさと(明治四十一年)

全体生活への没入、また共同責務(ソリダリテ)、公共心(ゲマインジン)、四恩等の思想に共通するところの自然随順の没我意志は、まづ隣保生活からはじまるのである。此の公共心の基礎は、その民族の政治的独立である。希臘人ギリシヤがその政治的独立を失はうとして、その道徳観がその特殊具体的の政治・社会制約から離脱せしめられ、個人的であり同時に一般人類的の個人主義と世界主義とが、現実的威力ある公共心に代つた時に、ここにストア派の高踏静観枯淡主義とエピクルス派の寂靜隱遁回避主義とが、人生蔑視の嚴肅主義と快樂主義とを爛熟文化の亡国的頹廢的生活に於いてその表裏に展転せ

しめたのである。山鹿素行が、『その後宋朝にいたりて道学・心学のさた初まりて、学文高尚にいたり、日用の実知日日に昧、学者山水を楽しみ文書を事とし世をそしり、人の非をあらため、出て可事主人なしと思ひ、皆山林に蟄居す。さしも才知あるべき輩も、学のためにまどふて其知を忘失し、君をたすけ世を政すること非ず』(『謫居童問』)といふのも、すべて個我執着の弊を説いたものである。

○
聖徳太子が、十七条憲法に於いて『我必ズシモ非レズ聖ニ。彼必ズシモ非レズ愚ニ。共是レ凡夫耳』と仰せられ、最後に『十七ニ曰ク。夫事ハ不レ可カラニ独リ弁ズ。必ズ与レ衆宜シレ論フ。小事ハ是レ軽シ。不レ可カラニ必ズシモ衆トス。唯速ニ論ズルニ大事ヲ若シクハ疑フ有レ。失。故ニ与レ衆相ヒ弁ズレ。辞則得レ理矣。』と結ばせ給ひたるも、個我の『私』を全体の『公』に没入せしむべきを説き給へるもの、とあふがしめらるるのである。ここに『十五ニ曰ク。背私向公。是臣之道矣』といふは、『臣之道』としての義務遂行の道徳律のみちびき出さるべき原理である。

山鹿素行はまた、『次に去^ル惑^ヲと不^レ惑^ハとの心得あり。去^ル惑^ヲと云^ハ、可^キレ惑^ヲものを捨^テ去^ルの心也。是^レ聖人の教^ヲにあら^ズ、多^クは異端の沙汰^スする事也。聖人は不^レ惑^ハと教^ヘたまふて、惑^ヲを去^ルに不^レ及^バ、唯惑^ヲをわきまへて、惑^ハはざるのみ也。惑^モ亦^タ人の情^ニにして、人々未^ダ嘗^テ無^クニ此^ノ惑^ニ、唯惑^ノ中^ニにおいて不^ル惑^ハごとく可^キレ修^ムなり』といひ、またそのつづきに『惑^ト云^ハものを詳^ニに弁^マへ不^レ知^ラば、惑^ト云^ハも正^ト云^ハも、ともに惑^ニにして實地^ニに不^レ有^ラなり』(『謫居童問』)といふ、この『實地^ニ』といふは、ヴントがしばしば用ゐるところの in der Tat といふことばを聯想せしむるのである。

親鸞は『恆^ニ願^フ一切臨終時、勝縁勝境悉^ク現前^ス』の『恆』を『恆はつねにといふ、願は、ねがふといふなり。いまつねにといふは、たえぬところなり、をりにしたがうて、ときどきもねがへといふなり。いまつねにといふは常の義にはあらず、常といふは、つねなることひまなかれといふところなり。ときとしてたえず、ところとしてへだてずきはぬを常といふなり』(『一念多念文意』)と説明してをる。これを隆寛の『一念多念分別ノ事』と対比せしむれば、親鸞は、人生の自然の開展と情意の世界の律動とに随順しようとする思想に徹底したるものなることを明かにするのである。『をりにしたがうてと

きどきもねがへ』といひ、『惑を去るに及ばず』といふ現実随順の日本精神の局分せらるることなき協力同信生活の無極の開展は、完成を個人に求めずして、力無きひとりの老人の隣となりの人をたのみ、隣となりの人はこれをたすくるところの隣保生活からはじまるのである。

『徳ハ不レ孤ナラ必ズ有リレト鄰ト』といふ如きは、徳といふ完成個我の力を説くのであるが、完成せざる個我が、たすけあふといふ生活事実から出発するのが日本精神である。『素シテ其位ニ而行フ』を心がけつつも『不レ願ハニ乎其外ヲ』といふわけにはゆかず、分外ののぞみをも起しつつも、『素其位而行』をつとむれば、『其位』も進展変化すべきであるからして、ここに『素其位而行』といふことから、『其外』に到達すべきである。故に『不レ願ニ乎其外ニ』といふことは、自我的又は利己的要求から『明哲保身』の個我道德となり、『義勇奉公』の日本精神と背馳しようとする思想趨向を示すのである。

九 個人と国家 — その二 —

○ 寄道述懐

白雲のよそに求むな世の人のまことの道ぞしきしまの道(明治三十七年)

しきしまのみちは、故にまた人生法則は、これを現世の外に、現実をはなれたる理論に求むべきではなく、それをこの世の人のあるがままの現実生活のうちに求め、またそれによつて現実生活をみちびくべきものである、とこの大御歌を解しまつりて、藤原頼長が『台記』に西行法師について、『自俗時入心仏道。家富年若。心無愁。遂以遁世。人歎美之也』と記して、出家遁世生活に対する当時の個我執着思想を描写したるものと、また山鹿素行がその『士談』に於いて、駿河清見寺の雪斎と今川義元、本願寺顯如

上人光佐と織田信長の關係其他同種類の史実をあげて、『僧にして武義に長ぜるは、其職に非あらずといへども、亦風流の一事なり』といつてをるのとを比較すれば、そこにはカントの個我思想と、フイヒテ晩年の活動的現実精神との対比をしぬばしめらるるものがあるのである。故に今日に於いては、出家遁世といふ如きは、所謂『隱居』ではなく、之を發心はつしん入信として内的化するとともに、外的生活形式としては学校生活化せしむべきで、また史上の宗教と寺院とは、今日の科学と学校とであつたことをかへりみるべきである。

学問

○ 事しげき世にたたぬまに人は皆まなびの道に励めとぞ思ふ(明治三十七年)

或は権利を、或は義務をのみ偏倚的に説いて、それが個人主義にとどまつてをれば、知能を偏重する理智主義に囚はるるに至るのである。『智能の啓発』は第一に必要なであるが、最も重要であるのは『徳器の成就』である。職業に堪能であるとともに誠実であらねばならぬ。此の知識と徳性と、権利と義務と、個人と社会と、それらの道徳的思想

問題は、現日本の哲学的又一般思想的考察の中心とならねばならぬのである。

その自我と全体との関係は、また理論と人生と、知能と情意とのそれとともに、世界現勢によつて促迫せられて、日本精神が覚醒せしめらるる時に明かにせらるべきである。そのためには、知識の能力とともに体験の威力をかへりみるべきである。

折にふれて

さまざまのうきふしをへて呉竹くれたけのよにすぐれたる人ところなれ(明治三十七年)

道

おのが身を修むる道は学ばなむしづがなりはひ暇いとまなくとも(明治四十年)

行

やすくしてなし得がたきは世の中の人のひとたるおこなひにして(明治四十年)

これらの大御歌は、実人生の体験に基きて徳性の修養をなすべきをさとさせ給ひしもの、とあふがしめらるるのであるが、これを

学生

世の中の風にこころをさわがすなまなびの窓にこもるわらはべ(明治三十八年)

と、あまりにはやく実世間的関心の世界にふるるをいましめさせ給ひたる大御歌とともに拝誦しまつれば、科学的認識と人生体験、学校修業時代と実世間活動時代との展開にともなふ相互補足関係をさとらしめらるるのである。これをまた

卒業生

ものまなぶ窓をはなれていまよりは国のつとめにたたむとすらむ(明治三十七年)

今はとて学のみちにおこたるなゆるしの文をえたるわらはべ(同)

の大御歌とともに拝誦しまつれば、ここに成人教育の原理をもあふがしめられ、人はみな終生学習すべきをさとさしめ給ふにつけても、科学的認識も、それが『しきしまのみち』に関し人生に関する範囲に於いては、それを『白雲のよそに』求むべからざることとさとらしめらるるのである。

○

此の個我と全体と、個人と国家との関係を明かにするといふことは、弁証法的解釈によらず、心理学的研究によつて科学的正確をもつて成就せらるべし、と概括的にいひ得るのであるが、その心理学の背後には、実行を用意しつつ芸術的に表現せらるるの人生

観を要するのである。故にいまここに、此間このかんの消息を实例によつて示教するところの、
 フイヒテの『独逸国民に告ぐ』から二三の引用を試みよう。

○

『又始めよりこの人類社会の状態に全く無頓着に国家及び国民の生活から隠遁するこ
 とを、真の宗教的思念なりとして奨励するが如きも、宗教の甚しい濫用で、殊にキリス
 ト教のしばしば犯した誤りである。』『しかし事物の規則、正しき秩序からいへば、現世
 の生命そのものが既に真の生命でなければならぬ。』『さて是等高尚なる人の事業の永
 遠不滅に対する要求と信仰とに保証を与へ得べきものは何であらうか。それは明かに斯
 くの如き人々が、永遠と認め又永遠なるものを取り入るる力ありと認めたる事物の秩序
 である。斯くの如き秩序は、素より概念に依つて捕捉することは出来ないけれども、実
 際に存在せる人間環境の特別な精神的世界で、そは、かかる高尚なる人の思惟、行為
 及び永遠の信仰の源泉となるもの即ち、国民である。』『彼れは只不朽の泉としての生命
 を希ねがうたのであつた。しかしながら斯の如き不朽の望みを彼れに与ふるものは、彼れの
 国民の独立的存続を措いては外にはない。』(文部省発行・大津康・訳の同書による)

○
これをカントが『わが上なる星空とわが内なる道德律』といふ、その道德律について
自己の価値自己の人格を説き、それは現世の制約にわづらはされぬものであるといふ自
己静観に比較すれば、ここにフイヒテ晩年の創造的行動我の思想の生命をさとしめら
るのである。ナポレオン侵略時代の苦難と屈辱との痛感によつて、国民的同胞感がめ
さめしめられ、啓蒙時代の抽象的個我道德やロマンテイクの主観的耽溺感情は、一掃せ
られたのである。山鹿素行のいふ『実学』を信知実現したフイヒテは、祖国の運命に無
関心ではをられなかつたのである。ここに於いて、その属する全体生活に個我を没入せ
しむることから、一切の徳行は分派せられ、自我のみを顧念することから、一切の罪惡
が発生せしめらるることを知り得るのである。

○
個人を社会国家また民族団体に結びつくるところのものは、まづ第一に同一の国語で
ある。国語の生命の躍動のままに永久生命をいくるものは、『詩』である。それは『う
た』であり、『しきしまのみち』である。それは人生の根本原理である。故にすべての

歌は、個人を全体に結びつくるのであるが、いまここにその知的内容に於いても、個人と全体との関係を明かにすべき原理をしめさせ給ふ大御歌を拝誦しようとするのである。

をりにふれて

あやまたむこともこそあれ世の中はあまりにもものを思ひすぐさば(明治四十五年)

この大御歌は、個我静観に陥ることなく、冥想世界に極楽浄土を夢みることなく、人生表現の詩に支持せらるる直観によつて、迂回の思弁を排除しようとせさせ給うたのであつて、現世と肉体とを厭離おんりして、彼岸の常楽土を憧憬しようとする、超感覺的教義に對して、道を『白雲のよそに』求むべからずといふ現実随順の日本精神を表現せさせ給ひしものとあふがしめらるのである。

この现实生活は社会国家生活であつて、それは、人間の政治的本能を開発せしめようとするものである。真諦俗諦また僧俗を分つに對して、聖徳太子は御身みづから非僧非俗の範を示し給ひ、親鸞は现实生活そのままを名利愛欲煩惱熾盛しせい罪惡しんちよう深重の生活として、個我の自力修行によらず、全人類生活の自然開發に随順しようとし、それを眞実生

成人、すなはち悪人救済の他力浄土門・易行道としての本願随順、又は世界人類意志随順の無宗派的真宗を唱へたのである。これは、仏教史上に於ける日本精神の心理学原論としてのあらはれであり、また個我没入の信心であつた。

十 建国の事実と精神 — その一 —

○

思往事

さまざまのことにあたりて思ふかな国ひらかしし御代みよのみいつを(明治三十八年)

道

千早ぶる神のひらきし道をまたひらくは人のちからなりけり(明治三十六年)

古典

石上いそのかみふるごとぶみをひもときて聖ひじりの御代みよのあとを見るかな(明治三十九年)

書

いそのかみふるごとぶみは万代よろづよもさかゆく国のたからなりけり(明治四十三年)

これらの大御歌ををろがみよみまつりて、更に個人と国家との関係から、建国の意義を論究しつづけ『国ひらかしし御代』といふ大御言葉を、精神科学的見地より註釈しまつらうとするのである。肉体と現世とを厭離するものにとつては、政治生活は俗悪生活であり、つひには、無国家生活を理想生活とするに至り、それは、事実としては個我享楽・物欲追求の亡国生活となるに至るのである。故に個人と国家との関係、また個人主義と全体主義、それから派出せらるる理知主義と情意主義との関係は、哲学的・倫理的・法律学的又一般思想学術の見地から極めて重大である。

仏教教義は、親鸞によつてその心理学化が成就せられたのであるが、それは一般仏教教義としても、仏法・王法の相互補足関係を確立して、鎮護国家の理論と儀式とを發展せしめたのである。儒教及び一般支那思想の日本化に就いては殊にいふまでもなく、基督教もまた最近、河村幹雄氏によつて日本精神化せられ、『基督の信について祖国愛のうかがはるる節々』(『人生と表現』大正十一年—一九三二十一月号)に於て、『イスラエルの迷へる羊の外に我は遣されず』(『マタイ伝』)の語を引いてイエスの『忠』を論じ、また『噫エル

サレムよエルサレムよ、預言者を殺し爾に遣さるる者を石にて撃つものよ、母鶏の雛を翼の下に集むる如く、我なんちの赤子を集めんとせしこと幾次ぞや、然ど爾曹は好まざりき』(マタイ伝) の語を引いて、『かくまで祖国に忠であつたイエスが、己等の力足らずしてイスラエルを救ふ望少しと観取し始めた時の悲は察するに余ある』といひ、また『亡国の悲を具に嘗めたハンガリアの志士コストトの悲痛なる雄弁にも、斯る深き哀の声を聞かぬ。開ける眼を以て新約福音書を読む者は、「原理イスラエル」によつて生き且死んだユダヤの愛国者イエスの「忠」を見逃すことはできぬ。バプテスマをヨハネに受けて後四十日を荒野に過してから死に至るまでの彼の一切の行動は、ただ祖国イスラエルを目標として為されたのである』といつてをる。

○

国

よきをとりあしきをすてて外国におとらぬ国となすよしがな(明治四十二年)

宴

たまだれの内外の臣をつどへつつうたげする日ぞ楽しかりける(明治四十二年)

祝言

まじはりをむすぶくにぐによるこびをいひかはす世ぞ嬉しかりける(明治四十二年)

仁

いつくしみあまねかりせばもろこしの野にふす虎もなつかざらめや(明治四十二年)

人

をちこちにわかれすみても国を思ふ人の心ぞひとつなりける(明治四十三年)

工たくみ

外国におとらぬものを造るまでたくみの業わざにはげめもろ人(明治四十三年)

道

人の世のただしき道をひらかなむ虎のすむてふのはてまで(明治四十五年)

これらの大御歌に、個人主義的であり同時に世界主義的である理知的合理主義に対して、世界文化を摂取同化すべき情意的・行動的日本精神の総合的創意性をあふぎまつるのである。

悪魔、魔力を信じ、それを神仏として漸次に人間化しつつも、現世の憂患と人生の

無常から到彼岸・往生極楽おうじょうごくらくによつて解脱しようとし、地上の生活を天上界のそれに对照せしめて之を厭離しまた蔑視しようとし、したがつて、社会政治生活を、また国家そのものの価値をも否定しようとする思想に対して、所謂啓蒙思想は、その趨向を助長するのみであつた。啓蒙思想は、個我の覚醒であり、理智の独裁であつたからして、国家を個我生活の便宜のために案出構造せられたる、故にまた解体消滅せしむべきものと考えたのである。故に啓蒙思想は、現実生活厭離・国家蔑視の中世的宗教思想を強調するに役立つたのである。それは人間生活の価値を味識徹鑑せずして、皮相によつて之を量定しようとしたのである。それは、生成発展する人間生活を発明工夫したものと見たのである。そこでは言語は符号の体系であり、国家は拡大個人であり、また個人の集積であつたのであるから、それはつひに個我執着の狭小世界に踞踏したのである。そこでは、物心を二つの実体とするのであるが、その心といふのが物の反映に過ぎぬのは、世界をも個我の拡大と見ようとして、個我を小宇宙とすると同じである。此の啓蒙思想の余効は、今日に於いてもマルクス思想を中心として、偽新思想として流行しつつあるのである。

言語、習俗、宗教等に於ける人生觀的一致は、そこに一定民族の全体生活としての開展を示すものである。個人生活は、此の民族生活の流れに起るさざ波であつて、此の諸民族生活は、人類世界の大海にあつまるのである。この民族生活は、渾融統一せられてその全体意志に一定の秩序形式を与へ、実行威力をそなふるとき、ここに国家が生るのであつて、それが『建国』である。此の国家の基礎は、『同一國語民族』である。この同一國語民族が、その全体生活組織を開展せしめて、そこに『全体人格』を生成せしむるに至るのである。しかしながら此の国家全体人格は、直接個體的・生理的基礎を有する統一體ではなく、独立個々人の多数の相互關係から生成するところのものである。此の民族社会から生成する国家として最勝のものは、『君主國』であつて、地理的領域の拡大と歴史的伝統の久遠と、ことに近世國家の文化問題と施設事業との複雑化は、その解体分裂の危険と利害争闘の困難とをひき起すのであるからして、党争と利害とに超越して、天皇の大御身に国家全体人格を表現せさせ給ひ、過去の歴史と将来の理想とを『天壤無窮の皇運』として現しく万世一系の皇統にしめさせ給ふ皇室をいただ

く、大日本帝国臣民はその幸慶を思うて、世界に於ける日本の文化使命遂行の難事業に協力せねばならぬのである。

われら日本人の個我が日本全体意志に没入せしめらるべき『忠義』道德原理は、義務遂行の道德法則を統制すべきである。

○

落花

ときのまに散りゆくものか桜花
こころの日数人ひかずにまたせて(明治四十年)

人みなの惜む心はしりながら
かぎりある世と花のちるらむ(同)

この大御歌はうつし世のはかなきさまをよまましものであるが、さればとて世をはかなみて静観冥想のうちに理想世界をゆめみるべきではなく、この世は『かぎりある世』なればこそ、この世にあらむかぎりは世のためにつくさむとすべきをさとさせ給ふのである。

折にふれて

うつせみの世のためすすむ軍いくさには神も力をそへざらめやは(明治三十七年)

此の『うつせみの世のため』とは、現実各国民生活を人間行為の対象としめさせ給ひしこととあふぐべきである。

をりにふれて

なすことのなくて終らば世に長きよはひをたもつかひやなからむ(明治四十五年)

此の大御歌により、『かぎりある世』なればこそ、個我は全体のためにはたらくべきを、個人生活の無常儻忽しゆくこつなればこそ、国家永久生命のためにはたらくべしといふことを、かへりみしめ給ふのである。

人間の欠陥と人生の無常とを体験しつつも、現実生活を回避せずして個我を全体に没入せしむべき『忠義』の道德原理を確立するにいたつたことは、現実的直接経験に随順する日本精神の創造的綜合作用である。

十一 建国の事実と精神 — その二 —

人

かくばかりことしげき世にたへぬべき人をえたるがうれしかりけり(明治三十七年)

忠

まめやかにつかふる臣おみのあればこそわがまつりごとみだれざりけれ(明治四十三年)

建国精神は、明治の大御代に世界的日本の曙光としてかがやき出いでたのである。故に『明治天皇御集研究』は、明治時代史研究の各方面の作業と協力し、またそれについて、現代史的研究としての時事評論によつて補足せらるべきものである。ここに古代と現代とは相むかはしめられ、古事記研究と明治天皇御集研究とは相ともなはしめらるべきである。

をりにふれて

ひと筋をふみて思へばちはやぶる神代の道もとほからぬかな(明治四十三年)

国民各員は全国民生活に没入するとともに、過去の遠き史的な生活も現代生活にそそぎ入れられ、ここに建国精神としての国家自立志と祖国防護威力とが、永久に若く不断によみがへらしめらるるのである。

○ 同一国語民族の社会生活が、全体人格としての組織を作り実力を具ふるとき、そこに建国は、過去に『神のひらきし道』となり、現在に『人のちから』によつてうけつぐべき『義務』の対象となるのである。

故にいまここに国家と国語と、また建国精神と『しきしまのみち』又は『ことのはのみち』との関係を明かにするために、再びフイヒテの『独逸国民に告ぐ』より引用をこころみよう。

○ 『今日吾人の自由が唯言論に於いてのみ認められ、この自由さへも百方妨害されつつ

ある時に當つて、余があらゆる危険を犯してこの壇上に立つて斯の如き事を述べつつあるのも、只この祖国愛に駆らるればこそである。』

『国家が今日の如き悲境に沈淪したのは、主として宗教道義の欠乏そのもののため外ならぬことを覚り得たことであらう。』

『眞の著作者は、根本的に又精神生活の根柢から、次の如き人、即ち同様に根本的に活動する人、即ち支配する人に代つて思惟せむと欲するのである。』

『個々の生命の中に始まつた思惟を一般的生命の中に導き入れる手段中最も卓越せるものは、詩作である。』

『生きた言語は、それ自身直接生命あり且つ感覺的のものであつて、ひるがへつ翻ては、自身自身の全生命を描写し、又之を把捉し又これに働きかける。』

○

フイヒテがその講演の終りに於いて、青年・老年・実務家・思想家等にそれぞれに呼びかけて、最後に『本講演と声を合せて諸君の祖先も亦諸君に要求する』といひ、又、『未だ生れざる諸君の子孫がまた諸君に要求する』といふことばは、ことに力強い感情

と意志力をつたへるのである。

生命と精神をつたふる『ことば』は『ことのはのみち』であり、『しきしまのみち』であつて、『しきしまのみち』を『ふみわけてみよ』とさとさせ給へる 明治天皇が、『万代もさかゆく国のたから』とのたまはせ給ひたる『古事記』に就いて、正岡子規は、『強き和文』といふ題で新聞『日本』に発表した小論文に於いて、『文の勢の強き事、善く其事柄に副ひて恐ろしくいさましく身の毛もよだつ心地もするなり』とスサノヲノミコトの条を評してをる。古事記の意志的活動に没入した現実主義を、老衰支那の理智主義によつて形式化し固定化しようとするのに対して、極端の憎悪と反感とを以てして、ここに攘夷思想と国民的自覚とを強調したのが、『古事記伝』の著者・本居宣長であつた。宣長が、『字の文』『字の文』『うるさくこちたきあだし国のさかしらごと』等といつて極力排斥したところの理智主義は、彼が正当にいつたやうに、『凡そ人の己が心もてかくあるべき理ぞとおしあてに思ひ定めて作れるもの』である。しかしながら本居宣長は、未だ『しきしまのみち』に於いては、正岡子規の如き見識をうるには至らなかつたのである。正岡子規は、新聞『日本』に発表した歌論『人々に答ふ』の『其十三』に於

いて、『敷島の心和を人間はば朝日に匂ふ山桜花』を評して『余は毫も此歌に感動せられざるのみならず、なかなか浅薄拙劣なるを見る。……其大欠点は「人間はば」の一句にあり。上に「人間はば」とあらば、下に「と答へん」と置かざるべからず。「と答へん」の語無ければ「人間はば」の語、浮きて利かず、従ひて厭味を生ずるなり。』といつてをる。正岡子規の文献価値批判学は、芸術的価値批判をなすに科学的正確を有する論理学をもつてしたのである。これは『人間はば』に対して『と答へむ』とうけざるが故に、論理的均衡が保たれず、したがつてその不釣合が不安感情を生ぜしむるのである。それ故に、『人間はば』が全体と融合せず、この一句が浮動して目立つが如き効果を示して、一首の統一と調和とをみだすのである。何となれば、この一首を統一すべきは『朝日に匂ふ山桜花』であるべきであるからである。しかしながら、此の『人間はば』の一句がかくも顯著に自他を分つところの自我感情を表示するといふことが、この歌の弱点であり、又それがやがて通俗的理解に容易であつて、同時にそれがこの歌を流し行せしめた特色となつたのである。

○

古事記に表現せられたる建国の事実と精神とは、不断のたたかひとはげしい動乱とであつて、この無常の現実生活を回避せざるが故に内心に悠久の信念を味ひ得たのである。この現実主義は、原始的素朴精神とともに、また近代的文学の人間性格の分析と心理的動機の徹鑑との特色を十分に示してをるのである。その模範例は、スサノヲノミコトとヤマトダケノミコトとの境遇叙述と心理分析とである。正岡子規が『身の毛のよだつ』と評したのは、スサノヲノミコトの『青山を枯山からやまなす泣き枯からし、海河はことごとに泣きほす』号泣の生活をうつしたことばであつた。

ヤマトダケノミコトが『天皇すめらみことははやく吾われを死ねとやおもほすらむ』と悲しみ給ひ、病みましては『吾が心つねは空よりも翔かけり行かむと思ひつるを今吾が足えあゆまず』とのたまひ、故郷をしのび給うては『いのちの全またけむ人は、たたみこもへぐりの山の、くまかしが葉を、うずにさせ、その子』とうたひ給ひ、御病みやまひにはかになりて、『少女をとめの、床のべに、わが置きし、つるぎのたち、そのたちはや』と『歌ひをへてすなはち崩かひあがりましぬ』る、悲痛の御一生は、強き大なる生命のまぬがれぬ運命であつた。明治天皇が

まつろはぬ熊襲くまそたけるのたけきをもうち平たひらげしいさを雄々をしも(明治十一年以前)
とうたはせ給ひたるも、普通の題詠とひとしなみに解しまつるべきではない。

馬

人ならばほまれおしるし授けまし軍いんぐさのにはにたちし荒駒あらいこま(明治四十年)

松経年

ちよへたる峯のたか松人ならばつめるいさをも多からましを(明治四十二年)

これらの大御歌は、ヤマトダケノミコトの『一つ松人いにありせば、きぬ着せましを太刀佩けましを』の御歌を思ひ出でしめらるることなしにをろがみよみまつるべきではない。

草木禽獸にもこころをよせ給ふ大御心よりこそ、すぐれたる自然鑑賞のかずかずが生れ出でしとこそあふぎまつるのである。

弓矢

ゆみやもて神のをさめしわが国にうまれしをのこ心ゆるぶな(明治三十九年)

この大御歌ををろがみよみまつりては、古事記の神武天皇の大御歌にくりかへさせ給

ひし『うちてしやまむ』といふ戦闘生活の、追ひしく律動の急迫進行をしぬばしめらるるのである。

波

あるるかと思ればなきゆく海原うなばらのなみこそ人の世に似たりけれ(明治三十八年)
人の世はやすむまもなき動乱生活である。この動乱の生活に随順して苦闘すればこそ、日本は動きなくその自立国家の生命を無窮ならしむるのである。

柱

権原かしはらのとほつみおやの宮柱みやばしらたてそめしより国はうごかず(明治四十二年)
まことに建国精神の相統は、生の痛感よりこそなしとげらるるのである。

十二 故郷とすまひ — その一 —

人

をちこちにわかれすみても国を思ふ人の心ぞひとつなりける(明治四十三年)

祖国をはなれて世界各地にそのすみかをもとむる人々も、同じき心に祖国をしたひ、祖国のさかゆかむことをねがふのである。この大御歌は、この人のまごころをよませ給ひしものとあふがしめらるるのである。

この祖国を思ふ心は、やがて同種民族の間につながる聯盟感情の基礎であり、また個人としては、その生れそだし故郷と幼時とに対する懐旧の至情であり、国民としては、建国精神回顧の本能となるのである。

をりにふれて

開くべき道はひらきてかみつ代の国のすがたを忘れざらなむ(明治四十五年)

心

つくろはむことまだしらぬうなゐ子のもとの心のうせずもあらなむ(明治三十九年)

無邪気なるをさな子の心を、また純樸なる古代精神をしぬばせ給ひつつそれとともに次に引用しまつる大御歌ををろがみよみまつれば、国民的生活と人類世界との不断の開展に随順すべき思想原理を求め給ふ、とあふがしめらるるのである。

をりにふれて

ものごとにうつればかはる世の中を心せばくはおもはざらなむ(明治四十一年)

寄書述懐

すすみゆく世におくれなばかひあらじ文の林はわけつくすとも(明治四十二年)

これらの大御歌ををろがみよみまつれば、いにしへをわすれず、いまの世におくれざらむためには、人生に憶念のちからのたふとぶべきを知らしめらるるのである。

忘草

たねなくて茂りもゆくか世の中の人のこのころのものわすれぐさ(明治三十九年)

さればかくの如く思量しつこの大御歌ををろがみよみまつれば、われらは、過去と将来とまた前後をかへりみず、ただまのあたりの利害と快樂とにのみ執着することの心なきあさましさを、かへりみしめらるるのである。

○

京都にありて

住みなれし花のみやこの初雪をことしは見むと思ふたのしさ(明治十一年以前)

嵐山の木の葉をあつめて香となしたるをたきて

ふるさとの木々の落葉のたき物を袖そでにとむるもうれしかりけり(明治十一年以前)

をりにふれて

ときのまに千里ちよとかけらむ駒こまもがなただす札の森にすずみてを来む(明治十六年)

故郷薄すずき

故郷のかきねのすすきまねきてもかへらぬものは昔なりけり(明治十九年)

京都の花を見て

ふるさとの花のさかりをきて見ればなく鶯のこゑもなつかし(明治二十三年)

京都をいでたたむとするころ聴雪にて

わたどのの下ゆく水の音きくもこよひ一夜となりひとよにけるかな(明治二十三年)

故郷梅

すみしよの春なつかしきふるさとの梅のさかりを誰かみるらむ(明治二十七年)

故郷池

ふる里のにはの池水昔わが放ちし亀はいまもすむらむ(明治三十四年)

故郷花

ふるさとの軒端のきばのさくらこの春もわれを待ちてやひとりさくらむ(明治三十五年)

故郷橘

ふるさとの花橘はなたちばなを夏ごとに千代田の宮におもひやるかな(明治三十五年)

をりにふれて

故郷の高雄の紅葉ちかからば折りとらせてもみてましものを(明治三十五年)

故郷夏月

ひがしやまのぼる月みしふるさとのすずみ殿こそこひしかりけれ(明治三十六年)

故郷

年をへてかへりてみれば故郷のみやもる人もおいけるかな(明治三十六年)

故郷井

わがために汲みつとききし^{さち}祐の井の水はいまなほなつかしきかな(明治三十六年)

故郷松

ふる里をとひてし人に問ひて見むわがうゑおきし松はいかにと(明治三十六年)

故郷情

老人^{おいびと}のかたりしことをさらにまた思ひぞいづるふる里にきて(明治三十六年)

をりにふれて

月の輪のみささぎまうでする袖に松の古葉もちりかかりつつ(明治三十六年)

故宮橋

たらちねのみおやの御代をしのぶかな花橋の陰をふみつつ(明治三十七年)

故郷草花

園守そのもりやひとりみるらむ昔わが集めし庭の秋草の花(明治三十七年)

故郷秋夕

守もる人の住むばかりなる故郷のあきのゆふべやさびしかるらむ(明治三十七年)

秋別業

てる月の桂かづらの里のなり所秋こそゆきて見まくほしけれ(明治三十七年)

都

山城やましろのみやこいかにと春秋の花に紅葉におもひやりつつ(明治三十七年)

故郷松

故郷の庭の老松たらちねのみおやの御代の昔かたらへ(明治三十七年)

思故郷

たらちねのみおやのましし故郷の都はことにこひしかりけり(明治三十七年)
をさなくて住みし昔のありさまを折にふれては思ひいでつつ(同)

松年久

ふる里の老木の松はをさなくてみし世ながらの緑なりけり(明治三十七年)

思往事

たらちねのみおやの御代の昔をもことある毎ごとに語りいでつつ(明治三十七年)

あらたまる世をいかにぞと思ひしはをさなかりつる昔なりけり(同)

いにしへの人のいひてしかねごとをおもひぞいづるをりにふれては(同)

たらちねのみおやの御代につかへにし人も大かたなくなりけり(同)

折にふれて

あらたまる事の始はじめにあひまししみおやのみよを思ひやるかな(明治三十七年)

月似いにしへにたたり古

たらちねのみおやの宮にをさなくて見しよこひしき月のかげかな(明治三十八年)

十三 故郷とすまひ — その二 —

○

都

とほつおやの定めましつる山城やましるのたひらの都とはにあらすな(明治三十九年)

故郷木

すみし世にかはらぬものは昔より老いたりと見し松ばかりにて(明治三十九年)

故郷柱

故郷のふるき柱によりそひてすみし昔をおもひいでつつ(明治三十九年)

故郷春月

花のかげふむ人もなきふる里のおぼろ月夜やさびしかるらむ(明治四十年)

対花思昔

をさなくて見し世の春をしのぶかなふるき都の花のさかりに(明治四十年)

故郷

春秋の花に紅葉にこひしきは昔すみにし都なりけり(明治四十年)

親

たらちねのみおやの教あらたまの年ふるまに身にぞしみける(明治四十年)

故郷月

舟うけて昔あそびしふるさとの池にや月のひとりすむらむ(明治四十一年)

秋夜思郷

山城のみやこのそらに照る月をおもひぞいづる秋のよなよな(明治四十三年)

夢

たらちねの親のみまへにありとみし夢のをしくも覚めにけるかな(明治四十三年)

故郷木

思ひいづることのみ多し故郷のこだちもとの木立ならねど(明治四十四年)

夏山

山近くすみし都をなつかしとさらにぞ思ふ夏の来ぬれば(明治四十五年)

○

故郷をしぬばせ給ふ大御心は、また、『たらちねのみおやの教』をしぬばせ給ひ、『あらたまる事の始にあひまししみおやのみよを思ひやら』せ給ふ大御心とあふがしめらるのである。空ゆく月を見そなはし給ひ、また、さく花にいろづく紅葉に、あるひは花橘のかげをふませ給ひ、みどりはらはぬ老い松^{おきな}をめましますすにつけても、西のみやこをしぬばせ給うたのである。また『故郷のふるき柱によりそは』せ給ひ、あるひは『わたどのの下ゆく水の音きくもこよひ一夜となりにけるかな』とばかり、なつかしみましまし、また還御^{かんぎよ}のおんなごりををしませ給うたのである。『月の輪のみささぎまうでする袖に松の古葉もちりかかりつつ』とありし世をしぬばせ給ひ、くにたみの上をのみこそ大御心にかけてさせ給ひたりしすめらぎの大御心を、天つ日つぎとうけつがせ給ひし大御心をしぬびまつれば、

孝

たらちねの親につかへてまめなるが人のまことの始はじめなりけり(明治四十年)

とよませ給ひたる大御心を、すなはち、ただ道德律のひとむきの理論としてにはあらずして、人間生活、国民歴史の現実心理的開展のままに随順する人生事実としての『孝』のみちを、かく表現せさせ給ひしとあふがしめらるるのである。

○

故郷に対する思慕の感情は、それはやがて、生活そのものに対する断ちがたききづなであり、生活の根本条件の一つとしての住居に対する憶念より発源するのである。『人の住むこと』は、最も本源的の生活事実である。それは生活事実の分析ではなくして、生活そのものの提示である。それを直観的に内心に味あぢははせ給ひて大御歌によませ給ひしことは、はかりがたき大御心をあふぎまつるべきである。そこにこそ、『社会主義』の提出したる問題の解決せしめらるべき原理をあふがしめらるのである。一般人生問題は、全人生事実によつてのみ解決せしめらるべきであり、全人生事実の制約的具現は、『すまひ』であり、住居感情が安堵感情の主要内容であり、そこに個人の生命財産の安全と国家社会の安寧秩序とが、その現実的始原を見出すのである。

燈

ともし火の影まばらにもみゆるかな人すむべくもあらぬ山辺に(明治三十六年)

薄暮眺望

家なしと思ふかたにもともし火の影みえそめて日はくれにけり(明治三十七年)

山家燈

ともしびのたかき処にみゆるかなかの山辺にも人はすむらむ(明治四十一年)

島

ちかづけば家もありけり波の上に浮ぶとみえし沖の小島も(明治四十三年)

『人すむべくもあらぬ』と思しめさせ給ふ山中に、ともし火のともるをみそなはし給ひ、また沖の小島にも近づけば家もありけるよ、とよみましし大御歌に、生活、生命に對せさせ給ふ大御心をかしこみあふぎまつるべきである。

山路杉

家すこしあるかと思れば山道はまた杉村になりけるかな(明治四十一年)

農家

ひとりしていくらの小田^{をだ}をまもるらむしづが仮庵^{かりほ}のかずぞすくなき(明治三十九年)

田家

田に畑に勉^{つと}ゆづりてしづがすむいほりちひさく見えわたるかな(明治四十二年)

山家人稀

山みちはゆきあふ人もなかりけりところどころに家はみゆれど(明治四十三年)

これらみな民の『家』に大御心をとどめさせ給へる大御歌である。

○

家

ことそぎし昔の手ぶりわするなよ身のほどほどに家づくりして(明治三十八年)

家

ふりにきと人はいへどもはやくよりすめる家こそすみよかりけれ(明治四十二年)

神社

いにしへの姿のままにあらためぬ神のやしろぞたふとかりける(明治四十五年)

これらの大御歌は、原始的簡単な、また伝統的生活形式の意義ををしへさとさしめ給へるもの、とあふがしめらるるのである。

旅思

ゆく所わが国ながら旅にあれば都おもはぬときなかりけり(明治三十八年)

羈き中思都

旅寝するうまやにつきて待つものは都の今日のたよりなりけり(明治四十三年)

またこれらの大御歌は、行幸あらせられて大宮どころをしぬばせ給ふ大御心を、あるがままにうたはせ給ひしものにして、この大御心こそ、み国をすべさせ給ふ大みいつなれとあふがしめらるるのである。されば、われらがもとにかへりて『ことそぎし昔の手ぶり』を、われらがこころに忘れざれば、いままのあたり複雑化しつつある現代文明をも統制しうべきを思はしめらるるのである。

燈

軒のきごとにかけつらねたるともしびやにぎはふ市の光なるらむ(明治四十三年)

さればかく現代都市生活をよませ給ひし大御心を、『人すむべくもあらぬ山辺に』と

もるまばらのともし火をよませ給ひし大御心とともにあふぎまつるべきを思はしめらるるのである。

十四 神社

○

すまひは、危険に対する保護者であるからして、すまひそのものに宗教的意義が結びつかしめられ、此のすまひは或は城廓となり、或は神社となり、一般社寺となり、またそれらが相互に結合せしめられ、また影響しあふのである。この平和と安全との始原としてのすまひが、公共団体社会生活の礼拝所に発展せしめられたものが神社である。すまひの門戸もんこ、かまど、其他にまつる神、また氏神といひ、宗廟社稷しやしよくといふことの意味は、すべてすまひに就いての心理学から正しく理解せらるべきである。この神社に於いては、個人のすまひの実用的意義は漸次に消え失せて、ここに純精神的、宗教的、また美的結構が造営せらるるのである。それとともに没我感情と奉公意志とが、この神社に

於いて祈願せらるるのである。

この神社の構造と儀礼の形式とに、国際的文化交通の影響があつたことはいふまでもないのであるが、それが直接経験と人生体験とによつて生命化せられつつ日本精神の純粹なる表現となるのである。この仏教を中心とする印度の諸教、また支那の道教等の教義と儀礼とがもち来されつつ、それが同化せしめられるところの現実生活的基礎は、世界文化単位・自立国家・日本である。故に、伊勢大神宮の祭祀によつて現代日本国民宗教礼拝儀式は、その統一的模範を実現するのである。

○

をりにふれて

久方のあめにのぼれるこちしひさかたていすずの宮にまゐるけふかな(明治三十八年)

さくすずの五十鈴いの宮の広前ひろまへにけふおほ幣ぬきをささげつるかな(同)

くもりなきあしたの空に神路山かみぢやまかうがうしくも見えわたるかな(同)

明治三十七八年（一九〇四、五）の祖国防護の生死興亡戦をはり、伊勢大神宮に御参拝あらせられしときの大御歌とあふぎまつるのである。『久方のあめにのぼれるこちし

て』とよませ給ひたる大御心こそ、まことに祭祀の形式を生命化するところの国民的宗教の現実的内容であり、宗教的信念の心理的開展時刻の極促である。これ親鸞が『一念者斯顕信樂開發時剋之極促』(『教行信証』信卷)といふ概括的叙述に直観的内容をみたして、個人主観的情意生活を国民生活の客観的全体情意生活へ没入せしめて、個我より全体生活への転入に実現せらるる芸術的表現としての『しきしまのみち』をひらきしめし給ひしもの、ここに宗教と芸術とは、総合的現実生活の統一のうちに結合せしめらるるとあふぎまつるのである。

この三首の大御歌は、まことに自然簡素のすがたを示させ給へばこそ、『むかしよりためしまれなる戦』の全事実をしのばしむるのである。永久の生命は、自然開展に随順するやまとだましひの芸術的表現『しきしまのみち』にこそすべをさめらるのである。

○

社頭

はるかにもあふがぬ日なしわが国のしづめとたてる伊勢のかみ垣がき(明治三十六年)

神 祇

かみかぜの伊勢の宮居みやゐををが拝みての後こそきかめ朝まつりごと(明治三十九年)

神 社

いにしへの姿のままにあらためぬ神のやしろぞたふとかりける(明治四十五年)

いにしへのままの姿をつたふる神のやしろををろがむことは、国民的生命のみなもとをしのぶことである。日本の祖先礼拝は、現代宗教としてやまとだましひの現実精神を表現するものである。これかしこくも 明治天皇の体験せさせ給ひしところのものである。

思往事

さまざまのことにあたりて思ふかな国ひらかしし御代みよのみいつを(明治三十八年)

ここにふたたび此の大御歌ををろがみよみまつるのである。今日われらの守護神は、すなはち国民的協力であつて、それが国民的統一の実現としての建国精神の復興である。これ西紀一九二五年のドイツ大統領選挙に於いてヒンデンブルグ元帥がその立候補に際し、国民に反覆力説したところの国民的一致アイニヒカイトである。祖先礼拝とい

ふことが比較的に自立鎖國的国民生活をへた支那と日本とに、ことに日本に發達し完成しようとしつつあるのは、それが事あるごとに挙国一致によつて支持せられたからである。日本に於いては、教義として瞑想のうちに組み立てられたる神ゴッドといふごときは、日本精神の生活感覚を支配するを得なかつたのである。われらは、神社に参拝してそこにいにしへのままの生活にむかはうとするのである。日本に於いては、古代は常に現代と結合せしめられ、全歴史は现实生活のうちにをさめらるるのである。過去に理想世界を回顧して現代を澆季末法と悲嘆し、また将来に平和安定の極楽浄土を建設しようとする儒仏の歴史哲学又は所謂唯物史觀の如き知識的遊戯は、日本精神の堪^たふるところではなかつたのである。それらは過去及び現在に於いて、国民生活の一部部に沈着固定したところの少数者に於いてのみ模倣せられたのである。まことの日本精神は、名も無き民の劳苦生活によつてつたへられたのである。此の日本精神に、芸術的表現をあたへさせ給ひたる 明治天皇の大御歌によつて、われらはこの日本精神をよびめさますべき神社祭祀の礼拝儀式と、その心理的意義とをさとらしめらるるのである。

現日本に於いて一般神社は、内務省神社局によつて管理せられてを、『神社は宗教の機関にあらず』といひ、『宗教上の礼拝の場所』ではない、と国家制度の上からいはるのである。(明治聖徳記念学会発行『神社対宗教』中神
社局長塚本清治氏『神社行政に就きて』)これは、『宗教』といふ概念の規定し方によつてかうもいひ得るのであるが、神社とそこに行はるる礼拝とは、諸宗教を現実生活のうちにをさむるところの日本国民宗教であるといふ事実を理解すべきである。大日本帝国憲法第二十八条『日本臣民は安寧秩序を妨げず及臣民たるの義務に背かざる限に於て信教の自由を有す』といふ『宗教』の『教』は、神社祭祀と祖国礼拝とに撰取せらるべき諸宗教分派と解すべきである。神社祭祀礼拝儀式は、民族宗教礼拝儀式としての民族詩的表現に開展し、『しきしまのみち』としての和歌の創作鑑賞が、今日の宗教儀禮たるに至つたといふ事実を、『明治天皇御集』拜誦に於いて認むべきを思ふのである。

民族宗教から、それが個人瞑想の世界にすみかを求めて世界宗教に發展するとともに、その民族的自立の失はれようとする史的事実をかへりみたならば、今日の『神社』は『学校』に、『神道』が『心理学』または『人生科学』としての現実政治及び科学的施設に發展すべきを思はしめらるのである。

不統一の、また混雜したる知識の集積は、真知の障礙となり、みそぎを要するけがれとなるのである。ここに自然随順の『しきしまのみち』が、現代文明を東西文明交流輻合地点に於いて和融せしめようとする日本に於いて、現代国民宗教儀礼として養育せられつつある。

○

月前神楽

すめがみの広前ひろまへてらす月かげに神楽かぐらのこゑもすみまさりつつ(明治二十五年)

夜神楽

ふけゆけばさえこそまささかきばれ榊さかき葉のこゑにも霜のおくこちして(明治三十九年)

神楽

神ならぬ人の心もすむものは神楽かぐらのこゑをきく夜なりけり(明治四十二年)

社頭冬月

御神楽みかぐらの庭火のかがり影ふけて広前しろく月のてりたる(明治四十三年)

芸術は人生の総合的観照から生るのであるが、すべての芸術はまた『近世劇』に綜

合せらるべきであつて、歌謡が音楽と舞踊とに結合せしめらるる神楽をめでましし 明治天皇の大御歌をあふぎまつるとき、芸術と人生とのたちがたきつなかりをしのばしめらるるのである。芸術は、その各要素が統一を求めつつある人生である。それは人生のあるがままを、その快活憂鬱、高邁卑陋、矛盾調和のすべてをすべをさめて、はてなき大海の律動に随順せしめ、思念の分析による煩悶と苦慮とを払拭するのである。

神社は、学校と劇場と議院と、また一切の近世的殿堂のうちにもその任務を分つて、これをたさしめようとしつつある。一切の国民的集會を綜合芸術たらしめ、各人の心と言葉とを『しきしまのみち』によつてみちびかしめよ、とわれらは祈願するのである。

十五 自然と人生

○

聞 蟲

さよふかく心しづめてきく時ぞむしの鳴くねはあはれなりける(明治四十一年)

蟲

ひとりして静かにきけば聞くままにしげくなりゆくむしの声かな(明治四十二年)

歌

まごころをうたひあげたる言の葉はひとたびきけば忘れざりけり(明治四十一年)

述 懐

千万の民の力をあつめなばいかなる業も成らむとぞ思ふ(明治四十一年)

静かに心しづめて、また千万の民の力をあつめ、心をあはせたるときに、なりいづるまごころによりて、自然と人生との融合せしめらるるその一瞬に、無窮の開展、永久の生命を味ひ^{あぢは}うるのである。故に自然変化の律動が高めらるる一瞬に感覚世界にうつり来るところのものは、不用意に速断せらるるであらう如くに、自然の描写ではなく、人生の表現であり、人格の反映であり、また体験の告白であり、知識の綜合である。

○ 自然鑑賞は、自然そのものに具備せられたる条件によつて規定せらるる不変の価値を味はふことではなく、われらの内的生活が、その律動と相応するところの自然現象を、その内的生活表現の材料の一つとして用ゐることである。

自然は外的存在であり、部分的現象である。それを人間内心の律動と相応せしむるとき、始めて部分は全体化せられ、外界は精神を得て生命化せられ、現実と理想と一致するのである。故に精神的活動は外界現象の変化を追求し、その経過の一瞬に全心を傾けて之を鑑賞し、自然と同化しようとするのである。

雲間月

むら雲のたえまたえまに夕月夜さすかとみればかつかくれつつ(明治十三年)

波間月

ひさかた久方の空ゆく月も海原うなばらの波間にかげはうきしづみつつ(明治十五年)

海上月

沖つ波なるとの海のはやしほにやどり定めぬ月の影かな(明治十五年)

雨後月

むらさめの雫しづくもいまだおちやまぬ松のひまより月ぞさしくる(明治十六年)

風後落葉

ひとしきりさそひし風はしづまりておのがまにまにちる紅葉かな(明治十八年)

海上月

あしひきの山のはいづる月かげに大海原の波を見るかな(明治二十年)

暁冬月

霜のうへにうつる枯木の影きえていまはとしらむ在明ありあけの月(明治二十九年)

絲 桜

のきばふく風にみだれておぼしまのうへまでかかるいとさくら絲桜かな(明治三十年)

山 鹿

月もいまのぼらむとする山のはにたかくきこゆるさを鹿の声(明治三十年)

月前千鳥

磯山をはなるる月に声をのみききし千鳥のかげもみえつつ(明治三十三年)

これらみな、自然の变化する一瞬を表現せさせ給ひしものである。一瞬に全心をかたぶくるときは、すなはち情意生活の興奮緊張して統一せらるるときである。

○

以上引用しまつりたるは、明治三十七年以前の大御歌である。三十七年以後に於いては、大御歌はすべてその内容形式ともに简单化せしめられつつ荘重となり、その表現要素のうちに、作者の精神生活が優勢化しつつ、純粹叙景詩より次第に思想的抒情詩にうつりゆかしめらるるのである。

夕 立

俄にはかにも照る日のひかりかきくらしいらかをたたく夕立のあめ(明治四十年)

秋風満野

遠山の雲も動きて秋の野のちはらかやはら風わたるなり(明治四十年)

曙

ひむがしのみそらしらむと思ふまに山の姿ぞあらはれにける(明治四十年)

田家時雨でんかのしぐれ

おほねほすしづが垣根の夕日影にはかにきえて時雨しぐれふるなり(明治四十二年)

狩場風

かり人がいまひとよりときほふ野に木立こだちゆすりて嵐ふくなり(明治四十三年)

雲

一村ひとむらと思ひし雲のいつのまにあまつみそらをおほひはてけむ(明治四十五年)

これらの大御歌は、外形からは客観的叙景詩と見らるべきであるけれども、殊にその終りの二首の如き、あるひはきほひいさむころを、また一むらの雲の忽ちに空にひろごるごとく、おのづから此の世のさだめなきを暗示せさせ給ふところに、主観的要素の

優勢化するをみとめしめらるのである。自然を鑑賞せさせ給ふのみにあらずして、それを鑑賞せさせ給ふことをよみ給ふのである。

見月

あかずして月みる窓をとざしけり寒くなりぬと人にいはれて(明治三十六年)

夜納涼

端居^{はしる}せぬよはこそなけれ大空に天の河原のみえそめしより(明治四十年)

対月

むかしいま思ひあつめてつくづくとふけゆく月をながめつるかな(明治四十年)

自然をめめます大御心、ことに、月をまた天の河をめまし、そこひなき無限をしぬばせ給ひ、人生事実を痛感せさせ給ひつつ、ふりかへりて自然を味はせたまひ、また、自然を見て人生を思はせ給ふ大御心をしぬばしめらるのである。『思ひあつめて』とのたまはせたるにも、大御歌^{おほみかた}よませ給ふ総合的総撰威力をしぬばしめらるのである。

をりにふれて

よむ書^{よみ}もいまはとたたむ文机^{ふつくえ}のうへにさしくる月のかげかな(明治四十年)

この大御歌は、月光のさし入る一瞬の光景の変化に作者の動作を活躍せしめつつ、思念静坐のともとしての書と文机とに之を対照せしめられつつも、また、せまらざるほがらかの音調に、しかしながら一つの休止もなく一首を統一せしめ給ふ、まことに、たぐひなき大御歌とこそあふがしめらるるのである。

橋

山川の早瀬の波のたちまちに橋うちわたすいくさ人かな(明治四十年)

この大御歌は柿本人麻呂の『もののふの八十やそ氏河のあじろ木にいさよふ浪のゆくへしらずも』の如く、不可説の感懐を音楽的諧和と観念的融合とによつて表現せさせ給ひたる大御歌である。またこの大御歌は、祖国防護のつとめに、その心身を緊張せしめつつある工兵の敏速の作業をめましまし大御歌とあふぎまつるのである。この山川の早瀬のたぎち流るるとき大御歌を

菫

母が手にひかれてあゆむうなるこのたちとまりては菫すめれつむなり(明治四十年)

の大御歌と対照しまつればかくもおだやかに、またゆるやかなるさまをよませ給ひ、ま

た

花末いまだあきす 飽

うつろへばうつろふままになつかしと思ふは花のいろ香なりけり(明治四十五年)

とよませ給ひし大御歌ををろがみよみまつれば、老年と貧苦とにやつれはてし老女をモデルとして *Vielle Heaulmière* をつくつたロダンにとつて、自然に於ける一切は『美』であつたことをも聯想せしめらるるのである。ロダンの此の作は、彼の『春』と対照せしめらるべきである。けぶるが如き青春の熱情と優美とは、ひからびしたぐれい頽齡の歪ゆがみと皺しわとに示さるるところの枯木の如き姿とともに、作者の人生観によつてひとしく綜合生命化せしめられて表現せられたのである。

蟲声いつにあらす 非一

さまざまの蟲のこゑにもしられけりいきとしいける物のおもひは(明治四十四年)

この『いきとしいける物のおもひ』をしのばせ給ふ大御心はやがて、

述 懐

千万ちやうろの民の力をあつめなばいかなる業わざも成らむとぞ思ふ(明治四十一年)

とよませ給ひたる大御心であるとあふがしめらるのである。また、親鸞の『撰取不捨せんしゆふしや故なご名な阿弥陀あまた』といふ、この『撰取不捨』の教義は、まことの芸術によつて始めて実現せられ、人間による自然の征服としての『文化』は、ここに至極するのである。

十六 自然鑑賞と表現技巧 — その一 —

○
芸術的表現の秘訣は、その内容の充実して形式の簡單なることである。詩歌に於いても、言葉が空しいひびきをつたへるのは、形式が内容にふさはぬからである。

風後落葉

ひとしきりさそひし風はしづまりておのがまにまにちる紅葉かな(明治十八年)

ひとしきり落葉をさそひし風はしづまりたれど、風なきにちる紅葉のさまざまなるありさまをよませ給ひたる、時間の推移と、かろくちる紅葉の一葉一葉に、異りたる精微なる物理的条件の緩急の変化とを、『おのがまにまに』といふ一句に概括せしめ給うて、複雑なる内容を簡單の形式にて、自然になだらかにうたはせ給うた大御歌である。

庭落葉

あらしふく庭のもみぢ葉あさ霜のうへにちりたる色、の、さ、や、け、さ、(明治十八年)

『色のさやけさ』の一句に概括せさせ給ひしところの内容は、複雑なる運動と配合とである。

京都をいでたたむとするころ聴雪にて

わたどのの下ゆく水の音きくもこよひ一夜ひとよとなりけるかな(明治二十三年)

よどみなくよみくださせ給へる一首の音調に、すぎゆく時の迅速なるをしのばしめらるる、大御歌であつて、この如き反省的作為のいとまなき表現に於いてこそ、内容と形式と、直接経験と言語表出とは全く密着一致せしめらるのである。それは、全心をかたぶけたる統一の実現である。このあるがままの『まこと』は、『自然』である。

をりにふれて

手もたゆくならず扇にまねかれてまことまことの風もふくゆふべかな(明治二十九年)

田家朝顔

なかなかに色こそよけれつくろはぬしづが垣根の朝顔のはな(明治二十九年)

土筆つくし

庭のおもの芝生がなかにつくづくし植ゑたるごとくおひいでにけり(明治三十五年)

庭

なかなかにみやびすくなしあまりにも作りすぎたる庭のけしきは(明治三十七年)

『まことの風』は『自然の風』である、自然とは『つくろはぬ』ことである。『あまりにも作りすぎたる』不自然は非芸術的であり、みやびすくなきものである。芝生のなかに土筆の植ゑたるごとく、ほどよくまた面白く、自然におひたるをめでましし大御歌の、ふかきおもむきをあふぎまつるべきである。即ち自然に生ひいでたればこそ、まこと面白く心して植ゑたるがごとしと、その自然のさまをめでまししとあふぎまつるべきである。

雨中春草

春雨にみどりはそひて見えながらいまだみじかし野べの若草(明治三十年)

みどりはそひたれどいまだみじかしとのたまはせたる、うちつけのしかも精細をきはめたる御観察は、自然に向はせ給ひて自然のごとくに我を忘れて全心をかたづけさせ給

へばこそ、かく平易の大御言に、微妙の実景をよませ給ひたるなれとあふぎまつるのである。

絲 桜

のきばふく風にみだれておぼしまのうへまでかかるいとざくら絲桜かな(明治三十年)

この大御歌こそ、まこと自然をさながらにうつす『鏡』とこそあふぎまつるべきである。自然と冥合同化せさせ給ふ大御心のかしこくもあるかな。『鏡』のくもりなくものをうつすことが、きよくすがしくあきらかなる心にとへらるのである。くもりなき鏡は、また感化のもととなり、まなぶべき手本となるのである。

鏡

国といふくにのかがみとなるばかりみがけますらを大和だましひ(明治三十七年)

くもりなく世をたもてとて千早ぶる神のさづけし鏡ならむ(同)

さかきば榊葉にかくる鏡をかがみにて人もこころをみがけとぞ思ふ(同)

旗

くもりなき朝日のはたにあまてらす神のみいつをあふげ国民(明治三十八年)

をりにふれて

くもりなきあしたの空に神路山かみぢやまかうがうしくも見えわたるかな(明治三十八年)

暁

ねざめせしこの暁あかつきのころもてしづかにものを思ひ定めむ(明治三十七年)

朝

起き出でて思ふ事なきあしたこそをさな心にひとしかりけれ(明治三十七年)

朝

世の中のことまだ聞かぬあしたこそ人のころはしづけかりけれ(明治四十三年)

これらの大御歌ををろがみよみまつりて、朝の空をめ、暁の心をたふとばせ給ひ、くもりなき鏡を人の心のかがみとせさせ給ひし大御心をあふぎまつるべきである。

○

春海

釣舟も同じ処につらなりてのどかにみゆる春のうみかな(明治三十年)

これは蕪村の『春の海終日ひねもすのたりのたりのたかな』と子規の『日一日同じ処に鳥打つ』と

の二句を思ひ出でしむる大御歌である。俳句は思想詩である。それは、感覺世界にうつり来る時間の経過と空間の配置とを減尽せしめて、感覺世界を概念と思想との世界に変形せしむるのである。ここに現実世界の拘束より脱して、自由に觀念の世界に遊戯するのである。しかしながらそれは、必ず直観体験の支持を要する。現実世界の時空の条件を離脱する觀念世界は、この直観体験の直接經驗に对照強化せしめられて、そこに現実的映像がゑがかるるのである。故に俳句の生命は、その時空条件を抽象したる觀念配合の表現法の上に、毫末の間隙もなき修辭法の論理学として伝授せられ、悟入せしめらるのである。それは、概念の生命化であり象徴化である。それが『季題』を統一原理とし聯想条件とするところに、東洋の没我思想を示すのである。和歌から俳句への開展に於いて、季題の成立と変遷とを説くことの代りに、今はただ大須賀乙字の言葉を引用しよう。『この（俳句の）詩形に生命を与へたものは、いふまでもなく芭蕉で、芭蕉が初めてこれを客観芸術化した。即ち芭蕉の内生活は天然によつて客観化されるやうになり、ここに初めて気分の象徴としての天然が見出されたのである。この芭蕉の気分の象徴たりし天然は季題と名づけられて、後の模倣者により再び或る限定されたる約束に墮

して来た。』(大正二年一月九日三十一日発行『人生と表現』四六頁、『乙字俳論集』四二頁、『自選乙字俳論集』五頁)

この大御歌は、『釣舟も同じ処につらなりて』と、あるがままをそのまま叙述せさせ給ひしもので、蕪村と子規との句に示されたやうの概括的思想化はなく、また『のどかにみゆる春のうみかな』と、ありのままにのたまはせたるは、そこにのどけきありさまの、ことによく表現せられ、技巧を超越せる芸術、思索の迂路をたどらざる哲学、すなはち、まことの日本精神の表現をここにあふぎまつるのである。和歌がその特色を發揮しつづ、同時に俳句による表現の効果にひとしきものをも加へて、事実と思想との二つの世界は、ここに融合せしめらるるのである。

『釣舟も同じ処につらなりて』といふ客観的叙述と、『のどかにみゆる春のうみかな』といふ概括的感想とが対照補足せしめられて、一首の生命を合成するのである。これは、次の大御歌に於いていよいよいちじるしく示さるのである。

雨中落葉

山かぜの音すさまじきゆふぐれに雨もまじりてちる木の葉かな(明治三十年)

この大御歌に於いて『雨もまじりて』といふ概括的説明によつて、そこに一首を統一

すべき優勢要素が、その表現せらるる光景に変化と流動とをあたへて、それに対する人の心を期待の緊張にみちびくのである。即ち、概括抽象的説明によつて精細微妙なる具体的光景がしのばしめられ、ここに思想と直観と、自然と人生と、外界と内心とは、瞬間的に融合せしめらるるのである。

十七 自然鑑賞と表現技巧 — その二 —

雨中落花

はるさめ
春雨のふる日しづけき庭の面にひとりみだれてちる桜かな(明治三十一年)

雨後落花

はるさめのなごりの風にやへ桜はなぶさながら散るもありけり(明治三十一年)

春雨のしづかにふる庭の面に、その静けさをやぶるものはみだれちる桜の花のみである。この動と静との対照により、しづけさはいよいよしづけく、みだれ散る花びらの一つ一つも、あざやかに目にうかぶ心こころちせらるのである。

『はるさめのなごりの風』と、複雑なる気象の変化を概括せさせ給ひ、風にちる花

を、『はなぶさながら』と細微の御觀察を表現せさせ給へば、空のけしき、また、地に落ち散りたる花のありさま、目に見ゆる心こころちせらるるのである。

此の概括的表現にふくまるるはてしなき余情、また、複雑ふくまの綜合くわんごうと微細みさいの分析ぶんしとの対照は、自然をその関連のままに全体として直観せさせ給ふ故に、複雑の内容が簡單なる形式により、ゆるやかな音調として表現せられ、自然に芸術的技巧の極致を示させ給ふのである。

河梅雨

つくばねは雲にかくれて利根川の瀬の音たかしさみだれの頃(明治三十一年)

さみだれに水かさましたる利根川の瀬の音は、感覺的印象に於いて統御的優勢を占めてをるのであるが、『つくばねの雲にかくれて』と空間の位置と氣象の変化とをしめさせ給ひ、また『さみだれの頃』と、季節をかぎりて水かさのまさるべきをしぬばしめ給ふ。かくのごとくにして、視覚の限界と論理の作用とを、聴覚の黙想にみちびかせ給ふのである。

芭蕉の『五月雨さみだれをあつめて疾し最上川』も、同じく五月雨に水かさのましたる河川を

よんだものであるが、俳句は一瞬に観念を融合せしめて、空間的光景の幻像を惹く技巧を『あつめて疾し』といふ概念の論理的關係に求めて、この『思ひつき』に生命を託するのである。ここに和歌と俳句との素質的差別があり、俳句の和歌化のゆるさるべきであつても、和歌の俳句化はゆるすべからざることを知り得るのである。和歌の原理は、自然随順、神随かじながらの道であり、実生活の直接経験としての体験に密着すべきであり、俳句は、知的作用そのものに所謂審美的解脱感を味ひ観念の世界に逍遙するのである。此の知的逍遙が実生活の情意的活動によつて支持せられ、俳句がその作者の態度に於いて和歌化し抒情詩化することはゆるさるべく、ねがはしかるべきであるが、実生活そのものが知的反省のみ支配せられ、合理主義・理知主義化せらるることは、ゆるさるべきではないのである。俳句すらも、その著者の態度に於いての情意的支持を失つて理窟に墮し、人生観上の理知主義としての道徳的教訓、また低級の機智的技巧に生命を託するに至るとき、そこに、正岡子規のいふ『月並つきなみ』趣味が生るるのである。

○
月前言志

あきらけき月にむかへば久方ひさかたの空もしたしくおもほゆるかな(明治三十一年)

あきらけき月にむかはせ給へば、限りなきみ空もしたしく思はるるよ、とのたまはせ給ふ。我を忘れさせ給へば、自然もまた主観的世界に没し去り、ここに主観的情意生活の威厳が『したし』といふ、やまとことばに宇宙の生命をあつめさせ給ふのである。

名所湖

岩根いはねふみのぼりてみれば二荒山ふたらやまふねをうかぶるうみもありけり(明治三十一年)

山上の湖みづうみにたどりつかせ給ひたる時の御感想をうたはせ給ひしものである。山の上に湖あることに就いての概念的知識は、湖をみそなはし給ひたる感覺的印象によつて压倒せられ、認識は体験化せられ、概念は直観に没して、全生命は感情生活によつて表現せらるるのである。

春山

山はみな緑になりてふじのねのほかには雪もみえぬ春かな(明治三十二年)

『ふじのねにのみ雪はのこれり』とのたまはせられず、『ふじのねのほかには雪もみえぬ』と、かつては雪ふりつもりし山々も今はみな緑になり、それと雪ののこれる富士

のねとを、ひろくすべてをながめさせ給ふ大御心をあふぎまつるべきである。

雪

○
ただきは雲にかくれてふじのねの裾野すそましろにつもる雪かな(明治三十二年)
ひろくすべてを、天のさかひ地のかぎりを、しめさせ給ふ大御歌である。

池蓮

茂れどもいぶせからぬはいけ水にかへる蓮はすのひろ葉なりけり(明治三十四年)

『蓮華』は、仏教思想に於いて重要な役目をつとめてをり、『不染世間法。如蓮華在水』(法華經)といひ、『高原陸地不生蓮華。卑湿淤泥おでい乃生蓮華』(維摩經)といひ、更に聖徳太子・法華經義疏に『蓮華者。外国云分陀利ぶんだり。此物為性華実俱成。此經因果雙明。義同彼花。故以為譬也』とある如く、その特性は余りに通俗化せらるるとともに、語義も理想化せらるるに至つて、すべて感覺世界から脱離して固定形式化せられむとするに至つたのである。

しかしながら、此の大御歌によりて蓮葉はらすば、したがつて蓮華はすの特性は、再び感覺世界に

よみがへり来つたのである。

雪中竹

このうへにいくへふりそふ雪ならむたかむら高くなりまさりつつ(明治三十四年)

みさかりに、ふりしきり、ふりつもる雪のさまをよませ給ひ、『持続』の概念を直観化せさせ給ふのである。

冬眺望

笹原も小松がはらも霜ふりて枯野まばゆく朝日さすなり(明治三十四年)

笹原小松がはらをかけて、低きに朝日のてりわたるひろきながめ、それを人の世にほどこし給ひなばめぐみあまねかるべき大御心によりて、自然を直観せさせ給ひしところのひろきながめである。

旅行

旅やかたところかはれどわれをまつ民の心はひとつなりけり(明治三十四年)

『民の心はひとつなりけり』とみそなはし給ふひろくあまねき大御心によりてこそ、民の心もひとつならしめらるのである。これらの大御歌をあはせてをろがみよみまつ

り、自然鑑賞にしめさせ給ひし大御心をあふぎまつれば、自然鑑賞のまことのみちは、風の閑事業にあらざることをさとらしめらるべきである。

海辺眺望

高殿たかどのに身はありながらあま小舟せぶねうかぶ波間にゆく心かな(明治三十四年)

大御心を、波間にうかぶ小舟にはせさせ給ふがごとく、み民のうへにもそそがせ給ふとあふぎまつるのである。人生を表現するとは、人の心を自然にそそぎ、わが心を人の心にそそぐことである。

花のころに

旅衣たびぎらもこころかろくもたちいでて花にあそぶは楽しかるらむ(明治三十五年)

『こころかろく』とよませ給ひたる、ひろくあまねき大みめぐみをそそがせ給ふ心理的条件とこそあふがしめらるるのである。

をりにふれて

小山田をやまだのをしねかるべくなりぬらむ庭の薄すすきもほにいでにけり(明治三十五年)

御苑の薄すすきをみそなはしつとも、小山田をたがやす民のなりはひをしぬばせ給ふのであ

る。自然鑑賞と国家統治とは同一原理にもとづくものであり、政治の道德化は『しきしまのみち』によつて、その芸術的客観性を有する人生観によつて基礎づけらるるのである。

をりにふれて

埋火うづみびにむかへど寒しふる雪のしたにうもれし人を思へば(明治三十五年)

この年、青森にて雪中行軍中の惨事あり、股肱ここうとたのませ給ひたる兵士の遭難をいたませ給ひ、大御身に寒き大御思おほもひあらせられし、としぬびまつるもかしこきかぎりである。

十八 自然鑑賞と表現技巧 — その三 —

風前鳥

○
大空に風のふきあげし木の葉かと思ふばかりにとぶ小鳥かな(明治三十五年)

『風のふきあげし』とのたまはせ給ひたる、『風にふきあげられし』といふに比較して、後者の、反省的に主客を分つて説明しようとするものと、前者の、没我的直観の表現と、ここに芸術の、またそれ故に人生に対する信疑の態度が分岐せしめらるるのである。

鴉からす

やどるべき木立多かる森にてもねぐら争ふむら鳥かな(明治三十五年)

人生に論理的整頓は求むべきではない。動物界にてすらも、そこにはこの如き外形的矛盾が見らるるのである。

馬

のる人の心をはやくしる駒はものいふよりもあはれなりけり(明治三十五年)

論理的整頓に堪へぬものは、『人の心』である。動物すらもこの人の心をしるのである。しかもそのころを、分析的言語によつていひあらはし得ぬのであるから、感情さながらの身振的表出は、そこに芸術的純真と自然とをもつて人の心にうつたふるのである。

騎兵

勇みたつ駒をひかへて進めてふ声やまつらむつはもののもと(明治三十五年)

勇みたつ馬を制しつつ、次の運動に移らむとまちかまへたる緊張の一刹那、踴躍する力の、内にこもりたる満溢の一刹那を、しかも一隊をなしたる集合的動作の合成的威力をしぬばしめらるる大御歌である。

たつこをおもふ
鶴思子

まへになりうしろになりて雛ひなまもるたづの心のあはれなるかな(明治四十一年)

ものいはぬ動物のかなしき心をよませ給ひたる大御歌ををろがみよみまつれば、源の実朝の、『慈悲のこころを。ものいはぬよものけだ物すらだにも哀なるかなや親の子を思ふ』を思ひいでしめらるるのである。また、かれの『ものまうでし侍はべりし時磯のほとりに松ひともと有りしを見てよめる。あづき弓磯辺に立てるひとつ松あなつれづれげともなしにして』をよめば、

寒松

こがらしの風にすまひてひとつ松いくらの冬をしのぎきぬらむ(明治四十年)

を思ひいでしめらるるのである。

また実朝の『あし。難波なにはがたうきふししげき蘆のはにおきたる露のあはれ世の中』には

述懐

かたしとて思ひたゆまばなにごとものなることあらじ人のよの中(明治四十二年)

をしぬばしめられ、また実朝の『箱根の山を打ちうちいでてみれば、浪のよるこじまあり。と

ものものに此海の名はしるやと尋しかば、伊豆の海となん申とこたへ侍しを聞て。箱根路を我越えくれば伊豆の海や沖の小島に波のよるみゆ』には

島冬月

すみなれて誰かみるらむ伊豆の海のおきの小島の冬のよの月(明治十七年)

をしぬばしめられ、音調のうへに似かよひたるおもむきあるのみならず、まことの日本の詩人は忠臣たるべきであり、まことの日本詩人・実朝は忠臣であつたことをしぬばしめらるるのである。かれがその『太上天皇御書下預時歌。大君の勅をかしこみちちははに心はわくとも人に云めやも。ひむがしの国に我をれば朝日さすはこやの山のかげと成にき。山はさけ海はあせなん世成とも君にふた心我あらめやも。』といふ三首を、その金槐和歌集の最後にとどめたるかれのいのちは、永久にいくるのである。彼の現し世のいのちは、余りにはかなく二十八歳で消え失せたのであるが、日本文化史上のかれのいのちは、現代にかしこくも 明治天皇につながらしめらるるのである。

○

国家観念と忠義感情とは綜合精神である。それは、山川・草木・鳥獸・魚介をもをさ

めずぶるところの博大のころである。それが、撰取不捨の大慈悲心である。それは、他人に対しては寛容の同情心であり、自己に対しては自督の至誠心である。故に真実の精神は、必ず芸術的表現を要求するのである。乃木大将も、『神あがりあがりましぬる大君のみあとはるかにをろがみまつる。うつし世を神さりましし大君のみあとしたひてわれはゆくなり』の二首に、その永久生命をしめしてをる。武士道にいふ『名』とは、この『永久生命』のことである。万葉集・巻第十九の大伴家持の歌『慕_{ねが}振_ぶ勇士之名_{のな}一首並短歌。ちちのみの、父のみこと、ははそばの、母のみこと、おほろかに、こころつくして、おもふらむ、その子なれやも、ますらをや、むなしくあるべき、梓弓、すゑふりおこし、なげ矢もち、千ひろ射わたし、つるぎたち、腰にとりはき、あしびきの、八つをふみこえ、さしまくる、こころさやらず、後の代の、かたりつくぐべく、名をたつべしも。反歌。ますらをは名をしたつべし後の代にききつぐ人もかたりつくぐがね。右二首追和_{こたふやまのうへのをくら}三山上憶良臣作歌_二』とある、その山上憶良の歌は万葉卷・第六にある『山上臣憶良沈_{おもき}痾_{やまひ}之時歌一首。をのこやもむなしかるべき万代_{よろづよ}にかたりつくぐべき名はたたずして。右一首。山上憶良臣沈痾之時。藤原朝臣八束_{やつか}。使_{あづまびと}河_か辺朝臣東人_{あづまびと}。令_{あづまびと}問_と三所_の疾_の之_の状_の一_一。

於レ是憶良臣報語已畢。有レ須拭^{しまらく}涕^{なみだ}悲嘆^{うたふ}口ニ吟此歌^{ことば}」のこゝである。

○ 芸術的綜合のはてにのこる唯一の名は、『日本』である。また国民としてその名を『万代』にまた『後の代』にのこすといふのは、日本の後の世にのこすのである。われらにとつて『芸術』が『しきしまのみち』であるのは此の故である。

寄道祝

千早ぶる神のひらきし敷島の道はさかえむ万代^{よろづよ}までに(明治三十五年)

『芸術』は綜合精神であつて、排外精神ではない。されば、

をりにふれて

梓弓^{あづさゆみ}やしまのほかも波風のしづかなる世をわがいのるかな(明治三十五年)

天

ひさかたの空はへだてもなかりけりつちなる国はさかひあれども(明治三十九年)

の大御歌に、此の綜合精神をあふぎまつるべきである。来らむとするあらしを予感せさせ給へばこそ、世界の平和を祈らせ給うたのである。世界平和のためには祖国防護のそ

なへをかたむべきである。平和を求むるとは、人生にまぬがれ難き波風をふせがむとすることであつて、それは決して世には波風の立たぬと空想することではないのである。

また、祖国防護の戦に大御心をなやまさせ給ひて、その戦のをさまりし後、み空のはてなくかぎりなきをながめさせ、人の世をかへりみさせ給ひてよみませる大御歌に、日本精神としての人生観・世界観をあふぎまつるべきである。ここに、観念の世界はつねに現実直接経験によつて統一せしめられ、また生命化せしめらるるのである。

花始開

春毎ごとにうれしきものは咲く花にはじめてむかふあしたなりけり(明治三十六年)

春毎に咲く花をめでむとはかるのではなく、ただちにその咲く花にむかはむとするのである。ことに、『うれし』とのたまはせ給ひたるますぐなる大御心をこそ、あふぎまつるべきである。

この現実的日本精神がそれにむかひ、またそれによつてみちびかるべき観念は、世界、宇宙の实在又は本体あるひは一般普遍的神仏ではなく、われらの生活条件を総括して、その窮極にのこるところの唯一の名『日本』である。それは直ちにその現実的内容

を、われらの感覚世界にみちびき来るところの生命原理であり、威力観念である。それは現実（自然的）理想的であり、自然・規範的であり、存在・命令的であり、信知するところのものといふが如き思考方法によつてうなづかしめらるべきところの芸術の理想としての『しきしまのみち』である。

故に自然鑑賞は、護国愛郷心の作用の一つに外ならぬのである。『芸術のための芸術』主義の如きは、芸術的表現技巧指導上の注意事項の一つに外ならぬのであつて、決して芸術の原理ではないのである。

十九 自然鑑賞と表現技巧 — その四 —

風

○
久方のむなしき空にふく風も物にふれてぞ声はたてける(明治三十六年)

空ふく心なき風も、声をたつるは物にふるるからである。人の心も、ものごとにあたりてこそ、さまざまの思がわくのである。『風も』とのたまはせ給ひたるは、風の音にも人生のすがたを、人の心理をしぬばせ給ふのである。

山

ふく風のおともきこえぬ遠山はただうつしゑのここちこそすれ(明治三十六年)

動かぬ形の目に見ゆるのみであれば、その感覚的印象は理智的分析的であり、間接な

ることうつしゑの如し、写真など見るこちせらるるよ、とのたまはせ給ふのである。

声

目に見えぬ人の心のよろこびも声によりてぞ聞きしられける(明治三十九年)

目にこそ見えざれ、声をきけば心のよろこびもしられけるよ、とのたまはせ給ふのである。あきらかに形をみとめても、その形が部分的静止的であれば、間接的である。その形が目に見えずとも、声をきけば、全生命の律動にふるるのである。それが『ころ』であり、『まごころ』であり、『やまとだましひ』である。

○

月夜蟲

霧はれて風しづかなる秋のよの月にすみゆく蟲の声かな(明治十四年)

蟲

ふかからぬ庭の草にも蟲のねのきこゆる秋となりにけるかな(明治十六年)

朝蟲

朝づく日つゆにかがやく草村にのこりてもなく蟲のこゑかな(明治十六年)

車中聞蟲

をぐるまのうちよりきけばなく蟲の声をわけゆくこことこそすれ(明治十六年)

庭前蟲

ゆふされば庭の草葉も露おきてはなたぬむしの声ぞきこゆる(明治十七年)

蟲声近枕

いづくにて鳴くともしらぬ蟲のねの枕はなれぬ秋のよはかな(明治十九年)

月前蟲

さやかなる月夜の庭のきりぎりすいづこのくまにかくれてか鳴く(明治二十九年)

終夜聞蟲

よもすがら鳴きもたゆまぬ蟲のねにわれもねぶらであかしつるかな(明治二十九年)

庭前蟲

とのもりの露をはらひし朝庭に猶夜をのこす蟲の声かな(明治三十年)

蟲声非一

をちこちの野山のむしもはなたれて鳴くねくらぶる園の内かな(明治三十一年)

蟲

あきのよの月はこのまにかたぶきてくらき垣根に蟲のねぞする(明治三十四年)

旅宿蟲

わがためにあつめしならむ草枕たびのやどりの松むしのこゑ(明治三十四年)

初秋蟲

夏よりも暑き日なりと思ひしをくるれば庭に蟲ぞなくなる(明治三十六年)

蟲声非一

あきの野のちぐさの花のいろいろを声にうつして蟲ぞなくなる(明治三十七年)

蟲声滋

月のかげふまむとおもふ浅茅生あさぢよにみちてきこゆるむしの声かな(明治四十年)

窓前蟲

くさひばり鳴きもぞやむと秋の夜の月なき窓もさされざりけり(明治四十年)

聞蟲

さよふかく心しづめてきく時ぞむしの鳴くねはあはれなりける(明治四十一年)

海辺蟲

浪のおと遠ざかり行くひきしほにむしのねたかし浜の松原(明治四十一年)

蟲

ひとりして静かにきけば聞くままにしげくなりゆくむしの声かな(明治四十二年)

蟲声非一

さまざまの蟲のこゑにもしられけりいきとしいけるもののおもひは(明治四十四年)

蟲声欲枯

かれがれになりぬる庭の蟲のねはなかぬ夜よりもさびしかりけり(明治四十四年)

蟲

ここに、蟲の声をよませ給ひし大御歌を引用しまつりたるのである。鳥の声は、ひとしきりに断絶せしめらるるからして、声そのものの諧調と律動とを鑑賞するいとまなく、ただその声をききたる後の概括的印象がのこるのみであるが、蟲の声はそれをききつつ人の心をそのしらべにあはせて、これを鑑賞しうるのである。

よもすがら蟲の音をききあかさせ給ふとよませ給ひし大御歌よ、まことに、そを、を

ろがみよむことのかしこさ、言ひあらはすべき言葉もなきこちせらるるのである。

『さよふかく心しづめて』 蟲の音を『あはれ』ときかせ給ひ、しげき蟲の音に『あきの野のちぐさの花のいろいろ』をしぬばせ給ひ、また、『いきとしいけるもののおもひ』をしぬばせ給ふ大御心は、自然と人生とをすべをさめさせ給ふのである。『一切衆生いっさいしゆじょう悉ことごと有りニ仏性ぶつじょう』といふ教義は、ここに直接芸術的に表現せらるるのである。

○

京都をいでたたむとするころ聴雪にて

わたどのの下ゆく水の音きくもこよひ一夜ひとよとなりけるかな(明治二十三年)

水声

九重ここのへのうちもみやまのこちして枕にひびく水の音かな(明治四十年)

晩涼

おばしまの下ゆく水の音すみえずしき風のふくゆふべかな(明治四十二年)

水声

近からぬ水のひびきもきこえけりふけしづまれるよはの寢覚ねざめに(明治四十三年)

○
 蟲の声とともにひきつづき、人の耳にひびき、心にうつたふるものは、水の音である。あたりしづかなるに心をしづめてきく時にこそ、蟲の声も水のひびきも、『統一のはてにのこる名』を、すなはち『信』を、また『全生命』を、その諧調と律動とにしめすのである。

管 絃

絲竹のしらべたへなる声にこそ人の心もやはらぎにけれ(明治四十五年)

心こゝろのやはらぐとは、生命の律動のおのづからなる進展にしたがふことである。これまことに、『従順の義務』のよりどころである。ここに国民は、『国憲を重おもじ国法こくぽうに遵したがひ』、国家の秩序、社会の安寧も保持せられ、人の心もやはらぐのである。『移うつレ風かぜ、易やすレ俗しよく、莫なレ善ぜんニ於おレ樂がく、一、安やすレ上かみ治ち、民たみ莫なレ善ぜんニ於おレ礼らい』(孝経) 又『樂がく者天地之和也、礼者天地之序也、和故百物皆化、序故群物皆別』(礼記) といふ『楽』は『和』である、といふ教義は、『いきとしいけるもののおもひ』の大御歌によつて、芸術的表現の直接性をあたへしめらるるのである。『和』は『協力』であることは、すでにくは

しく論じたのである。『和』はまた『無窮』である。それは情意の要求であり、情意の表現である。人生の人生たるはその情意生活である。

○

蟲の音、水のひびきをよませ給ひたる大御歌にも、人生のをしへをあふぎまつるみ民われらの幸福を思はしめらるるのである。

二十 有限自然より無限人生へ

折にふれて

わけばやと思ひ入りぬる道にしも高きしをりのみえそめにけり(明治三十七年)

この大御歌に『道』とよませ給ひたるは、人生原理の体験をささせ給ひしものとあふがしめらるるのである。これは、『しきしまのみち』につきてよませ給ひしもの、ともあふがしめらるるのであるが、しきしまのみちは、即ち人生原理の現しきあらはれである。

詞

ききしるはいつの世ならむ敷島のやまと詞ことばの高きしらべを(明治四十三年)

をりにふれて

敷島のやまと心をうるはしくうたひあぐべきことのはもがな(明治四十五年)

これらの大御歌は、国語、日本語、また和歌についての大御歌である。人の行くべき道、道徳的法則、またその基くところの人生の原理は、『うた』にうたひあげられて現しくしめさるのである。

されば確信をもつて進みゆくべき道は、やがてはてしなき人生の律動に没入するところの無窮生命で、『高きしをり』は見えつつも、行きつくことなき永久の『求道』である。

草花

秋の野のちぐさの花にくらぶれば染めなす色は限ありけり(明治三十七年)

宝

あしはらの国とまさむとおもふにも青人草ぞたからなりける(明治三十七年)

限りなき変化と動揺と進行との自然をめましましたし大御心は、やがて人生の核心に徹到せさせ給ふのである。されば、『青人草』ぞ国のたからなる、とのたまはせ給ふのである。

述懐

山のおく島のはてまで尋ねみむ世にしられざる人もありやと(明治三十七年)

照るにつけくもるにつけて思ふかなわが民草のうへはいかにと(同)

また、これらの大御歌ををろがみよみまつれば、ちかくつかへまつる臣らのみにあらで、天さかる鄙ひなにすむ民草のうへに大御心をそそがせ給ふを、かしこみあふぎまつるのである。かくも国民全体また全国民生活そのものに大御心をそそがせ給ふは、また、そをすべをさめ、組織づくところの形式と名義とのみでなく、内容と実質とを、又一般精神生活に於いては、分析抽象概念の論理的関係のみでなく、全体直接経験の情意的感激を重んぜさせ給ふのである。

読書

文字をのみよみならひつつ読む書よみの心をえたる人ぞすくなき(明治三十七年)

これ、単独語義の論理的関係の分析を、総合的直観に摂取して体験化し生命化すべきを、をしへさせ給ふのである。故に一切の知識は、人生観にをさめしめらるべく、一切の感覚的印象もまた、人生観にをさめしめらるべきである。感覚と知識と自然と技術と

は、各人の内心に於いて、あらゆる現世の障礙を打破して統一化せられ生命化せられようとするのである。

この人間内心の戦ひを客観世界に反映せしむれば、個が、全に没する『悲劇』である。『生より死に』進みゆく人生は、同時に、『有限より無限に』、即ち『解脱』としての『滅』の実現過程である。

思古宮

さくらさく春なほ寒しみよし野の吉野の宮の昔おもへば(明治三十七年)

懐古のうたとして、かくばかり直接的体験にうったへてそぞろに人生の悲劇をしぬばしめらるる作は稀有である。天皇の大御身にましまして、『春なほ寒し』とよませ給ひたるをかしこみあふぎまつるべきである。

田安宗武が、『武蔵野を人は広しとふ我はただ尾花わけ過ぐる道とし思ひき』と、感覺的世界の現実態を重んじ、因襲的概念の抽象論理に囚はれなかつたことを示してをるのは、彼が稀有の真歌人であつたからである。彼がまた、『み吉野のとつ宮処とめくればそこともしらに薄生ひにけり』とよんだのも、現実態に重心を置いたものである。

思想が直接感情とともなはしめらるるとき、ここに始めて思想詩が生るのである。

直接体験にともなふ痛切感情によつて、思想は生命化せらるのであつて、それがインスピレーションである。それは個体が全体に、概念が感情に没入し渾融せしめらるる意識消滅作用であり、総撰綜合過程であり、宗教的踴躍歡喜心であり、入信・発心・涅槃・解脱の境である。

をりにふれて

ひとたびは見むよしもがな名ぐはしき吉野の山の花のさかりを(明治四十一年)

の大御歌によりて、吉野山には行幸せさせ給はざりしことをしぬびまつるのである。

『思ニ古宮ニ』の大御歌は、さくらさく春のけしきをしぬばせ給ふゆとりも無き、懐古の情を歌はせ給うたのである。『兵馬の権は一向に其の武士どもの棟梁たる者に歸し、世の乱と共に政治の大権も亦其手に落ち、凡七百年の間武家の政治とはなりぬ』、このたまはせ給ひたる明治十五年軍人に下し給へる勅諭ををろがみよみまつりて、この大御歌をいただきまつるべきである。

明治三十七八年戦役（一九〇四、五）は、日本が歐洲の一国と全力を以て生死興亡戦を戦ひ、ここに始めて、全世界文化開展に直接参与するに至つたのである。大御歌も、自然鑑賞から述懐抒情の方面に新なる開展進路を分化せしめ給うたのである。

待 鶯

思ふこと多きことしも鶯うぐひすの声はさすがにまたれぬるかな（明治三十七年）
とよませ給ひつつも、

見 花

戦たたかひのにはに立つ身をいかにぞと思へば花もみるこちせず（明治三十七年）
をりにふれて

世の為にも思ふ時は庭にさく花も心にとまらざりけり（明治三十七年）

花鳥のいろねは常にかはらねどこころにとむる人なかりけり（同）

はなとりの上も思はでよろづ民くにに心をつくす春かな（同）

山ざくら見つつぞおもふものふの心の花もさかりなる世を（同）

思ふ事たえぬ今年は春の夜もねざめがちにてあかしけるかな（同）

と花鳥に大御心もとどめさせ給はず、全国民もまた、大御心にしたがひまつりて祖国防
護のつとめにいそしみつかへまつれば、『山ざくら見つつぞおもふものふの心の花も
さかりなる世を』と大御歌よませ給ひしところ、あふぎまつるのである。

○
紫陽花あぢさゐ

うるはしき色に匂へど何となくさびしく見ゆるあぢさゐのはな(明治三十七年)

紫陽花の特色をつづめていひあらはしつくさせ給ふのである。『何となくさびしく見
ゆる』、とあるがままをみそなはし給ひて、感ぜさせ給ひしまにまにうたはせ給ひし、
とこそしぬびまつるのである。これ写真・写生の自然描写に対する思想詩である。

海辺夏月

浜殿の庭の真砂路まさごちふみならし波間すずしき月をみるかな(明治三十七年)

『庭の真砂路ふみならし』とのたまはせ給ふによりて、そぞろあるきせさせ給ふ時間
の経過と運動の節奏とは、月照りがやく海上の光景もゆれしめらるるが如く、自然の
形象は、情意的動乱のうちに没せしめられようとするのである。

夏 草

事繁しげき世にも似たるか夏草は弘ふあとよりおひ茂りつつ（明治三十七年）

人生法則を自然のすがたによつて暗示せさせ給ふのである。人生は主位を占めて自然を総撰するのである。

二十一 戦争と平和

庭泉

○
庭の面に清水しみづの音はきこゆれどむすふいとまもなき今年かな(明治三十七年)

『清水の音はきこゆれど』、とあるがままに思想の順序に随順せさせ給ひ、『庭の面に音のきこゆるま清水を』とやうに、論理的に構成せさせ給はぬを、あふぎまつるべきである。

夏山水

年々におもひやれども山水を汲みて遊ばむ夏なかりけり(明治三十七年)

転地による生活条件の変化を求むべき避暑旅行のごとき、一般国民にもゆるされたる

ことであるが、その御いとまもあらせられず、民とともに、又民にかはりて、大御身をいたづかせ給ひたる、まことに恐多おそれくありがたき極きはみである。前の一首にては、直接感覺世界から反省思想世界に、この一首にては、純粹思想世界に詩境を求めさせ給ふのである。

また、山近き京都をしぬばせ給ひつつ、山遠き都にあらせ給へば、暑さはひとしほに感ぜさせ給ひたるべく、しぬびまつるのである。

夏住居

たちつづく市いちの家居いへは暑からむ風の吹入ふきいる窓せばくして(明治三十七年)
吹く風もたえず通ひて夏はただ高き所ぞすみよかりける(明治三十七年)

夏氷

夏しらぬこほり水をばいくさ人つどへるにはにわかちてしかな(明治三十七年)
をりにふれて

暑しともいはれざりけりにえかへる水田みづたにたてるしづを思へば(明治三十七年)
たへがたき暑さにつけていたでおふ人のうへこそ思ひやられるれ(同)

千万のあたをおそれぬますらをもこの暑さには堪へずやあるらむ(同)

ときのまに硯すずりの水のかわくにもけふのあつさのしられけるかな(同)

もののふの野辺のたむろやあつからむ宮の内にも風をまつ日は(同)

いくさ人いかなるのべにあかすらむ蚊の声しげくなれる夜ごろを(同)

つはものはいかに暑さを凌ぐらむ水にともしといふところにて(同)

煽風器

かざぐるまいざかけさせよ日ざかりの暑さいとはず人のまゐくる(明治三十八年)

夏述懐

まつりごといでてきくまはかくばかりあつき日としも思はざりしを(明治三十八年)

をりにふれて

暑しともいはれざりけりたたかひ戦にはの場にはにあけくれたつ人おもへば(明治三十八年)

これらの大御歌を、これらと同じく暑さをよませ給ひたる他の大御歌とともにをろがみよみまつれば、『山水を汲みて遊ばむ夏なかりけり』と大御歌よませ給ひたることの、

まことに恐多きことを感ぜしめらるるのである。

秋夜対月

たたかひのにはに心をやりながらむかひふかしつ秋のよの月(明治三十七年)

海上月

あたの船うちしりぞけていくさびと大海原おほうなばらの月やみるらむ(明治三十七年)

月前遠情

もろこしの荒野の末のありさまを思ひやりても月をみるかな(明治三十七年)

きはまり無き自然をながめさせ給ひて、かぎり無き人生事実の開展をしぬばせ給ふのである。

歌

ひとりつむ言の葉草くさのなかりせばなにに心をなくさめてまし(明治三十八年)

の大御歌ををろがみよみまつれば、この自然と人生との無極開展に随順せさせ給ふかぎり知られぬ大御心に、全国民に対する大御おほみいづくしみをあふぎまつるのである。芸術的表現を求めようとする悲壯なる偉大精神は、これぞ即ち、日本を守護する現うつしき神霊で

ある。

海

仇波あまたなみのしづまりはてて四方よものうみのどかにならむ世をいのるかな(明治三十七年)

この日本を守護する日本精神は、平和を求むる精神である。生活の安堵は、人生の本源的要求である。この生活の安堵を保障する祖国を防護することは、祖国神靈の守護の下に行はるるのである。所謂倭寇いはゆるも元寇の反動であり、元寇の役とともに明治二十七年(二八九四・五)、同三十七・八年(二九〇四・五)の役は、祖国防護戦であり、大正三年(二九一四)の日独開戦は、ドイツ側に於いても明治二十七年・八年戦役後の三国干渉の返報であると解せらるべく、また大英帝国も、日本がその同盟国に対してとつた態度に、その好みよしを永久に忘却せざるべき義務を感じすべきである。

老松

やしなひてなほも齡よはひをたもたせむ庭にちよふる松のひともと(明治三十七年)

籠中鳥

籠このうちこにさへづる鳥の声きけば放たまほしく思ひなりぬる(明治三十七年)

禽獸草木をもいつくしみ給ふ大御心によりてこそ、わが日本は守護せしめらるるのである。

劍

しきしまの大和心やまとこころをみがかずば劍つるぎおぶともかひなからまし(明治三十七年)

正述心緒

よもの海みなはらからと思ふ世になど波風のたちさわぐらむ(明治三十七年)

平和と友情とを求むるころは、即ち祖国防護の精神である。

述懐

おほづつの響ひびきはたえて四方よものうみよろこびの声いつかきこえむ(明治三十七年)

日本精神は平和精神である。世に鬭争・変革・戦乱あらざらしめむとする故に、この平和精神が非常時にその威力を発揮して、平和を克復しようとするのである。

人

世の中の事ある時にあひてこそひとの力はあらはれにけれ(明治三十七年)

非平和時にこそ、平和精神はその威力を発揮するのである。平時にも鬭争を起し、変革

を、謀、ら、う、と、す、る、マ、ル、ク、ス、主、義、の、如、き、は、事、あ、る、時、に、は、そ、の、影、を、潜、む、か、又、は、祖、国、の、自、主、自、立、を、奪、は、う、と、す、る、敵、国、に、内、応、し、よ、う、と、す、る、に、至、る、の、で、あ、る。

○

ロカルノ協約の成立は、ヴェルサイユ条約調印後七年目に、やうやく世界文化単位としてのヨーロッパが、聖徳太子のたまはせ給ひたる『以テ和ヲ為スレ貴^{たつと}ト』といふ、その『和』の原理によつて、従来の敵対関係を緩和しようとする意志を表示したものである。之を、『闘争』原理に基く『革命』手段によつて実現しようとするマルクス主義としての『国際主義』と比較すれば、後者の主張の含む論理的矛盾が明^{あきら}になるのである。『闘争』と『聯合』といふ、それは外的闘争であり、内的聯合であり、聯合のための闘争であらねばならぬ。即ち『和』のための『戦』であらねばならぬ。求むるところ、目的とするところは、和であらねばならぬ。しかしながらマルクス主義は、その共産党宣言の第一章を、『一切のこれまでの社会の歴史は階級闘争の歴史である』といふ一文を以て始めてをる。それは、外的・部分的な事実を執着するところの迷妄である。しかもそれは、迷ひつつあるを知らぬところの、また知らぬ故の迷ひであり、総合的に直観すべき

人生を、分析的に認識しようとするところの知識中毒である。

信とは和である。和とは芸術である。人生を芸術化すべきである。人生を理論化し機械化することなく、理論と機械とをも、全人生のうちに摂取して生命化し芸術化すべきである。

マルクス文献の代りに、われらは『しきしまのみち』としての日本芸術を求むべきである。

二十二 無限世界の統一中心

○
籠中蟲

ところせきふせごの内に鳴くむしはえらばれたるや恨うらみなるらむ(明治四十二年)

これ、人為形式と既成区分にとらはれぬところの、『衆生しゅじょう』生活の自然と自由とをしぬばせ給うてよみませる大御歌、とこそあふがしめらるるのである。

人生観としての現実主義は、永久生命希求の本能に随順しつつ、ただちに宇宙観を規定し、そこに無限世界を觀照せしめ、またそれに比類せしめて永久生命を希求しようとしたことは、日本民族の思想を、語義訓詁の窮屈なる文字学問、又は理智主義より救つたのである。これは『天津日嗣あまつひつぎは天つちあめのむた、とことにはに榮えまさむ』(日本書紀)『天つち

のむた、とことはに仕へまつらむ』(古事) 『明つ御神の大八島国を天つちつきひとともに、安らけく平らけく知ろしめさむ』(出雲国造) 『天地の依りあひのきはみしろしめす神のみことと』(萬葉集卷二日並皇子尊歌) 『天地とともにをへむと思ひつつかへまつりしころたがひぬ』(萬葉集卷二皇子尊) 等に示さるるところの、『天壤無窮』の人生・国家観、また忠義感情が、無限開展に随順し、衆生生活に没入せしめて凝固停滞に陥らしめぬのである。マルクス主義が窮極開展階次を夢想して、そこにそれ以上に開展せざるべき行き詰りの極楽世界に共産主義の名義を与へようとする如きは、それが、ルネサンス以前の閉塞宇宙観に低回する中世思想の残存するロシアに於いてのみ、残忍暴力革命を起し、その主義が信奉宣伝せらるる所以である。



星

見るままに数そふものは大空につらなる星の影にぞありける(明治四十一年)

蟲

ひとりして静かにきけば聞くままにしげくなりゆくむしの声かな(明治四十二年)

この二首の大御歌をしづかに拝誦しまつれば、われらの心にひらくるものは、無限の世界である。それは生成しつつある無限であつて、完成したる無限ではない。

○

波

しづかなるあしたに見ればわたの原渚なみざにのみぞ波はよせける(明治四十二年)

しづかになぎわたる大海原の、渚にのみぞ波のよせてはかへすありさま、此の二者の対照は、大海原のいよいよひろく、しづけきありさまを、しぬばしむるのである。『渚にのみぞ』の『ぞ』の一語に、心をとどめてよみまつるべきである。

梅

春さむみ雪はしばしばかかれども咲くべき時と梅はさきけり(明治四十一年)

車中見花

をぐるまのすぐるまにまに花をみて今日行く道は、遠しと思はず(明治四十一年)

春旅

桜さく野みち山みちゆく旅は、あそびにいでしこちこそすれ(明治四十一年)

夏日対泉

清水しみづわくこかげにいでてすすむ、こそわがよの夏のいとまなりけれ(明治四十一年)

夏車

重荷ひく車のおとぞきこゆなるてる日の暑さたへがたき日に(明治四十一年)

旅行

海くぬが軍いくさのてぶりみるが、うちに旅の日数はかさなりにけり(明治四十二年)

鏡

世の中の人のかがみとなる人のおほくいひのもとでなむわが日本ひのもとに(明治四十三年)

○

現、実、の、一、点、は、無、限、の、開、展、に、つ、な、が、り、官、覚、の、世、界、は、憶、念、の、情、意、に、み、ち、び、か、る、の、
で、あ、る、。

をりにふれて

さまざまの世のたのしみも言のはの道のうへにはたつものぞなき(明治四十三年)

をりにふれて

ひと筋をふみて思へばちはやぶる神代の道もとほからぬかな(明治四十三年)

基準の決定と無限の開展と、目標の確認と自由の創造と、その合致せしめらるるるのである。そこは、『言のはの道』であり、『しきしまのみち』であり、『神ながらのみち』であり、国憲である。

○

朝春雨

閨の戸をあけてもくらき春雨はるさめに夢のなごりのさめがたきかな(明治四十一年)

首夏雨

松の花ちりたる庭につゆみえてこさめ涼しくふるあしたかな(明治四十二年)

ほのぐらき春雨ふる朝の夢ごこち、夏の小雨のすがしき庭面のけしき、想像の世界に放たしめらるるをおぼえしめらるる大御歌に、天地悠久の感をいだきつつ、

述懐

ひろき世にたつべき人は数ならぬことに心をくだかざらなむ(明治四十二年)

かたしとて思ひたゆまばなにごともなることあらじ人のよの中(同)

の大御歌ををろがみよみまつれば、想像と理解と、感情と意志と、それら対照的要素の結合せらるべき、『一旦緩急ある』場合にそなふる平生の用意を促さしめらるのである。此の一瞬の決行は、また不断の用意と対照せしめらるのである。

池辺花

さく花の影うごくなり浜殿にはの池水しほやさすらむ(明治四十二年)

微妙の変化、機微の消息は、理智的工夫と反省的謀略とによつてではなく、芸術的直観の自由自然の世界に於いてこそ、正しく認識せらるのである。

雨後眺望

雨雲の風にきえゆく山のはにあらはれそめぬ松のむらだち(明治四十四年)

雲

一村と思ひし雲のいつのまにあまつみそらをおほひはてけむ(明治四十五年)

また、これらの大御歌ををろがみよみまつりつつ、自然の変化は鑑賞すべく、人事の動乱はこれに対応すべき身構へを用意せぬばならぬことを、かへりみしめらるのである。

る。

をりにふれて

思はざることのおこりて世の中は心のやすむ時なかりけり(明治四十五年)

○

庭上松

栄えたる一木ひときの松にもとづきてつくれる庭のおもしろきかな(明治四十四年)

松上鶴

朝づく日とよさかのぼる山松の梢こずえをしめてたづぞ鳴くなる(明治四十五年)

変化と動乱とを認識する主観、無限の複雑を統一する中心、そは、心理的統御要素であり、国家統治の大権であり、御空みそらの太陽であり、それにもとづきて庭づくりせらるる一木ひときの松である。大日本帝国を統治せさせ給ふ 天皇の大御心をしぬばしめさせ給ふいっ厳くしき『松上鶴』の大御歌ををろがみよみまつることのかぎりなき歓喜は、つひに、ことばにいひつくし得べくもあらず、しかしながら、ことばによりてのみ、いひあらはし得るのである。

二十三 国家興亡史的法則と天皇統率兵馬大権

エルネスト・ラヴィツス『歐洲政治史概論』の最後の一文は、『如何なる力も、消耗するものである。歴史を指導する力も、到底永久性のあるものではない。三千年の昔に、アジアから其力そのちからを継承したヨーロッパも、恐らく永久にそれを保つものではない』(広瀬哲士氏訳)といふのである。しかるにわれらは、『個人生死・国家興亡は、人類生活の運命である』と信じつつ、また、『祖国日本は、すでに確立せられたる世界文化単位であり、全ヨーロッパ統一の過程にある諸国とは異りたる開展階次にあるものであつて、普遍的概念としての国家ではなく、まことにはただ日本とのみよぶべきである。故にわれら日本国民にとつては、日本は世界であり、人生である。日本は、われらの内心にい

くるところの宇宙であり、永久生命であり、信順意志である。そは、祖国日本を防護せむとする実行意志であり、日本はほろびず、と信ずる一向専念の信仰である」(序論宣言参照)と信ずるのである。

○ 井上毅は、その『梧陰存稿』に『朝鮮人の著述の書を読むに、高麗の末、支那の文学一たび其の国に入りしより、朝鮮人の思想は挙りて皆支那を尊崇して文明極盛の国として是を模範とし、是に追蹤倣効するに余念なきが如し。而して裏面より其の国の歴史に依りて観察するときは、朝鮮一国は、前後分ちて兩断とすべし。支那の文学未だ朝鮮に入らざりし前は、野蛮ながらも高勾麗は、一の強大国なることを失はざりしが、支那の文学一たび其の国に入りし後は、一変して全く一の文弱国と成果てたり』といつてをる。

○ 愚管鈔卷七に『世と申と人と申とは二の物にてはなき也。世とは人を申也。その人にとりて世といはるる方は、をほやけ道理とて、国の政事にかかりて善悪をさだむるを世

とは申也。人と申は、世の政にもものぞまず、すべて一切の諸人の家の内までをおだし
くあはれむ方の政事を又人とは申也。其人の中に、国王より初めてあやしの民まで侍ぞ
かし。それぞれ国王には、国王ふるまひよくせん人のよかるべきに、日本国のならひ
は、国王種姓の人ならぬすぢを国王にはすまじと、神の代より定めたる国也。』とある。

○

わが日本に於いては、万世一系の皇統を奉戴し、『国王種姓の人ならぬすぢを国王に
はすまじと、神の代より定めたる』は、個人能力によつての英雄の支配を原則とするの
でなく、『国王ふるまひよくせん人』を選挙せむとする如き国体又は政体とは全く異つ
てをるのである。即ち、全国民生活の史的展開を、伝統的に表現せさせ給ふところ
の、皇統を仰ぎまつるのである。

またこの綜合性に基いて、文と武との一方に偏倚することなく、個体は全体に没入せ
しめられて、それは不可思議意志力として、しきしまのみちによりて客観的根拠をかた
めつつ、うけつぎつたへ、をしへひろめしめられつつある。これが、日本意志であり、
また、日本である。この日本は、日本にしきしまのみちのたえせぬかぎり、また、その

みちのたえせぬ故に、しきしまのみちといはるのであるから、ここに『日本はほろびず』といふ信がうまるるのである。

道

ひろくなり狭くなりつつ神代よりたえせぬものは敷島の道(明治三十九年)

歌

戦たたかひのいとまある日はもののふも言葉の花をつむとこそきけ(明治三十八年)

○

明治十五年の 勅諭に『朕ちんは汝等軍人なんぢらの大元帥たいげんすいなるぞ』とのたまはせ給ひ、また、大御歌よませ給ひて、『明治天皇御集』を国民にしめさせ給ひたることを、山鹿素行の今の世にありせば、いかに感激の涙にむせび、をろがみまつるべきであらうか、としぬびつつも、山鹿素行の精神をうけつぎつたへた乃木大將が、しきしまのみちに志し、明治三十五年(一九〇二)九州にて大演習を行はせ給ひしをり、乃木大將の詠草に、かしこくも勅批を加へさせ給ひたることなど、しぬびいでしめらるのである。(『学習院輔仁会編纂 乃木院長記念録』)
乃木大將の辞世『うつし世を神さりましし大君のみあとしたひてわれはゆくなり』

は、しきしまのみちが、個体生命の全体生命へ没入せむとする瞬間に、天籟的に發揮せられたる絶唱である。

詩歌ことに、しきしまのみちは、個人の心と心との交渉に根拠をおくので、社会国民生活は、個体と全体との交渉によつていとなまるるのであるから、詩歌は、一般芸術とともに、社会的また国民的性質を有するのであるが、この個と全との関係が部分的利害と外部的形式とのそれだけでなく、全生命の没入となるとき、現実生活に於いては、『信』となり、精神生活に於いては、『誠』となり、『神ながらのみち』と『しきしまのみち』とが一致し、生活の芸術宗教化が実現せられ、ここに永久生命が表現せられて、『しきしまのみち』となり、その経典『明治天皇御集』は、かしこくも、天皇の大御心が全國民の心につながらしめられ、ここにまことに、祖国無窮生命の表現、現実的理想世界、理想的現実世界を示顯せさせ給ふのである。

○

故に、われらが『日本はほろびず』と信ずるといふことは、『明治天皇御集』を拝誦しまつるといふことである。

○
 国家興亡の問題は、史学の根本問題である。国家生活は、偉大なる精神によつて指導せられねば興隆せぬのであるが、個人生命は有限である。故にその精神は、個人生活を超えてうけつぎつたへられねばならぬのである。また此の指導精神は、個人的特異性に基くものであるよりも、全体生命に滲透して、国語世界に沁刻せらるるところのものであらねばならぬのである。国家永久生命は、個体主義をすてて、全体主義が国民宗教となり、その表現宣布が国民芸術となり、その国民詩が国民思想の統一要素となるときに、始めて実現せらるるのである、それが『しきしまのみち』である。

故に『しきしまのみち』は、全国民生活そのものの如く総合的であつて、個体的特異を求めようとせぬのであるから、技巧の作為よりも、自然の開展に随順しようとするのである。故に、『明治天皇御集』を拝誦し、謹解しまつるにつけても、常にこの『しきしまのみち』をその立脚地とし、また視点として、山鹿素行が『愚謂』。至治者恥^ハ民ノ知^ルニ帝徳^ヲ。中治^ハ畏^ルニ民ノ不^ルヲ知^ラニ帝徳^ヲ。下治^ハ欲^スレ令^シニ民^ヲ知^ラニ帝徳^ヲ。暴治^ハ令^ムニ民^ヲ強^シ。頌^シニ其^ノ徳^ヲ也。至治者上知也。暴治者下愚也。中治者不^レ久^シ。下

治者亡^レズ。』(童問)といひ、『太平無^レ象シテ、ソノ化行ハル』(上)といひ、また『聖人ノ無事易簡ハ、千鍊万鍛ノ間ヨリ、以テ出生ス』といふ心がけをわすれず、これらはすべて『しきしまのみち』によつて実現せらるるを思ふべきである。

○

『凡ソ聖人ノ道、恆久ナラザレバ、其化ヲシクコトヲ不^レ得也、只一旦人ノ赴向テ、喜^タノシムコトヲナス事ハ、易シテ、久シテ其^ノ徳ニ化スルコトハ難シ、ソノユヘハ、当分民ノツカレ苦シムコトヲ知テ、コレヲ救ヒコレニ財ヲ与フルハ、皆ナリヤスキコト也、コレ当分民ヲ悦^バシメタノシマシムルノ道也、人ノ欲ニ限アラズシテ財ニ限アレバ、毎度コレヲ施シコレヲ濟^フ事、堯舜ノ聖代ニモナリガタシ、故ニ財ヲ出シ倉廩ヲヒライテ民ヲスクヒ、ソノ患ヲノガレシムルコトハ、皆節アツテ恆ニ用ユルコトニアラズ、サレバ恆久ニ民化シテ上ノ徳ノヲヨブ、コレヲマコトノ至治ト云也、必ズ一時ノ悦ヲキハメテ、コレヲ以テ民化セリト不^レ可^ラレ思^フ也、久シテソノ民安ズルトキハ、マコトノ化ト可^レ云^フ也、易^ク云、聖人久^クニ於道ニ而天下化成シ、觀^ニ其^ノ所^ニ恆^ニ而天地万物之情可^レ見^ル矣トイヘルハ、コノ心也』(童問)

所謂^{いはゆる}社会政策なるものが、『しきしまのみち』をわするれば、その積弊を窮極に達せしむるに至るのであるからして、『しきしまのみち』は、現代政治生活の改革を指揮すべきである。

寄道述懐

白雲のよそに求むな世の人のまことの道ぞしきしまの道(明治三十七年)

二十四 国家刑罰権と国民思想

○
心

ひろき世にまじはりながらともすれば狭くなりゆく人ごころかな(明治四十三年)
をりにふれて

教草^{をしへくさ}しげりゆく世にたれしかもあらぬ心の種をまきけむ(明治四十四年)
行

世の中の人の司^{つかさ}となる人の身のおこなひよただしからなむ(明治三十七年)
仁

ちよろづの民の心ををさむるもいつくしみこそ基^{もと}なりけれ(明治四十三年)

述懐

をさめしる国のはてまでしらせばや民安かれと思ふころを(明治四十三年)

楽

千万の民と共にもたのしむにますたのしみ 楽たのしみ はあらじとぞおもふ(明治四十三年)

教育

わがしれる野にも山にもしげらせよ神ながらなる道をしへぐさ(明治四十三年)

をりにふれて

みちみちにつとめいそしむ国民くにたみの身をすくよかにあらせてしがな(明治四十三年)

蟲声非一

さまざまの蟲のこゑにもしられけりいきとしいけるもののおもひは(明治四十四年)

紅葉

うつろひて散らむとすなるもみぢ葉をうつくしとのみ思ひけるかな(明治四十四年)

鳥

うちつれて渡るをみればとぶ鳥もおもひおもひの友ぞあるらし(明治四十四年)

被書知昔

よむふみのうへに涙をおとしけり昔の御代みよのあとをしのびて(明治四十四年)

教育

よきたねをえらびえらびてをしへぐさ教草うゑひろめなむのにもやまにも(明治四十五年)
をりにふれて

敷島のやまとしまねのをしへぐさ神代のたねの残るなりけり(明治四十三年)
をりにふれて

いそのかみ古きてぶりをのこさなむ改めぬべきこと多くとも(明治四十四年)
をりにふれて

開くべき道はひらきてかみつ代の国のすがたを忘れざらなむ(明治四十五年)

○

明治四十三年(一九一〇)より同四十四年にいたる間の大御歌ををろがみよみまつれば、今日に於いて国家の重大問題となりつつあるところの国民思想の問題について、いかに大御心をそそがせ給ひしか、をしぬびまつるのである。

『せまくなりゆく人ごころ』とのたまはせ給ひたる、これまことに、思想悪化の心理ををしへさせ給ひしもの、とあふがしめらるるのである。

階級闘争も、党派支配も、また、財閥・官僚・各種特権者の専横も、すべて『せまき心』にもとづくものである。『あらぬ種』は、この『せまき心』よりの偏倚理論である。それが危険思想であり、破滅思想である。

『世の中の人の司つかさとなる人』は、必ずこのせまき心をすてて、『背私はいし向公こうこう』を心がけねばならぬのである。聖徳太子十七条憲法は、『群卿ぐんけい百僚』の『臣道』をとかせ給うたものである。ことに、その『五ニ曰てつ絶てつレ養やうヲ棄すくレ欲よく明あきらヲ弁べんニ訴う訟たうヲ。其その百姓ひやくせい之の訟たう一いつ日いち千せん事じアリ。一日いちにち尚なほ爾しかリ。況いは乎か累かさニテて歳としヲ。頃このころを治さレ訟たう者もの得えレ利りヲを常じょう見けんレ賄まひ聴きレ讞うトへ。便すなは有あルモレ財さい之の訟たうハ如ごと石せき投なズルガごと水みづニシ者もの之の訴うハ似ごとニ水みづ投なズルニシ石せきニシ。是こ以もテ貧しん民みんハ則すなはち不し知らレ所よレ由ゆ。臣おみ道みち亦また於ここレ焉か闕かト。』とのたまはせたるは、今日ことにあふぎいたたくべきである。

現東欧諸国に於いては、一国内の少数民族の所有土地は、所謂農政改革によつて實際

には殆んど没収せられつつある。現日本に於いて、利得独占・安逸特権生活者たりしところの地方農村地主は、最近時代の進展と共に侵入せし農村争議煽動者の共産主義思想を反撥して、自発的に新活路を見出すべき能力もなく、しらずしらず東欧諸国の少数民族の如き地位に陥らうとしつつある。しかしながら、一般産業世界の資本主義的組織は、今日なほ利得独占・贅沢特権生活を支持して、一般多数民衆に『せまき心』をひきおこさしむべき行為をなすものがあり、それが、議会代議制度又は財閥党派政治とながつて、ますます人心を險惡にみちびかうとするのである。

これ、『世の中の人の司つかさとなる人の身のおこなひよただしからなむ』とをしへざとさせ給ふ所以である、としぬばしめらるるのである。『臣ノ道亦於こゝレ焉か』とは、思想悪化を意味するのである。又聖徳太子十七条憲法に、『十五ニ曰い背そむレ私わたくし向むかフ公おほやけ是臣之道ナリ矣。凡おほ人有レ私わたくし必かならず有レ恨うらみ有レ憾うらみ必かならず非ず同ごぜ。非ざレ同ご則すなはチ以て私わたくし妨た之道みち矣。公おほやけ憾うらみ起こレ則すなはチ違たがヒ制さ害がいスレ法かヲ。故ゆゑニ初章いニ云い上下和諧かセリト。其それ亦是情な歟か。』とあるのは、民をして怨恨をいだかしむればつひに不軌をはかるものあるに至らしめらるるからである。

○ 故に『いつくしみ』は、政治原理であり、『民安かれ』との大御心、『民と共にたのしむにます^{たのしみ}楽^{たのしみ}はあらし』との大御心、空飛ぶ鳥のむれにも、なく蟲の音^ねにも、またちる紅葉にも、生あるものの思ひとうつろふ自然のはかなさとをしぬばせ給ふ仁慈の大御心を、全国民ことに、『人の司^{つかさ}となる人』は、つねにあふぎまつるべきである。

これまことに、『神ながらなる道』であり、『神代のたねの残りたる』ところの『えらびえらび』たる『よきたね』である。これはまた、『いそのかみふるきてぶり』であり、『かみつ代の国のすがた』であり、『昔の御代のあと』である。

○ 共産主義ロシヤに於いては、日本人の不法拘禁せられ消息不明となつたものもあつて、入露新聞記者・大庭柯公氏の運命の如きは、その一例であつた。これら峻刻^{りようげやく}凌虐^{りようげやく}の思想及び政治は、相互因果関係をなすものである。故に、詭激暴逆思想を発生跋扈せしめざらむがためには、国家刑罰権の適用にあつては、至誠公正の態度を以て寛厳よろしきを得しむべきである。

泉二新熊氏著『日本刑法論総論』に、『本邦刑法沿革』を説いて、『沿革ノ第三期ハ幕府為政時代ナリ。抑々大宝律令編纂実施ノ後數百年ヲ経テ兵馬ノ実権武門ニ移ルヤ、司法権モ亦、大部分ハ幕府ニ委任セラレ、茲ニ脅嚇的刑罰時代ヲ生ズルニ至レリ。』といひ、また『沿革ノ第四期ハ、歐洲刑法継受時代ナリ。徳川政府既ニ倒レ、明治維新ニ際シテハ、暫時幕府ノ旧ニ依リテ其刑律ヲ用ヒタルガ、明治元年（一八六八）四月先ヅ仮刑律ヲ編纂シ、其後専ラ寛仁ノ聖旨（註）ヲ体シ、刑政改革ノ歩ヲ進メ……』といひ、その『註』に『二年（一八六九）九月二日、集議院ニ対スル御下問ニ云ク、我大八洲ノ国体ヲ創立スル、遼古ハ措テ不レ論、神武以降二千年、寛恕ノ政以テ下ヲ率キ、忠厚ノ俗以テ上ヲ奉ズ。大宝ニ及ンデ、唐令ニ折衷スト雖モ、其律ヲ施スニ至テハ、常ニ定律ヨリ寛ニス、其間、政ノ汚隆、時ノ治乱ナキニ非ザルモ、大率光被ノ徳、外藩ニ及ブ。保元以降、乾綱、紐ヲ解キ、武士、権ヲ専ラニシ、法律以テ政ヲ為シ、刀鋸以テ下ヲ率キ、寛恕忠厚ノ風、遂ニ地ヲ掃フ。今ヤ大政更始、宜シク古ヲ稽ヘ今ヲ明カニシ、寛恕ノ政ニ從テ忠厚ノ俗ニ復シ、万民所ヲ得テ国威始メテ振フ可シ。頃者刑部新律ヲ撰定スル時、仍テ茲旨ヲ体シ、凡八虐・故殺・強盜・放火等ノ外、異常、法ヲ犯スニ非ザルヨリハ、大抵寛恕以テ流以下ノ罰ニ処セシメントス。抑々刑ハ無刑ヲ期スルニ在リ、宜シク商議シテ以テ上聞セヨト、以テ寛仁ノ聖旨ヲ窺知スルニ、余アリ。三年（一八七〇）正月、財産籍没ノ法ヲ廢シ、七年（一八七四）二月、酌量減輕ノ法ヲ定メ、十二年（一八七九）一月、梟首刑ヲ廢シ、同年十二月、拷問ニ関スル諸法令ヲ廢ス。』といつてをる。

○
マルクス主義としての共産主義革命思想は、決して新思想でもなく、科学的理論でもなく、野蛮残虐思想であり、暴を以て暴に易かふるものであつて、横暴擅断政治せんだんの反動に外ならぬのである。故に国民思想の善導は、外よりの危険思想宣伝を防止するとともに、内に、国家権力呪詛思想を激発せしむべき暴政を行はしめざることを要するのである。

二十五 不正行為の心理分析

塵

○

つもりなば払かたふ方かたなくなりぬべし塵ばかりなる事とおもへど(明治三十七年)

道

ひらくれば開くるままに思ふかなあらぬ道にや人のいらむと(明治三十七年)

薬

心ある人のいさめのことは病やまひなき身の薬くすりなりけり(明治三十七年)

折にふれて

身をまもる道はひとすぢ位山くらひやまたかきいやしきしなはあれども(明治三十七年)

家富みてあかぬことなき身なりとも人のつとめにおこたるなゆめ(同)

草

うとましと思ふ葎むぐらはひろごりて植ゑてし草の根はたえにけり(明治三十八年)

学生

世の中の風にこころをさわがすなまなびの窓にこもるわらはべ(明治三十八年)

心

すなほなるをさな心をいつとなく忘れはつるが惜しくもあるかな(明治三十八年)

しのびてもあるべき時にともすればあやまつものは心なりけり(同)

をりにふれて

いさみたつ人の心の若駒よあやふき道にすすまざらなむ(明治三十八年)

手綱たづなにもまかせぬものは勇みたつ人の心のあらごまにして(同)

世に広くしらるるままに人みなのおのが身にして(同)

忘草

たねなくて茂りもゆくか世の中の人のこころのものわすれぐさ(明治三十九年)

玉

いささかのきずなき玉もとすればちりに光を失ひにけり(明治三十九年)

道

おのが身を修むる道は学ばなむしづがなりはひ暇いとまなくとも(明治四十年)

ゆるされてまなびの窓をいづる子よ思はぬ道にふみな迷ひそ(同)

鳥

大空につばさをのべてとぶ鳥もねぐらに迷ふときはありけり(明治四十年)

行

やすくしてなし得がたきは世の中の人のひとたるおこなひにして(明治四十年)

をりにふれて

おもふこと思ふがままになれりとも身を慎つつしまむことな忘れそ(明治四十年)

塵

とすればうきたちやすき世の人の心の塵ちりをいかでしづめむ(明治四十一年)

心

すなほなる人のこころにくれたけのまがれる癖くせはいつかつくらむ(明治四十一年)
村雲むらぐもにあらぬものから世の中の風にうきたつひと心かな(同)

をりにふれて

わが心われとをりをりかへりみよしらずしらずも迷ふことあり(明治四十一年)

雲

あつまると見れば離るる大ぞらの雲にも似たるひと心かな(明治四十二年)

巖上松

あらし吹く世にも動くな人ごころいはほに根ざす松のごとくに(明治四十二年)

鳥

大空を心のままにとぶ鳥もやどるねぐらは忘れざるらむ(明治四十二年)

子

いつはりの世をまだしらぬ幼子をさなごが心や清きかぎりなるらむ(明治四十二年)

心

ともすれば思はぬ方かたにうつるかなこころすべきは心なりけり(明治四十二年)

道

ともすればさまたげられて一筋ひとすぢにゆかれぬものは道にぞありける(明治四十五年)

国

まつりごとよこしまならぬ国にこそさかしき人も多くいでけれ(明治四十五年)

○

何事件といはれ、政治的不正の摘発せらるるのは、多数の不正行為の一部分である。

選挙に投票売買の行はるるは、政治生活を浪費生活たらしむるのであるが、政治生活の腐敗は、国民道德の墮落と相互因果關係をなすのである。

『まつりごとよこしまならぬ国にこそさかしき人も多くいでけれ』の大御歌は、『まつりごとただしき国といはれなむものつかさよちから尽して』の大御歌とともに、政治の公正に行はるべきををしへさとさせ給ひしもの、とあふぎまつるのである。人心の誘惑せられ、『しらずしらずも迷ふこと』あるのは、『ともすればうきたちやすく』、『ともすれば思はぬ方にうつり』また、『ともすればさまたげられ』て、ややもすれば『思はぬ道』にふみ迷ふのである。これ、さらでだに勇みたつ人の心のあら駒の世の中の風

にうきたち、つひには鳥のかへるべきねぐら、松の根ざすべきいはほともいふべき基脚と根柢とを失ひて、さだめなくあつまり離るる雲のごとく、人情輕薄となり、人の人たる行ひをもなし得ざるにいたるのである。

○

身をつつしみかへりみるとは、人生のいたりどどまるところを忘れぬことである。これ、人の心の郷土、祖国無窮の生命を憶念することである。忠義の原理をわすれて、官能と理智との世界に風塵の如く浮動し、輕忽にもとづく罪惡も之を集積するに至れば、惡は増長しやすく、うとましき^{むげう}律のごとくひろがりて、つひにそを払はむすべもなく、日本精神の光をも失ひ、綱紀紊乱・国勢衰頽の禍根ともなるのである。故に、忠義原理をわすれたる生活者は、意欲の弾機を掣肘し、誘惑の陥穽を警戒する威力を失ふに至るのである。不正行為の責むべきは、その行為の結果よりも、むしろその動因としての不忠と無信とである。また、思ふこと思ふがままに成りて世にひろく知られ、家富みてあかぬことなきものは、ことにこの忠義原理をわすれざらむとすべきである。重責を負ふ当路の大官と国家的顯榮の地位にあるものと、また、一般官吏及び公職にあるものは、

忠義を行動の原理として反省の基準たらしむべく、また心ある人の一般の批評と直接の進言とは、病なき身の薬として心をひなし虚うして之を傾聴せむとすべきである。

二十六 道徳的法則——個人修養と安心立命

○

一般国民生活に関する総合的原理に対して、ここには、個人生活の用意と行為とに対する諸法則についての教訓を、大御歌にあふぎまつらむとするのである。しかしながら、一般的原理と個別的法則とは劃然と区別し得べきものでなく、ただ研究の見地の差異を言ふにとどまるのである。

道

遠くとも人のゆくべき道ゆかば危き事はあらじとぞ思ふ(明治三十七年)

折にふれて

いちはやく進まむよりも怠るなまなびの道にたてるわらはべ(明治三十七年)

誠

とき遅きたがひはあれどつらぬかぬことなきものは誠なりけり(明治三十八年)

道

近きよりゆかむとしてはなかなか遠くぞまよふ世の中のみち(明治三十九年)

心

世の人にまさる力はあらずとも心にはづることなからなむ(明治三十九年)

をりにふれて

むらぎもの心たゆまず進みなばさがしき山も越えざらめやは(明治三十九年)

寄道述懐

よこさまにおもひないりそ世の中にすすまむ道ははかどらずとも(明治四十年)

道

ならび行く人にはよしやおくるともただしき道をふみなたがへそ(明治四十三年)

をりにふれて

むらぎもの心のかぎりつくしてむわが思ふことなりもならずも(明治四十四年)

道

すすむにはよし早くともあやふしと思ふ道には入らずもあらなむ(明治四十五年)

これらの大御歌は、すべて成功をいそぐべきにあらざることや、いましめ給ひ、立身出世の人為的階次と、所有資財の数量的多寡とに執着せずして、正しき道をまごころのままにたゆまず進むことに、内心の解脱を求むべきを、をしへ給ふとあふがしめらるるのである。外部の形式と数量とに、行為の標準を求むれば、人間生活をそれに適応せしめようとする不自然の、またそれ故に無道理の、計略がめぐらさるるに至るのであつて、それは、『よこさまにおもひいる』ことであり、『あやふしと思ふ道』に入らうとすることであり、投機、射倖心からして無職業的浮浪生活また犯罪行為をみちびくに至るべきである。またそのために、正義と人情とにもとるさまさまの背徳行為のうみいださるることは、いふまでもないことである。

○

しかしながら、誠の道をふみ行かむと志すものも、思ふにまかせぬわが心とさだめなき世のさまとに思ひわづらはさるる時は、煩悶の愚癡ぐちにほださるるのである。ここに、

道德律を無視するのではなく、それを撰取するところの博大綜合のまた無限開展の、宗教的心境が啓示せらるるのである。

をりにふれて

ものごとにうつればかはる世の中を心せばくはおもはざらなむ(明治四十一年)

天

あさみどり澄みわたりたる大空の広きをおのが心ともがな(明治三十七年)

久方のあまつ空にも浮雲のまよはぬ日こそすくなかりけれ(同)

天つ空すらも、浮雲のまよはぬ日はすくないのであるから、ものごとにうつればかはる人の世に、さやりのたえざるは、さけがたきさだめであると心得、大空のごときひろき心をもつべしとこそ、をしへさせ給ふのである。

日

さしのぼる朝日のごとくさわやかにたまほしきは心なりけり(明治四十二年)

述懐

ひろき世にたつべき人は数ならぬことに心をくだかざらなむ(明治四十二年)

柱

かりそめの事に心をうごかすな家の柱とたてらるる身は(明治四十五年)

心

いかならむことある時もうつせみの人の心よゆたかならなむ(明治四十五年)

をりにふれて

あやまたむこともこそあれ世の中はあまりにものを思ひすぐさば(明治四十五年)

これらの大御歌ををろがみよみまつれば、かぎりなきゆるやかなの世界にいこはしめらるるとともに、おごそかなるいましめをただかしめらるるのである。

○

安心を得れば、あせり・はやり・うきたつ心もしづめられて、心身の均衡も保たるるのである。

心静延寿

しづかなる心のおくにこえぬべき千年ちとせの山はありとこそきけ(明治三十九年)

身

心からそこなふことのなくもがな親のかたみと思ふべき身を(明治四十五年)

○

この『しづかなる心』またさわやかにひろく、かりそめのことにうごかぬ心のもとづくところは、しきしまのやまとだましひ、しきしまのみち、ちはやぶる神のをしへであつて、すでにそれらについてはのべたのである。故にここには、このみちにつかふる儀礼についての大御歌を、をろがみよみまつらうとするのである。

神 祇

かみかぜの伊勢の宮居みやゐを拝みての後こそきかめ朝まつりごと(明治三十九年)
をりにふれて

みちのべにわれを迎ふるくにたみのただしきすがた見るぞうれしき(明治三十九年)

朝

世を守る神のみたまをあふぐかな朝ぎよめせし殿にいでつつ(明治四十一年)

大みゆきををろがみまつる国民の『ただしきすがた』をめでましましたる大御心をか
しこしとあふぎまつるは、これぞ、まことに現代宗教儀礼である。このとき全国民のこ

ころは、『世を守る神』のこころに通ふのである。

国民のために『世を守る神のみたま』をあふがせ給ふ大御心には、全國民の心をさめさせ給ふのである。神の御代よりひとすぢにうけつがせ給ふ天津日嗣あまつひつぎしろしめす天皇につかへまつることは、今の世に、わが日本國民にのみあたへられたる現しき靈ををろがむところの宗教である。

われら日本國民にとつては、『安心』は工夫により、冥想により、また訓練によりのみ求めらるべくもないのである。それは、日本國民の世界文化のために負へる使命を自覚することより生るるところの確信にもとづき、義勇奉公の意志にみちびかるところの、宗教的無窮生命感にこそ求むべきである。

二十七 道德的法則——個人反省と国民教育

○

道

おのが身を修むる道は学ばなむしづがなりはひ暇いとまなくとも(明治四十年)

机

よりそはむひまはなくとも文机ふづくえのうへには塵ちりをすゑずもあらなむ(明治四十年)

心

すなほなる人のこころにくれたけのまがれる癖はいつかつくらむ(明治四十一年)
村雲むらくもにあらぬものから世の中の風にうきたつひと心かな(明治四十一年)

をりにふれて

わが心われとをりをりかへりみよしらずしらずも迷ふことあり(明治四十一年)

雲

あつまると見れば離るる大ぞらの雲にも似たるひと心かな(明治四十二年)

巖上松

あらし吹く世にも動くな人ごころいはほに根ざす松のごとくに(明治四十二年)

鳥

大空を心のままにとぶ鳥もやどるねぐらは忘れざるらむ(明治四十二年)

心

ことなしとゆるぶ心はなかなかあたに仇あるよりもあやふかりけり(明治四十二年)

ともすれば思はぬ方にうつるかなこころすべきは心なりけり(同)

をりにふれて

天あめをうらみ人をとがむることもあらしわがあやまちを思ひかへさば(明治四十二年)

いたづらに時を移してことしあればあわただしくもたちさわぐかな(同)

述懐

おのが身はかへりみずしてともすれば人のうへのみいふ世なりけり(明治四十三年)

をりにふれて

ものごとに進まずとのみ思ふかな身のおこたりはかへりみずして(明治四十三年)

おもふこと思ひ定めて後にこそ人にはかくといふべかりけれ(同)

○

身を修めようとする心がけは、『不断』になさるべきであり、『よりそはむひまはなくとも文机ふつくえのうへには塵ちりをすゑず』あらしめて、文机によりそはむ志をばわすれざれ、とこそをしへさせ給ふとあふぎまつるのである。人の心は、世の中の風にうきたち、世に事なしと思ひてゆるびゆき、思はぬ方にうつりゆくものである。されば、われとわが心をかへりみ、わがあやまちを思ひかへし、平生へいぜいの用意をおこたらざらむと心がくべきである。

大空を心のままにとぶ鳥すらも、かへるべきねぐらは忘れぬのであるからして、『世の風』にうごかさねやうに人の心の、そこにもとづくところの根ばりをかたむべきである。世の風はあらしと吹きすさぶとも、いはほに根ざす松のごとくに動かずあれ、と

をしへさせ給ふのである。

○
しかしながら個人の自己反省は、箇々の道徳方法であつて、それはそのまま綜合的原理ではないのである。それは、ことに平和なる生活に於いて重んぜらるべき方法である。されば、あまりに自己反省の瞑想にとちこもるときは、却つて正しきみちをふみあやまるのである。

をりにふれて

あやまたむこともこそあれ世の中はあまりにものを思ひすぐさば(明治四十五年)

これもまたことに、国民生活の雄大悲痛なる綜合意志をすべをさめ給ふところの、即ち御国みくにをしらす大御心おほみごころは、反省静観のうちにとどまりとどこほらせ給ふべくもあらぬ故にこそ、かくは大御歌おほみうたよませ給ひしとあふぎまつるのである。

ここに、個人反省の修養と国民教育の活動とが関聯せしめらるるのである。

師

わけのぼる道のしをりとなる松は位なくてもうやまはれけり(明治四十年)

学校

まなびやに入りにし日よりうなぬ子がものいひさへもかはりけるかな(明治四十一年)

師

学びえて道のはかせとなる人もをしへのおやの恵めぐみわするな(明治四十一年)

手習

幼子せまたごがものかく跡をみてもしれ習へばならふしるしある世を(明治四十二年)

寄草述懐

野末のすえまで種をまかなむ教をしへ草ぐさいまだしげらぬ方もこそあれ(明治四十二年)

工

外国とくににおとらぬものを造るまでたくみの業わざにはげめもろ人(明治四十三年)

教育

わがしれる野にも山にもしげらせよ神ながらなる道をしへぐさ(明治四十三年)

をりにふれて

空蟬うつせみの世のことわざはしげくとも物学ぶつがくぶまのなかるべしやは(明治四十三年)

敷島のやまとしまねのをしへぐさ神代のたねの残るなりけり(同)

教育

よきたねをえらびえらびて教草うゑひろめなむのにもやまにも(明治四十五年)



教育の本領は精神的修養であつて、人としてまた國民としての修養をなすことである。職業に対する能力と熟練とは、その副産物たらしむべきである。財産職業また地位の差別は、人としてまた國民としての道徳的平等の前に没せしめらるべきである。これ教育者は、『位くらゐなくともうやまはれ』また『をしへのおやの恵めぐみ』の忘るべからざる理由である。

人の心の、思はぬかたにまよはしめらるる『世の中の風』とは、財産職業また地位等の名利に関し、また、官能的逸楽を追ふところの外的・部分的また物質的誘惑のことである。教育の原理は、『神代のたねの残り』たる『神ながらの道』であつて、この永久生命と全体精神とのうちに、個人生活を没入せしめて、ここに『習へばならふし』をあらはさしむべきである。

そのためには、『よきたねをえらびえらびて』、また『野にも山にも』ひろくあまねく教育を行はしむべきである。即ち、思想批判としての輿論指導を、教育の根柢となすべきである。萌え出づる生命のたねとは、『神ながらの道』であり、『神代のたね』である。『外国とくににおとらぬものを造るまでたくみの業わざにはげむ』ためには、外国の新知識をとり入るべきであるが、それをすべをさむべきは、伝統的精神の不可思議開展の威力であり、それを、国民として自覚することである。科学の発達によつて宗教がなくなるべきものではないのであつて、教育は知識をさづくることのみ偏すべきではなく、その知識によつて真偽を批判するために、知識を総撰するところの人生観をさだめしめようとするべきである。このさだめられたる人生観即ち信念に基いて、それが偽であると知りたるものを論理的に分析批判することが、精神科学の任務であり、その精神科学的作業を社会組織化したものが、真の教育である。故に、真の教育によつて獲得せらるべきは、人生観上の確信であり、日本人にとつてはやまとだましひである。それは、それぞれの現世の繫縛に随順して、各人の義務を遂行しつつ、内心に解脱の自由平等感を得ることである。それは内的平等感であり、内心の要求に於いて、全國民が一致した平等であるこ

とである。故に、『教育』によつて始めて、『自由平等』の精神生活が実現せられ、それに基いて、不断の継続的改革が全国民生活の各方面に行はるべきである。

二十八世

○

をりにふれて

ものごとにうつればかはる世の中を心せばくはおもはざらなむ(明治四十一年)

巖上松

あらし吹く世にも動くな人ごころいはほに根ざす松のごとくに(明治四十二年)

述懐

ひろき世にたつべき人は数ならぬことに心をくだかざらなむ(明治四十二年)
かたしとて思ひたゆまばなにごともなることあらじ人のよの中(同)

寄書述懐

すすみゆく世におくれなばかひあらじ文の林はわけつくすとも(明治四十二年)

述懐多

ひらくれば開くるままにいにしへにかはるおもひもある世なりけり(明治四十二年)

子

いつはりの世をまだしらぬ幼子をさなごが心や清きかぎりなるらむ(明治四十二年)

誠

鬼神おにがみもなかくするものは世の中の人のこころのまことなりけり(明治四十二年)

詞

ききしるはいつの世ならむ敷島のやまと詞ことばの高きしらべを(明治四十三年)

玉

人みなのをらびしうへにえらびたる玉にもきずのある世なりけり(明治四十三年)

鏡

世の中の人のかがみとなる人のおほくいだなむわが日の本に(明治四十三年)

述懐

おのが身はかへりみずしてともすれば人のうへのみいふ世なりけり(明治四十三年)

心

ひろき世にまじはりながらともすれば狭くなりゆく人ごころかな(明治四十三年)

をりにふれて

さまざまの世のたのしみも言ことのはの道のうへにはたつものぞなき(明治四十三年)

国

世はいかに開けゆくともいにしへの国のおきてはたがへざらなむ(明治四十四年)

神 祇

いつはらぬ神のころをうつせみの世の人みなにうつしてしがな(明治四十四年)

をりにふれて

教をしへぐさ草しげりゆく世にたれしかもあらぬ心の種をまきけむ(明治四十四年)

道

人の世のただしき道をひらかなむ虎のすむてふのべのはてまで(明治四十五年)

をりにふれて

敷島のやまと心をみがけ人いま世の中に事はなくとも(明治四十五年)

おのづからわが心さへやすからず隣のくにのさわがしき世は(同)

思はざることのおこりて世の中は心のやすむ時なかりけり(同)

国民の業にいそしむ世の中を見るにまされる楽はなし(同)

あやまたむこともこそあれ世の中はあまりにもを思ひすぐさば(同)

なすことのなくて終らば世に長きよはひをたもつかひやなからむ(同)



ドイツに於いて世界大戦につづいて一九一八年のメロドラマ・革命・ベルサイユ屈辱媾和条約等の苦艱経験は、認識論万能の哲学と訓詁考証文献学との迂緩に堪へられず、ここに、人生観の哲学と価値批判の文学研究とが起つたのであるが、この人生観といふ『人生』とは、『世』また『世の中』のことであり、また『世』といふことばには、『世のうつりゆく次第』(愚管抄巻七)の意味がふくまるるのである。個人の生死を基準として、生るる前を過去、死したる後を未来といひ、生死の間を現在といひ、此の現世を無常と観じ、また『うき世』とよぶは、仏教思想の感化によるものであるが、现实生活随

順の日本精神は、仏教の厭世的人生観又は各種の虚無思想によつて支配克服せらるることなくして、やまとだましひをまもりつたへたのである。

此の現実精神が『世』をよませ給へる大御歌のうちに表現せられて、この世に生きゆくべきみちをしめさせ給ひ、まよひなやむよわき心に勇氣をあたへさせ給ふのである。

『世と申と人と申とは二の物にてはなき也。世とは人を申也。その人にとりて世といはるる方は、をほやけ道理とて、国の政事にかかりて善悪をさだむるを世とは申也。人と申は、世の政にもぞまず、すべて一切の諸人の家の内までをおだしくあはれむ方の政事を又人とは申也。其人の中に、国王より初めて、あやしの民まで侍ぞかし。それぞれ国王には、国王ふるまひよくせん人のよかるべきに、日本国のならひは、国王種姓の人ならぬすぢを国王にはすまじ、と神の代より定めたる国也。』（愚管抄巻七）

日本国民は、この『世』と『人』とを 天皇の大御身に、すべをさめ給へるを現しくあふぎまつり、また、かしこくも大御歌に大御言をさながらにいたたくのである。

世と人と、団体・社会・国家生活と個体・思想・芸術生活との融合せしめらるる時に、しきしまのみちは生り出づるのである。

明治の大御代おほのみよに至り、はじめて神の御代みよよりうけつげる『しきしまのみち』の世界的宣布が実現せられたのであり、その經典は『明治天皇御集』である。

此の日本精神としての現実主義研究に就いては、『原理日本』昭和二年（一九二七）三月号・松田福松氏『イギリス人の現実主義』は最も適切な参考資料である。大正十五年（一九二六）の英国の炭坑罷業ひきようから総罷業へと進展した危機に於いて、それが共產主義的革命に至らずして、英国人の「常識の勝利」となつたのである。松田氏の十二頁に互る論文は、『然らば炭坑夫罷業の危機に當つてイギリス人の常識は如何なる姿を顯現したであらうか。イギリス人の常識の強さと深さと鋭さとを検すべき絶好の一機会である。表面に現はれし政府その他の運動事情は、既に新聞によつて略報せられたところである。ここにはそれらの運動、殊に保守党政府をして「常識の勝利」を叫ばしめし国民精神の緊張を指導せし思想力の核心を、その文献について分析しようとするものである』といひ、憂国の志士二人の論文を紹介してをる。それは、共產主義に対する現実感覚と人生常識とに基く誤謬指摘であり、『時務を知る俊傑』の国民への警告、といふべき論文の批評である。

今世界の国民生活の上には、思想的危険が刻々に肉薄しつつある。昭和二年（一九二七）四月二十八日の東京日々新聞は、『北京露大使館で押収した秘密文書』の写真を掲げ、『ここに掲載せる写真は、当時消防隊によつて危く消し止められた赤化陰謀に関する重要書類の一端であるが、その内には実に左の如き文字がつけられてある。一、張作霖は某々帝國主義国家と通謀せるわれ等の敵

であるから、その軍隊の占領せる地域内に、排外の混乱を起すべし。一、支那群衆をして直接行動を起さしめ、しかして列国の干渉を誘導せしむべし。これがためには、掠奪惨殺その他の過激的行動もまた可なり……以下略」と。四月六日、北京露国大使館附屬武官室その他大捜査の結果押収したる赤化陰謀重要書類の一部を翻譯報道してをる。焼残りの痕跡をとどむる該文書には、『極要文件』といふ漢字が書きつけられてある。

現日本に於ける農村赤化の実状を詳細に報道してをるのは、昭和二年四月十四日発行、山梨日々新聞の約百五十行に亙る記事であつて、それは『働かざるものは食ふべからず』常永(村)は小作人の天下、村政も農政も小作人の手に移り、其生活は組織的に改善される、みじめなのは地主」と題するものである。一九一八年制定のロシア社会主義聯邦共和国憲法第十八条に、同共和国の標語として宣布せられたりしたところの、『働かざるものは食ふべからず』は、日本地方自治体の小作組合・村会・農会を指導する原理として標示せられ、所謂『無産階級の独裁』が実現せられ、地主の土地所有権は實際に於いては、数字的正確計算の下に無償没収せられたると全く同様に強制廢除せられつつあり、と報ぜらるるのである。この標語は、新約全書・テサロニケ後書・第三章第十節に『われら爾曹なんぢらの中に在りしとき、人もし工わざを作なすことを欲このまずば食すべからずと爾曹なんぢらに命じたり』とあるとは全く異りたる意味にて、ここに『働かざるもの』とは、単に遊手徒食の怠惰者を意味するに非ずして、それは、雇傭労働者を使用するもの、資本利子財産収入により生活するもの、所謂有産階級を指すものにして、同憲法第六十五条に於いて、これに選挙権被選挙権を与へず、と規定

したるところの共産主義の見地を示すものである。

昭和二年の銀行休業、支払猶予令、日本銀行損失補償法案等に示されたる国民経済生活の動揺も、『不安』が現日本国民生活に襲ひ来りつつあることを示す徴候の一つである。此時にあたり、『世』をよませ給へる大御歌を拜誦しまつれば、『世』に処するには、心をひろく・つよく・きよくたもち、いつはらぬ神のこころを人の心にうつして、おのおのの業にいそしみ、『あらし吹く世にも動くな人心』の大御言をあふぐべきを、をしへしめらるるのである。

二十九 道

○ 『世』をよませ給へる大御歌とともに、『道』をよませ給へる大御歌の多きことは、誰しも気づかしめらるべきである。

『道』はゆくべきところであるからして、それはただちに『人生法則』を意味するにいたるのである。それが故にそれは心理法則、道徳法則を意味するのである。また『こののはのみち』即ち思想法則としての『しきしまのみち』は、現実的日本精神の芸術的表現である。

○

おぼろ夜の月の夜みちのくらければ車の影もうつらざりけり(明治四十年)

行路松

うまやちの並木の松のかけみれば昔の旅のしのばるるかな(明治四十年)

車中見花

をぐるまのすぐるまにまに花をみて今日行く道は遠しと思はず(明治四十一年)

野径露

乗る駒のあぶみまでこそぬれにけれあさ露ふかき野路のかや原(明治四十一年)

馬上紅葉

むちうたば紅葉の枝にふれぬべし駒をひかへむ岡ごえの道(明治四十一年)

雪中行人

老人があゆみゆくこそ哀なれいまだ払はぬ雪のなかみち(明治四十一年)

躑 情

まうでむとおもふ社やしろをよそに見てすぐる旅路のをしくもあるかな(明治四十一年)

山路杉

家すこしあるかと見れば山道はまた杉村になりけるかな(明治四十一年)

観艦式のをりに

はるばると見わたす沖の波路までつらなりけりなわがいくさ船(明治四十一年)

これらは具体的のみちにつきてよませ給へる大御歌であるが、月の夜みち、駅路、今日行く道、野路、岡ごえの道、雪の中みち、旅路、山道、波路とよませ給へるにも、なほ人の世のみちをしぬばしめらるるは、まことにことばにいひあらはしがたき大御稜威とあふがしめらるるのである。

○

道

いとまあらばふみわけて見よ千早ぶる神代ながらの敷島の道(明治四十年)

絶えたりとおもふ道にもいつしかとしをりする人あらはれにけり(同)

おのが身を修むる道は学ばなむしづがなりはひ暇なくとも(同)

なかばにてやすらふことのなくもがな学の道のわけがたしとて(同)

ゆるされてまなびの窓をいづる子よ思はぬ道にふみな迷ひそ(同)

書

いにしへの文ふみの林をわけてこそあらたなるよの道もしらるれ(明治四十年)

歌

天地あめつちもうごかすといふことのはのまことの道は誰かしるらむ(明治四十年)

ことのはのまことのみちを月花つきはなのもてあそびとは思はざらなむ(同)

手習

おのが名もかくべくなりぬうなる子が手習ふ道に入るとみしまに(明治四十年)

寄道述懐

よこさまにおもひないりそ世の中にすすまむ道ははかどらずとも(明治四十年)

子

たらちねのおやの教おしへをまもる子はまなびの道もまどはざるらむ(明治四十年)

隠士

山深くかくるる人をむかへても世を治むべき道をとばばや(明治四十年)

師

わけのぼる道のしをりとなる松は位くらゐなくてももうやまはれけり(明治四十年)

心

国のため身のほどほどに尽さなむ心のすすむ道を学びて(明治四十年)

寄道祝

しるべする人を嬉しく見いでけりわがことのはの道のゆくてに(明治四十年)

国民くにたみのわくるちからのあらはれて道てふみちのひらけゆくかな(同)

をりにふれて

身にうけしいたでもいえてつはものの世わたる道にいまはたつらむ(明治四十年)

敷島の道、おのが身を修むる道、学まなびの道、思はぬ道、新たなる世の道、ことのはのま

ことの道、手習ふ道、世の中にすすまむ道、世を治むべき道、わけのぼる道、心のすす

む道、道てふ道、世わたる道、をよませ給へる大御歌をあふぎまつることのかしこさよ。

天皇の大御歌とは、かくのごときものなるべし、とこそあふがしめらるるのである。

○

教育

国のため力つくさむわらはべを教ふる道にこころたゆむな(明治四十一年)

師

学びえて道のはかせとなる人もをしへのおやの恵めぐみわするな(明治四十一年)

寄道祝

葦原のみづほの国の万代よろづよもみだれぬ道は神ぞひらきし(明治四十一年)

教育

ただしくも生ひしげらせよ教をしへ草をとこをみなの道を別わかちて(明治四十二年)

遊戯

世わたりの道のつとめに怠るな心にかなふあそびありとも(明治四十二年)

道

いとまなき身も朝夕にいそしみぬ思ひいらる道の為には(明治四十三年)

国民がこころごころに進みゆく道にはさはるものなくもがな(同)

ならば行く人にはよしやおくるともただしき道をふみなたがへそ(同)

教育

わがしれる野にも山にもしげらせよ神ながらなる道をしへぐさ(明治四十三年)

をりにふれて

ひと筋をふみて思へばちはやぶる神代の道もとほからぬかな(明治四十三年)

道

すすむにはよし早くともあやふしと思ふ道には入らずもあらなむ(明治四十五年)

ともすればさまたげられて一筋にゆかれぬものは道にぞありける(同)

人の世のただしき道をひらかなむ虎のすむてふのべのはてまで(同)

孝

いとまなき世にはたつともたらちねの親につかふる道な忘れそ(明治四十五年)

をりにふれて

開くべき道はひらきてかみつ代の国のすがたを忘れざらなむ(明治四十五年)

わらはべを教ふる道、道のはかせ、万代よろづよもみだれぬ道、をとこをみなのだ、世わたり

の道、思ひいりたる道、こころごころに進みゆく道、ただしき道、道をしへ草、神代の

道、あやふしと思ふ道、人の世のただしき道、たらちねの親につかふる道、開くべき道

——国民教育、専門学科、万古不変の国体、男女の区別、職業、趣味信仰、専攻學術、
処世方法、国民道徳、神道、人道、孝道、文化開展等につき、しきしまのみちにより国
民にをしへさせ給ふ大御稜威おほみいつをあふぎまつるのである。

三十 無疲倦不断防護戰鬥意志の源泉 —その一—

○

寒松

こがらしの風にすまひてひとつ松いくらの冬をしのぎきぬらむ(明治四十年)

磯松

波風をしのぎしのぎで荒磯の松はちとせの根をかためけむ(明治四十年)

筏

ひとりして早瀬をくだす筏いかだにはかへりて波もかからざりけり(明治四十年)

○

述懐

千万の民の力をあつめなばいかなる業も成らむとぞ思ふ(明治四十一年)

協力は、人間社会生活の道徳原理であるが、此の協力を實現すべく民衆を指導するものは、孤独の悲哀を痛感して奮闘せねばならぬのである。多数の人々に鑑賞せらるる芸術が、创作者の悲壯なる孤聳生活から生るるのも此の故である。鋭敏なる予感と誠実なる情意とを有する人格の精神生活のうちに、超個人的永久生命の流れ入り溢れ出づる律動と波瀾とより、真の芸術が生るるのである。先『天下之憂』而憂、後『天下ノ樂』而樂』といふのは、此間の消息を道徳的見地より修辭的に誇張していつたものである。

○

桜雲閣主人(小松緑氏)著『明治史実外交秘話』に、日英同盟成立の経緯を語り、『林公使五里霧中に迷ふ』といふ項目中に、『伊藤がパリに着いた時分には、日英同盟の談判は殆んど完結に近づいてゐた。それまでの林公使の苦心は、並大抵な事ではなかつた。後年林が著者に語つた懐旧談中に、かういふのがある。——小村(当時の外相)は、苦勞人だけに、物のよくわかつた男であつた。輿論に重きを置く英国を相手に、日本に有利な条件で同盟条約を結ばうとするのであるから、新聞記者の操縦になかなか金がかかる。ところが、その時分の機密費といつたら、とてもお話にならないほどの少額。それで臨時に要求しても、外務省はケチくさくてなかなか注文通りに送つてよこさ

ない。当時十万円ばかりいるので、十五万円と吹っ掛けてやった。(内交にも一寸駆引が必要だ)すると案外にも、小村から二十万円送るからしつかりやつてくれと言つて来た。それで吾輩は思ふさま記者を御馳走して、日本の事情を説明することが出来た。ロンドンで日本の事を悪く書く新聞が無くなつたよ——』といふ一節がある。

著者は明治時代の外交実務に携はり、またその主要人物と交際した人であるから、此記事は、事実を根拠としたものであると認めらるべきである。小村外相が苦勞人であつて物のよくわかつた人であつた、といふことは、英国に於いては、新聞記者を操縦する、又は思ふさま御馳走するには、なかなか金がかかる、といふことを知つて、要求額以上の機密費を送つた、といふことによつて例証せられてをるのである。御馳走とか饗応とかいふことは、ある場合には犯罪行為であり、ある場合には宗教的儀礼である。犠牲祭式と賄賂請託と、内心解説信仰と現世利益迷信とは、たやすく一方より他方に転入すべきものであり、人間の煩惱と俗縁の羈絆とは断ちがきたものである。国民的政治教育と常識訓練とが、他国に比して模範的に進んでをる英国に於いても、新聞記者への御馳走と輿論の趨向との間には、一定の因果関係があるのである。

ここに於いて、此の不純の煩累と執拗の欲念とを厭離せむとするものによつて、脱俗隱遁の生活が憧憬せらるるのである。昭和二年(一九二七)六月三日の新聞『日本』に、慶応大学教授・加藤繁氏『隠者』の短文が発表せられた。それは、『社会が進歩するに従つて吾々の外的生活も内的生活も自然に複雑になつて来た。さうして吾々の生活の本態であるべき精神生活に於ても、外部の力

に依つて支配され、社会の奴隷のやうな状態になりつつある。吾々は、此際どうしても内的に一種の独立戦争を起さなければならぬと感じて居る。

此の意味に於いて、凡ゆる交渉を棄てて山に隠れ自己の生活を楽しんだ昔の隠者の生活も、決して無意味だとは言はれない。然し私は、別に今の若い方々に向つて、古の隠者のやうな勝手な生活をせよと言ふのではない。私自らも、様々な意味に於て社会の奴隷の境遇を彷徨うて居り、古の隠者の様な独立した精神生活を営んでもゐないが、造次顛沛の中に於いても、浮世離れのした所謂現代に超越したところの心の落ち着きが必要ではあるまいか。』といふのである。

これは、外部の力によつて支配せられ、社会の奴隷のやうな状態になるに忍びぬ内心の要求を語るものである。しかしながら、出家成道は衆生済度のためであり、休日の静養は、勤勞の用意であらねばならぬ。勞作と休養と、熟慮静観と決断活動と、それらはすべて、律動的に交代せしめらるべきである。和光同塵の生活と清厳廉白の生活とは、対象強化の作用をなさしむべきである。

政治生活の腐敗は、投票の売買に始まり瀆職的不正行為に及ぶのであるが、それが、公共心に基き公共利害のために止むを得ず不正手段をとるの余儀なきに至るものと、個我利己慾望のためにのみ公共生活組織を利用せむとするものとの間に、公正と邪曲とを峻別すべき基準を求むべきである。

俗世間の活動も山林への隠遁も、それが生命の律動にともなつて交代せしめらるるた

めには、その生活を統御する原理は、個人利己主義ではなく団体連帯主義であらねばならぬ。若し国民が、政治的関心と公共心とを失ふに至れば、これ、国家の綱紀頹廢し、社会は不安に脅威せられて、各人は絶望的享樂生活を追はむとする国家衰亡の凶兆である。故に、国法の威厳を保全し治安を維持することは、絶対に必要である。不遇にして孤独自恃の生活をいとなむものをも、彼等をして、国家政治生活に対する関心を失はざらしめむとすべきである。

○

神 祇

やすからむ世をこそいのれ天あまつ神かみくにつ社やしろに幣ぬさをたむけて(明治三十五年)

ちはやぶる神のまもりによりてこそわが葦原のくにはやすけれ(同)

千万ちよろづの神もひとつにまもるらむ青人草あをひとぐさのしげりゆく世を(同)

旅宿夢

まぢかくもたづねし民のなりはひをこよひ旅ねの夢にみしかな(明治三十六年)

寄道祝

千早ちはやぶる神のひらきし敷島の道はさかえむ万代よろづよまでに(明治三十五年)

道

千早ぶる神のひらきし道をまたひらくは人のちからなりけり(明治三十六年)

述懐

千早ぶる神のかためしわが国を民と共に守らざめや(明治三十六年)

ひとり身をかへりみるかなまつりごとたすくる人はあまたあれども(同)

寄風述懐

ひさかたの空吹く風よひとみな心のちりを払ひすてなむ(明治三十六年)

神のまもりを信じ神のまもりをいふことは、神のひらきし道、即ち神のかためしわが国の道、建国統一の精神、全国民協力の総体意志を信じ、またこれを実現することである。

建国の精神は、世を厭はむとするものの悲しき胸むねに活いきしめられ、それは世と交り世を憂ふる心となつて、国民的協力の現実的活動に向はしめらるるのである。

まぢかくもたづねましし民たみの生業なりはひを夢みさせ給ふまでに、その生活せいかつを大御心おほみこころにかけさ

せ給ふことのかしこさよ。すべては、『生』に始まり『生』に終る。蟲の音にも生きとし生けるものをあはれませ給ひ、輔弼の臣はありといへども、なほ大御身をかへりみさせ給ひ、ひとみな心の塵を払ひすてよ、とのたまはせ給ふ。かしこくも 天皇の大御位にましまして、神として国まもらせ給ひつつ、全国民にその個我執着をすて、心のちりを空ふく風にはらひすてよ、とのたまはせ給ふ。この大御心をあふぎいただきまつりつつ、『戦』の、即ち現実生活随順の原理、その礼拝の対象、即ちわれらの生をその中に見出すところの、祖国日本の永久生命を憶念して

剣

しきしまの大和心をみがかずば剣おぶともかひなからまし(明治三十七年)

あらはさむときはきにけりますらをがとぎし剣の清き光を(同)

の大御歌を拝誦しまつり、国家社会の治安と秩序とをみだしつつある共産主義思想の襲撃伝播の中心地帯に、思想教化的白兵戦を戦ひつづけむとする勇気をあたへしめらるるにいたりし著者の、心的経過をそのままここに叙述し、また大御歌を拝誦しまつるのである。

折にふれて

思ふこと貫かむ世をまつほどの月日は長きものにぞありける(明治三十七年)

すすむべき時をはかりて進まずば危き道にいりもこそすれ(同)

うつせみの世のためすすむ軍には神も力をそへざらめやは(同)

いかならむ事にあひてもたわまぬはわがしきしまの大和だましひ(同)

さわがしき風につけても外国にいでて世渡る民をこそおもへ(同)

さまざまのうきふしをへて呉竹のよにすぐれたる人とこそなれ(同)

しほどきになりにつけらしも浜どののかきね近くも波のおとする(同)

をりにふれて

いつかわが心にかかる雲はれてすすしき月のかげにむかはむ(明治三十八年)

歌

ひとりつむ言の葉草くさのなかりせばなにに心をなぐさめてまし(明治三十八年)

三十一 無疲倦不断防護戰鬪意志の源泉 —その二—

○

『明治天皇御製集』卷下より『明治天皇御集』にもれたる大御歌を引用しまつる。

孤島松

波たかき沖の小島のひとつ松いつの世にかも根ざしそめけむ

三十七年（一九〇四）の大御歌である。波高き沖の小島にひとり淋しくたつひとつ松の、波風を凌ぎ凌ぎつつ、ををしくも立てる姿を見るに、そはいつの世に根ざしそめしか、と今のさまにいにしへをしぬばせ給ふ深き思ひを、うたはせ給ひし大御歌とあふぎまつるのである。

寄道述懐

よの中にあやふきことはなかるべし人の人たる道をふみなば

三十八年（一九〇五）の大御歌である。波風たかく、さびしくかなしきこの世を渡るにも、人の人たる道、すなはち神のひらきし道、日本の習俗と道徳と国民宗教とに随順して行爲すればあやふきことなし、と確信すべしと、をしへはげましめ給ふ大御歌とこそあふぎまつるのである。

○
草

うつせみの世にたつほどは夏草のことしげくともいとはざらなむ

三十九年（一九〇六）の大御歌である。世にたちての『世に立つ』は、立身の意味ではなく、『世をのがる』の反対であつて、公民として現実生活にまじはることである。公共現実生活にたづさはる間は、世事の煩累を厭はずして責務を遂行せよ、とのたまはせ給ふは、それと同時に『世をそむく』ことなかれ、といふ意味がこもり居るのである。

隠遁生活は、日本精神と反するのである。これは、『書をのみ知りて不_レ通_二人間ノ事_一』（謫居童問）であつて、黙識心通、静坐持敬、清浄虚無を事とし、終日清談して世事をす

て、日々に知を失却し、世間を忘却し、至愚至鈍に至るは、人倫に生れて鳥獸草木になると同じである、と説いた山鹿素行が、更にそれを『治国平天下の用たらずして、自己一身の工夫』（論居童問）であるといつたのも、めざめたる日本精神の警告である。

○

天

かぎりなきあまつみそらを心にておもひのどめむ世のなかのこと

四十年（一九〇七）の大御歌である。これ、『明治天皇御集』の大御歌

天

あさみどり澄みわたりたる大空の広きをおのが心ともがな（明治三十七年）

久方ひさかたのあまつ空にも浮雲うきぐものまよはぬ日こそすくなかりけれ（同）

と同じき思想を、異なる見地よりよませ給ひし大御歌、とあふぎまつるのである。み空はかぎりなきものであるが、その天つみそらにも、浮雲のまよはぬ日はすくなく、澄みわたりたる大空のごとき稀有けうの心をこそ、したはせ給ふとあふぎまつるのである。世のわづらはしく、うれたきことの多かるを、限り無きみそらのあらゆるものをつつむが如

く、わが心をひろくたもちて、心を和めしめむ、とのたまはせ給ふのである。この大御歌を『明治天皇御製集』巻下・四十三年（一九一〇）の大御歌

折にふれて

何事も思ふがままにならざるがかへりて人の身のためにして

とともに拝誦しまつれば、外に困難が甚だしく障礙が多ければ、ますます内に人の心はひろくなり、また、しかあらしむべきを思はしめらるのである。

○

折にふれて

いかならむ事にあひてもたわまぬはわがしきしまの大和だましひ（明治三十七年）

同

さわがしき風につけても外国とくににいでて世渡る民をこそおもへ（明治三十七年）

をりにふれて

ものごとにうつればかはる世の中を心せばくはおもはざらなむ（明治四十一年）

巖上松

あらし吹く世にも動くな人ごころいはほに根ざす松のごとくに(明治四十二年)

不撓不屈の日本精神は、人生の苦患に対しても、暴風雨に身をさらすごとき快感をもつて万難を排して邁進するのである。動揺変転極まりなき世に立ちても、吹きすさぶあらしの中に、微動だもせぬ巖上の松のごとくあれよ、とのををしき大御言おほみことをあふぎまつることのかしこさよ。

おだやかならぬ世のさま、殊に平和の脅威せられ、人民の生命財産の安全に對して、十分に国家の保護の及ばぬ外国にありて世渡る民の上を思はせ給ふ大御心を、あふぎまつれば、

述懐

末つひにならざらめやは国のため民のためにとわがおもふこと(明治三十八年)

の大御歌に、『国のため民のため』とのたまはせ給ひたる大御心をも、ひたすらしぬびまつるのである。

『ものごとにうつればかはる世の中』に随順すれば、心は偏執をはなれて大空の如く広くなり、いかならむことの起り来るとも、撓たわむことなき金剛不壞ぶえの信心を得るのである。

『諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅為樂』(涅槃經)の思想は、無常生滅と常住涅槃とを対立せしめて、常住安樂・自在清淨の幻影世界を憧憬するのである。しかしながら日本精神は、すべてのものはうつりかはるのであるから、それに随順しつつも、しかも、巖に根ざす松のごとくに、吹きすさぶあらしを避くべくもなく、あらしのただ中に立ちつつ、それに随順し、またそれを攝取し、天つみ空の如きひろくすがしき心を開發せしむるのである。

教育

いかならむときにあふとも人はみな誠の道をふめとをしへよ(明治三十九年)

『いかならむときにあふとも』の大御言をくりかへし拝誦しまつれば、『人はみな誠の道をふめ』との大御言に、疑惑・恐怖の心は、すみやかに解脱せしめらるのである。いかならむ時、いかならむ事にあひても、ただ誠の道をふめよ、との大御言にしたがひまつるべし、と確信し、また、それを実現すべきである。

○

寢覚述懐

ゆくすゑはいかになるかと暁のねざめねざめに世をおもふかな(明治三十八年)

これ、御国の行末の変化を予想せさせ給ひし大御歌、とあふぎまつるのである。治まる御代の御稜威は、その民により忘れられがちである。故に、治まる御代には国民は忘恩の驕兒となり、世の乱れむとするにあたりて、始めて治まりし大御代をしぬびまつり、困難と苦痛とのうちに、再び不撓不屈の日本精神をめさめしむるのである。

をりにふれて

たひらかに世はなりぬとて敷島の大和心よ撓たぶまざらなむ(明治三十九年)

男

弓矢とる国に生まれしますらをの名をあらはさむ時はこの時(明治三十八年)

弓 矢

ゆみやもて神のをさめしわが国に生まれしをのこ心ゆるぶな(明治三十九年)

心を弛緩せしむることなきが、武士道の道徳原理である。不断の用意は、世の波風に立ち向ふことによつて、めさめしめらるのである。直接に现实生活にふれて、情意の生活と名利的世界とに面接するものにとつては、油断の間隙は生ぜぬのである。

三十二 国語読本の御製 —その一—

○

尋常小学国語読本・卷まきの十二・第一課は『明治天皇御製』であつて、左の十首を引用しまつてある。

述 懐

いにしへのふみ見るたびに思ふかなおのがをさむる国はいかにと(明治十一年以前)

天

あさみどり澄みわたりたる大空の広きをおのが心ともがな(明治三十七年)

峯

おほぞらにそびえて見ゆるたかねにも登ればのぼる道はありけり(明治三十七年)

民

ほどほどにこころをつくす国民くにたみのちからぞやがてわが力なる(明治三十七年)

日

さしのぼる朝日のごとくさわやかにもたまほしきは心なりけり(明治四十二年)

国

よきをとりあしきをすてて外国とくににおとらぬ国となすよしもがな(明治四十二年)

遠尋花

荒駒をならしがてらに野辺とほく桜狩さくらがりするますらをのとも(明治四十五年)

夏 蟲

いつかたにこころざしてか日盛ひさかりのやけたる道みちを蟻ありのゆくらむ(明治四十三年)

月前薄すすき

はるばると風のゆくへの見ゆるかなすすきが原の秋の夜の月(明治四十年)

雪埋松

海原うなばらはみどりにはれて浜松のこずゑさやかにふれる白雪(明治二十一年)

○
文部省の国語読本としては、御製を引用しまつるについて重大の不注意がある。第一に、御製の『題』をはぶき、第二に、御集原本の文字を書き改め、第三に、一首を二行に分つてをる。

一首を、第三句で二行に分つて記載し、また印刷することは、第三句に読誦上の休止をおかしめ、一首を二文に切断し、また、切断したると同様の効果をもち来さしむるにいたるおそれがある。和歌は、一首一文たるべきものである。この一首一文といふのが和歌の、また、しきしまのみちの根本的形式である。

詩は普通には、短い文と句との錯綜によつて成立するのであるが、和歌は、この反省工夫の余裕あらしめざるところに、その特色があるのである。もとより、思想は一定の概念的分枝によつて開展するのであるが、それが全体表象又は全体感情に随順し、反省分析のあとをとどめざるまでに自然化せられ、天衣無縫といひ、斧鑿の痕無しといふ如く、『すなほ』に表現せらるべきである。これ俳句は、一句二文を定則とするに反して、それより長き形式を有する和歌が一首一文を原則とする所以である。

一首一文として表現を自然に随順せしむることは、同時に、その思想法を自然に随順せしむることであり、それはやがて、精神生活または人生を、自然に随順せしむることである。それが『しきしまのみち』の『しらべ』である。それは、生命の全一律動に言語のそれをあはすことである。三十一音の和歌が、一首一文であるといふ事実的法則は、『明治天皇御集』によつて、もつとも明かに啓示せらるるのである。

しきしまのみちとしての和歌は、日本語でうたふのであるから、仮名・漢字の混用法は深き注意を要するのである。それ故、御集原本の用字法を變改することは、軽々しくなさるべきではない。たとへば、読本に於ける如く、第一首を『古いにしへのふみ見るたびに思ふかなおのが治むる国はいかにと』と用字法を變改するといふことは、小学校生徒の理解を容易ならしめようとすると同時に、漢字の用法を学ばしめ、又はこれを復習せしめようとするためであるかも知れない。しかしながらそれは、御製についてなすべきでもなく、また他の場合に於いてなし得ぬものでもないのである。

題詠の歌は、その題とともに不可分の関係にあることは、歌が作者と不可分であると同じである。作者の創作動機及び事情は、題と詞書ことばがきとによつて明かにせらるるのである。題又は詞書ことばがきと歌との関係は、文学史上重要なものである。詞書ことばがきが発達すれば、地の文となり、やがて散文の発達となるのである。題と詞書ことばがきとが消滅するか短縮せしめらるれば、連作短歌となるのである。また 天皇の大御歌であれば、『題』は殊に注意して大御心をあふがねばならぬのである。述懐、天、民、国の如きは、大御歌の『題』として、重要な意味のこもつてをることはいふまでもないことである。

○

『いにしへのふみ見るたびに』の御製、『いにしへのふみ』は、必ずしも日本の古典とは限らるべきではないけれども、この場合には、大御歌よませ給ひしころ、たびたびよみましし古典と解すべきである。古典をよませ給ふにつけ、すべをさめ給ふみ国のありさま、また、その政治はいかがあらむと思召おぼしめし給ふ、とあふぎまつるのである。

折にふれて

いそのかみ古きためしをたづねつつ新しき世のこともさだめむ(明治三十七年)

いにしへの御代みよの教をしへにもとづきてひらけゆく世にたたむとぞ思ふ(同)

これらの大御歌を拝誦しまつれば、いよいよ深き大御心をあふぎまつるのであるが、さらに、以下に引用しまつる大御歌をつづけて拝誦しまつるべきである。

神 祇

ちはやぶる神のこころを心にてわが国民くにとみを治めてしかな(明治三十四年)

国

ちはやぶる神の心にかなふべくをさめてしかな葦原のくに(明治三十九年)

古 典

石上いそのかみふるごとぶみをひもときて聖ひじりの御代みよのあとを見るかな(明治三十九年)

書

かみつ代のことをつばらにしるしたる書ふみをしるべに世を治めてむ(明治四十年)

いにしへの文ふみの林をわけてこそあらたなるよの道もしらるれ(同)

をりにふれて

かみつよの御代みよのおきてをたがへじと思ふぞおのがねがひなりける(明治四十年)

開けゆくときにいよいよ仰がれぬ聖の御代のたかきをしへは(同)

書

いそのかみふるごとぶみは万代よろづよもさかゆく国のたからなりけり(明治四十三年)

呉竹の世々につたへて仰ぐかな遠つ御祖みおやのみことのりぶみ(同)

国

世はいかに開けゆくともいにしへの国のおきてはたがへざらなむ(明治四十四年)

をりにふれて

いそのかみ古きてぶりをのこさなむ改めぬべきこと多くとも(明治四十四年)

をりにふれて

開くべき道はひらきてかみつ代の国のすがたを忘れざらなむ(明治四十五年)

これらの大御歌を拝誦しまつれば、『いにしへのふみ』は古典であり、それを読むこ

とは、『神のころろにかなふべく』みくにを治めさせ給ふことである。古典研究は、『神

ながらの道』の実現である。また、古典はその目的にかなふものを選択すべきである。

——申すもかしこかれども、『明治天皇御集』も、現在及び将来の日本国民にとつてた

ふとき古典であることを、小学生徒をして気づかしむべきである。

今日に於いて古典といふのは、時代の新古よりも、その経典としての価値について名づけらるべきである。古事記と明治天皇御集とは、大日本帝国の『万代よろづよもさかゆく国

○

『あさみどり澄みわたりたる』の御製は、同じ『題』のもとに

ひさかた久方のあまつ空にも浮雲のまよはぬ日こそすくなかりけれ(明治三十七年)

とならびのせしめられて、連作とあふがしめらるるのである。天つ空にも不安定の浮雲のさまよはぬ日はなきごとく、人の心も浮きたち、また疑ひ迷ふのであるが、さればこそ、心をば雲もなく澄みわたりたるおほ空のごとく、清くすがしく、ひろくあきらけくもたまほし、とのたまはせ給ひし、とあふぎまつるのである。それ故に、『あさみどり』の大御歌は、『久方の』の大御歌とならびつづかしめられて拜誦しまつるべきである。

この大御歌は、また同じき『天』の『題』にてよみましし二首

天

ひさかたの空はへだてもなかりけりつちなる国はさかひあれども(明治三十九年)

朝ゆふにむかひなれたる久方ひさかたの空ははるけきものとしもなし(同)

とともに拝誦しまつりて、宏大崇高の大御心をあふぎまつるべきである。へだてなきみ空をあふがせ給ひつつ、地上の区劃をかへりみさせ給ひ、日常にむかひなるれば無限の天空も、その高遠なるを特に意識せざるよ、とのたまはせ給ふのである。

天

すめるもの昇りてなりし大空にむかふ心も清くぞありける(明治三十八年)

地

産うみなさぬものなしといふあらがねのつちはこの世の母にぞありける(明治三十七年)

暁

ねざめせしこの暁あかつきのころもてしづかにものを思ひ定めむ(明治三十七年)

朝

起き出いでて思ふ事なきあしたこそをさな心にひとしかりけれ(明治三十七年)

心

つくろはむことまだしらぬうなる子のもと心のうせずもあらなむ(明治三十九年)

等の大御歌を拝誦しまつり、天地のひろくはてなくさやりなくすがしき、又幼子の心の如き自然の心をめでましたる大御心をあふぎまつりて、『あさみどり澄みわたりたる』の大御歌を拝誦しまつるべきである。

三十三 国語読本の御製 — その二 —

○

『おほぞらにそびえて見ゆる』の御製、これは教訓のこころをこめさせ給へる大御歌であることは、たやすく気づかしめらるのであるが、それとともに、大空高く聳ゆるたかね高嶺のありさま目に見ゆる心ちせらるるは、『見ゆる』の一句あるがためである。

また、『登れば』とのたまはせたるは、実際に高き山に登りゆきつつ、登る道はありけるよと、まことその境涯に随順し、自然と同化したるところに、また人生の道徳的法則を見出すをよませ給うたのである。かくの如くして、理論は情操をともし、概念も生命化せしめらるのである。これ、『しきしまのみち』の秘訣である。

折にふれて

思ふこと貫かむ世をまつほどの月日は長きものにぞありける(明治三十七年)

折にふれて

いかならむ事にあひてもたわまぬはわがしきしまの大和だましひ(明治三十七年)

折にふれて

思ふことつらぬきはてて国民の心やすめむときぞまたる(明治三十七年)

をりにふれて

思ふことつらぬかずしてやまぬこそ大和をのこのころなりけれ(明治三十八年)

をりにふれて

くろがねの^ま的いし人もあるものをつらぬきとほせ大和だましひ(明治四十一年)

石

雨^{あま}だりにくぼみし石もあるものを貫きとほせ大和魂(御製集・年代不詳)

これらの大御歌を拝誦しまつれば、『思ふこと貫きとほす』不屈不撓の意志力をうたはせ給ひし大御心をあふぎまつるのである。『志あれば成る』の格言は、『しきしまのみち』によりて生命をあたへられ、現実的に作用せしめられむとするのである。

蘆間舟

とる棹さきのころ長くもこぎよせむ蘆間あしまの小舟せぶねさはりありとも(明治三十八年)

述懐

末つひにならざらめやは国のため民のためにとわがおもふこと(明治三十八年)

誠

とき遅きたがひはあれどつらぬかぬことなきものは誠なりけり(明治三十八年)

射

梓弓あづさゆみひきしぼりても放つ矢やの的まとを貫く音ねのををしさ(明治三十九年)

をりにふれて

むらぎもの心たゆまず進みなばさがしき山も越えざらめやは(明治三十九年)

述懐

事しあらば火にも水にもいりなむと思ふがやがてやまとだましひ(明治四十年)

述懐

かたしとて思ひたゆまばなにごともなることあらじ人のよの中(明治四十二年)

岩がねをきりとほしても川水は思ふところに流れゆくらむ(明治四十四年)

をりにふれて

むらぎもの心のかぎりつくしてむわが思ふことなりもならずも(明治四十四年)

思ふこと貫きとほさむとする意志は、『誠』のはたらきである。この意志は、岩がねをきりとほしても流れゆく水の如き不断相続の生成であつて、一定の目的に到達して休止しようとするのではなく、心のかぎり、全力をふるつて『誠』を貫徹せしめようとするのである。此の意志生成開展の路によこたはる障礙を打破して進むことが、思ふことをつらぬくことである。しかしながら此の意志は、無窮に開展するのであるからして、到達するところはないのである。故に、『思ふことつらぬきとほす』ことと『思ふことなりもならずも』、即ち、その効果をみとめ目的をはたすと否とにかかはらず、『心のかぎりつくす』、即ち、全力を傾注せむとすることは、同じ信念を二つの見地よりそれぞれに歌つたものである。このうちには、力行それ自身を目的として効果をかへりみずといひ、又人事を尽して天命を待つといふ如き思想も、摂取せられて、しきしまのみち

により生命化せしめらるるのである。

○

『ほどほどにところをつくす』の御製、『ほどほど』とは身のほどほどであつて、身分地位職掌及び能力と趣味とにしたがひ、その全力をつくして義務を遂行することである。

述 懐

よの中はたかきいやしきほどほどに身を尽すこそつとめなりけれ(明治三十七年)

折にふれて

なりはひはよしかはるとも国民の同じところに世を守らなむ(明治三十七年)

をりにふれて

こころざす方こそかはれ国を思ふ民の誠はひとつなるらむ(明治三十八年)

これらの大御歌により、国民はその身分にしたがひて義務を遂行すべく、この民の力を総合せさせ給ふがすなはち大御身の大御ちからぞ、と、のたまはせ給ふのである。

述 懐

千万の民の力をあつめなばいかなる業も成らむとぞ思ふ(明治四十一年)

そのなりはひを異にしても、同じ心をもつて身分に依じて協力すれば、それは、世を守る神の力と感応し、君の大御心と民の心とは、合一せしめらるるのである。

○

『さしのぼる朝日のごとく』の御製、こは、大空のひろきを心とせむとのたまひ、また朝、暁の心をめでましましし大御歌とともに拝誦しまつるべきである。

暁

ねざめせしこの暁あかつきのころもてしづかにもを思ひ定めむ(明治三十七年)

朝

起き出いでて思ふ事なきあしたこそをさな心にひとしかりけれ(明治三十七年)

天

あさみどり澄みわたりたる大空の広きをおのが心ともがな(明治三十七年)

久方のあまつ空にも浮雲のまよはぬ日こそすくなかりけれ(同)

あさみどりに澄みわたりたる大空のごとき広き心をもたまほし、とのたまはせ給ふは、天つ空にも浮雲のまよはぬ日はすくなき如く、人の心も、せばめられくもりがちになる

故である。されば、『さしのぼる朝日のごとく』の大御歌をよませ給ひたると同じき年の大御歌にも、次の二首の如きがあることを思ふべきである。

雲

あつまると見れば離るる大ぞらの雲にも似たるひと心かな(明治四十二年)

心

ともすれば思はぬ方にうつるかなこころすべきは心なりけり(明治四十二年)

○

『よきをとりあしきをすて』の御製、世界ことに歐洲文化を撰取せさせ給ひしことは、明治の大御代の国勢発展をたすくるところがあつたのはいふまでもないことであるが、それは、外国文化に批判を加へて、選択を誤らざりしがためであることを、思はねばならぬのである。これを、単に長所を取り、短所を捨つる、とのみ解しまつるべきではないのである。それ故に、『よき』と『あしき』とは、長短といふよりも、むしろ正邪・善悪・真偽といふべきで、外国文化は、常に精神科学的批判及び人生観に基く確信のもとに、選択しつつ撰取せらるべきである。

三十四 国語読本の御製 — その三 —

○ 『荒駒をならしがてらに』の御製、荒駒は荒馬であつて、勢のあらしき馬を馴らしながら、花見する人々をよませ給ひし大御歌である。『ますらを』と『たをめや』と相對するごとく、荒馬を馴らすたけきわざと、花見するやさしきわざとを対照せしめ給ひ、ここに武士、また、男子の心ばせをよませ給うたのである。男子にもやさしき心あるべき如く、女子にもつよき心あるべきである。『ますらをのとも』と、つかへまつる諸人もろびとの上をよませ給へるは、まことに大御歌のみあふぎまつる内容である。『ますらをのとも』は、常に 天皇につかへまつるのであるからして、今日の『政党』も、ますらをのともとして、忠義をその主義たらしむべきである。聖武天皇御製、『ますらをの行くとい

ふ道ぞおほろかに思ひて行くなますらをのとも』(万葉集六卷)、又大伴家持の喩^{うた}族^{やから}の歌の終りの『虚言^{むな}もおやの名断^たつな、大伴の氏^{うぢ}と名におへる、ますらをのとも』(萬葉集二十卷)、とうたはれたる伝統精神をかへりみるべきである。

『いづかたにこころざしてか』の御製、夏の日盛^{ひざかり}に日のでりつけてあつくやけたる道を、蟻の行きつつあるは、何れ^{いづ}の方向へ行かむと志すのであるか、とよませ給うたのである。昆蟲類の中にも、蟻は人がその勤勞の生活をめづるのである。されば、禽獸の生をあはれませ給ふ大御心は、かかる昆蟲類にまでも及び、殊にその勤勞の生活に、堅忍の『意志』をみそなはし給ふをあふぎまつるべきである。

『はるばると風のゆくへの』の御製、すすきのしげつて居る原に秋の月の清き光がさして居る、そこへ風が吹いて来ると、風になびきふす薄^{すすき}のみだるるさまが、はるかに遠くまで明らかに見ゆるよ、とよませ給うたのである。『風のゆくへ』といふ一句に、吹き来る風になびく薄^{すすき}が原の動揺變化する光景をしぬばしめ、『秋の夜の月』とよみきら

せ給へるに、澄みわたるみ空をはてなく照らす秋の月をしぬばしめらるるのである。この大御歌は、『はるばると風のゆくへの見ゆるかな』の一文と『すすきが原の秋の夜の月』の一文と、二文に分たれて居るのであるが、第一文と第二文とは、同格に並立してゐるのであつて、此の大御歌は

はるばると風のゆくへの見ゆるかな、——すすきが原の秋の夜の月。

と二行に分つて記載せらるべきものと思はるのであるが、この二文は、同格にあつて同一内容を表現するのであるからして、形式上の分枝にかかはらず、その内容の密着によつて不可思議に一首の統一を保つのである。

○

『海原うなばらはみどりにはれて』の御製、はれ渡るみどりの海原うなばらにのぞむ浜松の木ずゑにふりつもりし白雪の、松と海とに対して色彩鮮明に、しかも、海の色松の色の同じきみどりにも濃淡があり、それと白雪との対照は、『みどりにはれて』の『はれて』の一語によつて具象化せられ、その光景が目に浮ばしめらるるのである。『はれて』の『て』は、時の助動詞としての意味をいきしめて、形式語としての助詞とのみ解せざるとともに、

『ふれる』の『る』も、同じく動作の完了を示す時の助動詞の意味を強めて理解すべきである。浜松に雪のつもりたるも、海原のはれ渡りたるも、すでに完了したことであつて、大御歌に表現せられて居るのは、静止的調和の明瞭なる色彩の天地である。

○

以上の如き解釈は、そのまま小学生徒に教へらるべきではないけれども、教員諸氏は、ここに論及した諸方面を研究せられむことをのぞむのである。以下、同信の友の一人よりの手紙の一部分を引用して教育家の参考に供しよう。『……今年女学校一年に入學しましたが、家にて国語の復習を致してをります際「よきをとりあしきをすてて」の御製につき、「外国のよいところを取り、日本のわるいところを捨てて」といふやうに解釈をつけてをりますのを耳にはさみ、それでは違ふだらうと申しききましたところ、「先生がさうおつしやつた」由にて、その読本を見ますと、その文は故の平田東助子の書かれしものにて、そのうちにも此の大御歌を、「採長補短」の大御心として頂かれてをりましたのでした。しかし「よきをとりあしきをすてて」との大御言と「採長補短」とは、どうも一致した内容を持ち得ぬやうに考へられますので、諸兄の御意見も伺ひ、また図書館にて諸家の謹解を調べましたが、本居豊穎氏謹註の「明治天皇御製百首」には、此の大御歌の謹解に五箇条の御誓文のうち「旧来の陋習を破り」とあるを引用し奉り、「あらたむべきことは改めて」と言ひ、明かにその女学校の先生と同じく「外国のよきをとり、我国のあしきをすてて」の意に解

し奉りをりますので、これはとやや意外に存じました。佐々木信綱博士の「明治天皇御集謹解」には、単に「短をすて長をとらむとの大御心。明治の大政の大本ここにも明らかなり。」とのみあり、この大切の大御歌を極少数の、しかも曖昧の言葉にて解し奉りしは、まことに遺憾に感ぜられました。」

『渡辺新三郎氏の「明治天皇御集謹解」』には、「すべての事、世界各国の長所を取り短所を捨てて、わが国に利用し」とあり、これは、明かに外国の長短所を批判してわが国に利用せむの意で、外国に対する批判といふに氣附きしは至極同感なるも、大御歌の「よき」「あしき」といふ大御言を、「長」「短」と改め解しまつりしは、断じてうけがひ得ずと信するのであります。その点について、千葉胤明氏の「明治天皇御集」の謹註にも、「長所を採り用ひ、短所を斥け捨て」と、矢張り「長、短」と言葉を改め解しまつりありますが、それについて 明治天皇の有りがたき御逸事ありとて、「故大久保内務卿が、長与衛生局長の欧米視察報告により、肉食本位論をそのまま言上すると、天皇はつぶさにきこしめされて、仰せらるるには、泰西の衛生状態はよく了解した、併し我国三千年の歴史を見るに、穀食を常習とするにも関らず、古来長寿を保ち得た者は決して少くはない、又能力に於ても、一例を言へば、千載の後まで世人の信仰衰へぬ僧侶、最澄・空海の如きは、必ず穀食のみを勵行して教義の普及に力め、あらゆる強敵と戦つて遂に打勝つだけの智力と体力のあつたことは疑ひない、果して然りとせば、肉食の民のみを優秀とするは信ぜられぬ、このことは国土の位置、氣候、人種の如何等にも大に關係あることであるから、これらをも十分に考慮し、確証を得て後、

改むべきは改めるがよい、軽拳は害あつて益のないことである、との御沙汰に、流石さすがの内務卿も恐懼措くところを知らず、流汗背を露あせして、御前を退下し、後日、大山巖・高崎正風の両氏に語つて、自己の軽率を後悔されたと云ふ」由の記事あり、実に実に、名も無き民われらの感激に堪へざるところ、ただただ有りがたく拝誦しましたのでした。「よき」「あしき」は批判の言葉にて、その批判の原理・批判の根拠・批判の基準は何処にありや、外国に用ゐて長なりとて、之を直ちに日本に用ゐてよきやあしきや、未だ不明の事にて、日本に用ゐてよきことこそ「よき」といはれ、たとひ、外国にてその長所となれるものも日本には用ゐられぬものは「あしき」として、敵せきかに批判警戒せしめられねばならず、実に、われらの批判の基準は日本そのもの、日本の史的国民生活そのもののうちにあらねばならぬ、との大御心と、ひたすらかしこみかしこみをろがみ頂きまつらしめらるるのであります。」

またことに、教育家の参考のためにここに一言したいのは、近頃新聞紙上にも「明治大帝」と申し奉るのが目につくのであるが、われらは「明治天皇」とこそ申しまつるべきで「明治大帝」とは申しまつるべからずと信じ、それを実行しつつある。雑誌キング附録「明治大帝」の如きも、よき企てであるが、「明治大帝」と申しまつらざれば、と惜しまるのである。これについて同信の友の一人の意見をここに引用する。『大帝と称へまつるべからざること、少くともわれらはこれを実行し来りしと存じます。また一般にも、少くも口には余り「タイテイ」と称へまつるを聞かぬと存じます。まことに西洋歴史からの摸倣と存じます。高桑駒吉氏が「明治大帝」と称へまつり、

全巻を通じて「大帝」と称へまつりをやりますやうなものとなり、キングなどの大広告にまで、通俗化して来たものかと存じますが、若しこれが一般的事物になるやうでは、皇国の国体と外国のそれとが紛乱すべきもとなるかと気づかれます。西洋に於いても、「大王」「大帝」等は通称であります。「大帝」など「ペートル大帝」などを直ちに聯想せしめられ不祥と存じます。個人的才能の大小に依つてすべてを評価するに至る危険を厳に戒むべきと存じます。』

三十五 『明治天皇御集』と国民教化 ―その一―

道

○

いとまあらばふみわけて見よ千早ちはやぶる神代ながらの敷島の道(明治四十年)

教育

わがしれる野にも山にもしげらせよ神ながらなる道をしへぐさ(明治四十三年)

楽

千万ちよろうの民と共にたのしみたのしみにます 楽はあらじとぞおもふ(明治四十三年)

をりにふれて

さまざまの世のたのしみことも言のはの道のうへにはたつものぞなき(明治四十三年)

○ 『しきしまのみち』をふみわけ、和歌を作り、また味あじはふことは、個人にとりてはこのうへもなき内心の楽しみであり、また同時に国民教化の根本である。人の楽しみは、一族、一地方の同郷人また全国民とともにたのしむことに於いて、きはまるのである。この『しきしまのみち』即ち和歌の創作鑑賞によつて、団体生活の無窮生命を味ふことが実現せらるるのである。

○ 原始人の有する芸術は、舞踊芸術であつて、舞踊は、原始的であるが全身的である。

また、歌謡と音楽とは、舞踊に於いて総撰せらるるのである。歌謡は、舟を漕ぎ、車を引き、重きものを引き上ぐる如き肉体的労作の節奏に随伴して発せらるる、人間の自然音ともいふべきものであるが、それが肉体的労作の宗教・芸術化としての舞踊に総撰せらるるのである。此の舞踊や歌謡の原始的性質は、これを今日につたへたもつべきで、そこに『神代ながら』の本質がある。武術競技をも、行軍戦争をも舞踊たらしめ、進んでは一般労作をも舞踊たらしめ、また、国語をも歌謡たらしめて、国民教育を心身の自

然律動に順応せしむべきである。

歌謡は、応答の形式をとるに及んで、始めて一定の作者の詩歌として独立するのであつて、それを、特に連歌の起原とすべきではない。歌謡に反復の形式があるのは、肉体的律動の反復に随伴せしめらるるからで、此の反復によつて、詩形の固定が誘はるるのである。反復は疊語じようごを、また、伝誦は諧調を要求するのである。しかして、詩形の固定するとともに、歌謡は瞬間興奮的より反省思想的となるのである。殊に、日本に於ける長歌と今日の和歌の源泉としての反歌との關係に於いては、反歌は、長歌に対して反省的概括的の見地に於いて作らるるのであるからして、自ら思想詩おのづかとなり、また、その五七五七七の五句三十一音の短小形式が、此の特色の發達を助勢するのである。三十一音の短詩形は、自ら作者おのづかをして概括的反省的たらしむるのである。それはまたそれと同時に、社会的共有物としての歌謡を個人的創作たらしむべき詩形上の約束となるのである。

故に記紀の歌謡に比較して、万葉集の有名な歌人の作は、非常にその性質の異つたものとなつてをるのである。記紀の歌謡には、その背後にある全民族の団体生命を感じし

めらるのであるが、万葉集の有名の歌人の作には、個人の知識的反省と修辭的技巧とが目につくのである。

故に、此の五七五七七の五句三十一音詩の作者をして全国民生活に没入し、天皇の大御身に於かせられては、『千萬の民とともに』、人民としては、義勇公に奉じ忠誠を尽し個我感情をすてて全体生活に融合することは、和歌の目的であり、『しきしまのみち』の理想である。明治天皇がたふとばせ給ひし、古事記に表現せられたるわれらの祖先の生活は、民族移動・建国創業の暴風雨的奮闘の行進曲であつた。故に、記紀の歌謡は悲壯の軍歌であり、雄大の叙事詩であり、哀痛の恋愛詩である。古事記の精神をうけつぐべき和歌は、五七五七七の五句三十一音の思想詩的短詩形であるにかかはらず、その詩形制約を破つて、そこに、思想詩として同時に抒情詩であるところの、また、現代生活を古代精神に結合するところの、『しきしまのみち』を実現せむとすべきで、そのためには、平和時にありても非常時の覚悟をもつて生活し、その生活を和歌によつて表現すべきである。

世の中にことあるときはみな人もまことの歌をよみいでにけり(明治三十七年)

○

治まる御代に生れあひたる人民は、祖先の建国精神と奮闘生活とをわすれむとしつつある。研究分析・整理編纂の作業と、企業生産・利得享楽の繁務とに固執せむとしつつある。科学の進歩とともに、宇宙の万象はそれぞれ分析せられて、部門と系統とに分類・組織せられつつある。また、空中・海中にまで、人間の勢力はその活動範囲を拡張しつつある。しかしながら、科学、また哲学が如何に進歩しても、人生は依然として不可測の生成である。禍福は不可測に交代し、人生は無常の変化である。故に、一方に、分析的科学が発達すればするに随つて、他方には、論理的整理に堪へぬ人生は、総合的芸術を要求する。科学と工業との提携によつて、近代生活の物的材料は供給せらるるのであるが、それは一方に於いて、ますます精神的統一威力を要するのである。科学と工業との偏頗的発達は、遂にその国民生活そのものを自己解体せしめて、国民全部を奴隷たらしむるに至るのである。ドイツ国民にとつてのヴェルサイユ条約は、平和の名の下に国民の手足を鉄鎖によつて緊縛したのであつた。現代日本は、公共営造物と交通機関とを

近代歐洲風に建設しつつあるが、それらの外部構造に生命をあたふるものは、目に見えざる精神であり、『しきしまのみち』である。

故に、和歌の、また、しきしまのみちの現代生活に於ける任務は、極めて重大であつて、それは、今日の政治組織と経済制度とに於いては、個人の又は私的団体の事業としてでなく、国家の事業として、教育制度と密着せしむることを要するのである。この和歌と教育との関係は、和歌の宗教的性質からして、所謂政教関係に近きものであることを知らねばならぬのである。しかしながら、政治的権力又は制度と芸術・宗教的又は學術的活動とは、正しくその関係を保ち難きものであるのみならず、むしろ、俗世間の権力と遠離することが、学問・芸術・宗教の本領であるが如く考へらるのである。出家入道といひ超世脱俗といふのがそれである。しかしながら『しきしまのみち』は、現実生活回避せずして、これに随順すべきであるからして、道俗また雅俗を分つことは、その根本原理からしても、また教化普及の世界的趨勢からしても許容せらるべくもないのである。すなはち、国家権力と社会制度との形式に人生批判力としての、『しきしまのみち』の内容を充当すべきである。文官試験に於いても、『しきしまのみち』を試験科

目たらしむべきである。政治家が漢詩を作るといふことも美風であつたが、今日の政治家は、時代の進運に随順して和歌をよむべきである。

かくの如く考察すれば、申すもかしこきことなれども、われら日本国民が、天皇にましまして歌聖にましましたる 明治天皇をいただきまつり、その大御稜威は『神のみり』として御国をまもらせ給ふ、とあふぎまつれば、われら日本国民は、この広大恩徳にむくいまつるために、粉身碎骨して忠義をつくしまつらねばならぬのである。『明治天皇御集』が、国家教育制度の儀式に於いてのみならず、教科の内容に於いて、その拝誦及び研究が制度として決定せらるべきを思ふのである。

○

元来一般芸術は稀有けうの天才によつて創作せらるるのであるが、日本国民と和歌との関係は、不可思議の例外を示すのである。和歌は、決して少数天才の所有物ではなく、日本国民は悉く詩人であるかと思はしめらるる程に、和歌は『民衆化』してをる。和歌は、つくりはぬをさな心をありのままにうたふものであることは、『歌』の章に於いてのべたのであるが、ここに、『御製集』下巻より明治三十八年及び四十年の大御歌を引

用しまつらう。

歌

なかなか深き心のみゆるかなはかなしと思ふ言の葉草くさに

歌

事もなくしらべあげたる言の葉の花にぞ匂ふ国のすがたも

今日に於いても所謂いはゆる専門歌人の歌よりも却つて歌人として名の知れぬ人の、『はかな

しと思ふ言の葉草に』『事もなくしらべあげたる』まことのよき歌がある。これはたと

へば、新古今集に於いても、応答した遊女の歌の方が、西行の歌よりもすぐれてをり、

武人としての源頼朝の歌の方が、有名の公卿歌人の歌よりもすぐれてをるやうのもので

ある。日本国民が、原始的素朴性を有する和歌を、今日まで伝へてをることは、即ち、

三千年の文化開展をへつつ、ことに、明治時代以後日本が世界文化輻合地点として東西

文化の融合を実現し、同時に、千早ぶる神代ながらの『しきしまのみち』の伝統を維持

してをるといふことは、日本国家の無窮生命の徴候を示すものである。故に、日本に於

いて、『民衆的』といふことは、『神代ながら』といふことで、それは、近代文化の統一

精神であつて、生産・分配の平等を最後の目あてとする歐洲の『民衆的』、又は『社会・共産主義』とは全く異つたものである。国民精神善導が、『しきしまのみち』によらねばならぬのは、此の故である。『しきしまのみち』は、文化の民衆化であり、国民全体として平等の感激に達することであつて、それは、国民教化の原理であり、方法であり、また教科である。この意味に於いて『しきしまのみち』は、精神的宗教的であつて、マルクス主義の唯物主義・利己主義は、『しきしまのみち』の正反対である。故に、政治と文化との眞の民衆化は、『しきしまのみち』によつて実現せらるるのである。

三十六 『明治天皇御集』と国民教化 —その二—

○

最近に於いては、世界大戦終結以後、大震災火災以後、英語の勢力が非常の勢ひで日本語に浸潤してきたことは、史上の漢語・漢文の浸潤力を思はしむるものがある。また、仏教經典も、漢訳として日本にもち来されたのであるからして、漢字・漢文の要素は、日本語に飽和せしめられたのである。しかるに日本語は、この外来要素を完全に日本化してしまつたのであるから、今日の英語及び歐洲語もまた、日本語に同化せしめらるべきはいふまでもないのである。しかしながら、日本語が漢字・漢文の勢力のもとに呻吟し、非常の困難と戦ひつつあるといふことは、なほ今日眼前の事実であるが、それは、苦戦ではあるが必勝戦である。此の日本語、また日本思想・日本精神の勝利の瑞祥

を示したものは、『しきしまのみち』としての和歌の発達である。和歌は純日本語として、また少くも正系日本語として、その『しらべ』即ち生命律動を重んじ、日本文学を中心であり、国語・国文学的研究又日本文献学的研究の淵源となり、日本精神自覚の摇篮であつた。

漢詩を作り、大義名分を説き、尊王攘夷を論じた維新の志士の事業は、今や『しきしまのみち』の実行者によつて、まづその精神文化生活方面から始めて、補足せられねばならぬのである。明治の大御代には、『しきしまのみち』の経典『明治天皇御集』にあふぎまつる。明治天皇の大御稜威のもとに、全国民の協力によつて曠古の大事業が成就せしめられたのであつて、漢詩人としての維新功臣の力は、その一要素にすぎぬものと見ねばならぬのである。三千年の古き文化の国をして爛熟頽廢せしめず、永久に若き原始素朴性をつたへ保たしめたものは、神代ながらの『しきしまのみち』である。

この協力は、個人が全体に従属すると同時に、個人を全体に結合するところの忠義道德とともに、円融無礙・人生随順宗教原理の実現である。ここに於いて『しきしまのみち』は、道德規律・宗教信仰を芸術的表現に総撰するのである。

故に、『しきしまのみち』をふみゆけば貧窮生活にも安心を見出し、苦患にも勇ましく対応するのである。即ち、外面に部分的に継起し交錯する変化を、内心に撰取し統一する、その『修業』としての『しきしまのみち』の、この精神的基礎まで窮^{きゆうじん}尽せられ、唯一原理の下に統綜せられて、始めて文化の民衆化、又は同胞感としての平等感激が実現せらるるのである。この和歌の道徳・宗教的性質が、その民衆芸術としての本質となるのである。故にここにいふ民衆的とは、通俗・平凡、又は卑陋・低級を意味するのでなく、また、娯楽・興味的を意味するでもなく、実世間・日常生活に随順しつつ、その部分的皮相に低回せずして、全体的深奥に徹入するのである。『しきしまのみち』をふみゆくものは、和歌製作の技術者ではなく、所謂、その道の達人としての人生の理解者たるべきであるからして、それは人生の最高の修養である。ここに、神と人との交通が実現せらるるのである。

高貴と平等との一致は、平等の精神化により、神と人との交通にきはめらるるところの、国家社会秩序の『まつりごと』化によつて実現せらるるのである。

われら日本国民が、国家社会秩序の根源として、『神聖にして侵すべからざる』万世

一系の 天皇をいただきまつることの、至極慶福に報いまつらむためには、義勇奉公の忠誠を宣誓せねばならぬのである。恩恵になれて放逸に流るることは、嚴重に警戒すべきである。この義勇奉公・忠誠報恩の生活より、『まことのうた』が生るるのである。

○

歌を作ることと、作りたる歌を選むこととは、つねに閑聊して考察せらるべきである。『しきしまのみち』をふみわくことは、単に歌を作るだけではなく、その作りたる歌を批判・吟味してこれに評価・選択を加ふることである。ある心境の変化・動揺・進行・開展は、それを歌に表現し、その歌を吟味することによつて、その心境の純雑・真偽、また、緊張・興奮の程度を測定し得るのである。実験心理学的研究そのものの業績とともに、それによつて養成せられたる正確・緻密の観察法が、更に複雑なる精神現象の観察に役立つ如くに、和歌俳句の創作選抜の苦心によつて会得したるところの語法句法についての造詣は、それに平行する心理的過程の機微の消息を解し、小説・長詩・劇詩等の創作上の秘訣を悟り得るに至らしむるのである。著者が二十年来、『日本及日本人』誌上に於いて選抜しつつある和歌は、今日、著者の研究が、ここに『明治天皇御集

研究』にまで進展せしめられた基礎であり、ここに、ソリダリテ、又衆生恩（川合貞一教授への途中『共同責務・恩の思想』章参照）が感得せらるるのである。筆者の微力にして怠慢なる作業が、緩慢なる速度をとりつつも、同信団体の精神的交通によつて持続せしめられつつあることは、『しきしまのみち』につかへむとするわれらの信念をかため、勇気をよみがへらしむるのである。

道

ひろくなり狭くなりつつ神代よりたえせぬものは敷島の道（明治三十九年）

○

『しきしまのみち』をふみわくることが国民教化の上に制度として決定せらるべきものであり、『明治天皇御集』は、『しきしまのみち』の経典であることを説いたのであるが、さらに、『明治天皇御集』は、明治天皇の抒情詩御集であり、それを拝誦しまつる国民にとりては、『明治天皇大御代叙事詩』であり、『御集』に表現せさせ給ひし国民生活の、交錯し変化しつつ祖先の生活にさかのぼり、子孫の生活につながる人生の葛藤は、実に『近代綜合劇詩』の表現対象である。故に『御集』研究は、必ず此の芸術表現

に、朝宗すべき大小の分派・支流たるべきである。

神話・童話的想像と歴史・政治的事実とを、その開展階次を明確に区分することなしに、すべてを、人間内心の感激のうちにとけ入らしめたのが、『やまとだましひ』であり、日本建国の歴史的事実としての、島国内に於ける孤独・団結生活と排外・絶縁文化とであつた。しかしながらそれは、交通絶縁孤島に於ける現存原始民族の如き小規模のものではなく、日本の土地に『世界』を築造し、ここに『宇宙』を開闢しつつ、『帝国』を建設したのである。故に日本の神話伝説は、天壤無窮に伝へられ、神話と歴史とは、同一化せしめられ、現人神あらひとがみとしての天皇をいただきまつるのである。宗教的、不可思議は、地上に実現せられつつあるのである。

地

産みなさぬものなしといふあらがねのつちはこの世の母にぞありける(明治三十七年)

天

ひさかたの空はへだてもなかりけりつちなる国はさかひあれども(明治三十九年)

朝ゆふにむかひなれたる久方ひさかたの空ははるけきものとしもなし(同)

この際涯なく区劃なき天と、極限あり境界ある地との対照は、地上に住みて天界を仰ぐ人間の内心に於いて、融合せしめらるるのである。現実の地上に不可思議が実現せられ、有限の地上に無限の生命が成り出でしめらるるのである。全体の無窮生命と部分の不断変易とは、天地の対照強化的合成によつて、実現せらるるのである。しかしながらそれは、哲学的又は形而上学的概念としての陰陽理論ではなく、仰ぎ見る天と、われらの歩みまた耕す地とについての、現実的思想法である。しかしてその芸術活動は、人間の内心に於いて行はるるのであるから、宇宙の森羅万象と人生の波瀾曲折とは、われらが内心の感激のうちに総撰せらるるのである。しかしながら、静観瞑想の世界に沈湎せずして、現実的責務の遂行にいそしむのであるからして、あくまでも『総合的』であり、そのためにまた、『現実的』であることが『しきしまのみち』の本質である。

○

日本精神は、実にわれらの祖先から子孫につたへられ常に生成養育せられつつ、しかも自立統一国家日本を基準として、一切の外界現象を内心に、外国文化を日本に、総撰したのである。故に『日本』は、『世界』であり、『帝国』であり、また本来の意味に於

いて、『人生』である。それは、『個人』と『国民』とをつながらしめ、『人』を『神』と交通せしむるところの、道徳規律であり宗教儀式である。それ故に、それを實現する和歌を、『みち』と名づくるのである。それは、『日本国民の行くべき道』である。日本国民教育が、『しきしまのみち』をその制度としてとりいれるならば、またとりいれたであらうなれば、今日の如く『しきしまのみち』に敵対する国際主義としての、また反逆思想としてのマルクス主義が、帝国大学を中心として宣伝せらるるが如き教育界の乱脈現象は、起らなかつたであらうと思ふのである。

故に『明治天皇御集』拜誦を、国民教育機関に於ける国家制度の公的儀式たらしむべきを、ここに反覆主張せむとするのである。

三十七 坤徳対照 — その一 —

『明治天皇御集』ををろがみよみまつるとともに、『昭憲皇太后御集』ををろがみよみまつることをめぐまれたる、われら国民のよろこびは、いひあらはすべき言葉もたえて、ただ感涙にむせぶのみである。ここに『昭憲皇太后御集』より、空ゆく日月のごとくならびいまし大御身にちかきあけくれのさまをしぬびまつるべき御歌みうたを、引用しまつらうとするのである。これは、『昭憲皇太后御集』の研究をなすべき見地からではなく、『明治天皇御集』の研究をなすべき見地から引用しまつるのである。

これまことに、『明治天皇御集』がはてなき永久生命のみなものと、くめどもつきぬ大御おほみいつくしみの表現にて、それと同時にまた、現実道徳生活の基礎に立つところの、現実的にして理想的なる、芸術最高の規範をしめさせ給ふことの真証である。

○

菊のさかりなるころ青山の御苑にわたらせ給ひてとく参るべう宣はせければ
さきみてるみそのの菊の花よりも大御詞おほみことばの露ぞうれしき(明治十二年)

かへるさ雨いたう降りければ

ふりしきる雨もいとはでかへりけりめぐみの露のあまりと思へば(明治十二年)

或人の奉りたる御劔のめでたきをたたへて

御劔みつるぎのてらす光にいはとあけし神代もさらにおほしいづらむ(明治十二年)

みはしの花御覧ぜさせしをり

政事まつりごとしげきあしたの庭桜けふはのどかにみそなはすらむ(明治十三年)

落花

君がためをらむとすれば黒髪のうちへにみだれてちる桜かな(明治十三年)

折にふれて

すだく蚊の声いぶせしとおぼすらむ軒端のきばをぐらきかりの宮居みやゐに(明治十三年)

みいたづきやすめたまへるかりみやもいかにいぶせき処なるらむ(同)

民のささげたる螢とて八王子の行在所あんざいしよよりたまひければ

さびしさもしばし忘れてみるものはみまへになれし螢ほたるなりけり(明治十三年)

新殿の月御覽ぜさせしゆふべ

おぼしまのかげもうつりてすがむしろしくものもなき雲の上の月(明治十三年)

大前にはべりけるゆふつかた木このまより月のさしいでければ

さしのぼる月の光はきよけれど松より外のかげのわかれぬ(明治十三年)

月あきらかなりける夜仰おほせごとにて

さやかなる雲居くもゐの月に山城やましろのみやこの空もおぼしいづらむ(明治十三年)

小笠原島の西瓜とて人のおこせければ

御車みくるまのかへります日のちかからばまちても君にささげむものを(明治十三年)

木曾路きそぢに行幸ましましけるころ朝霧のたてるを見て

大宮おほみやのとばりもしめる朝霧に君がこゆらむ山路をぞ思ふ(明治十三年)

をりにふれて

手綱たづなとる御手みても寒くやおぼすらむ紅葉みだるる庭の嵐に(明治十四年)

一人有慶

天の下をさむる君がよろこびは青人草あをひとぐさのさかえなるらむ(明治十四年)

近衛このゑのつはものどもが朝ごとにふきたつる喇叭フッパの音をききて

宮の内をいでましし日のしのばれてあした身にしむ笛の声かな(明治十四年)

北海道にわたらせたまふをおもひやりたてまつりて

民のためいでます道ぞ北の海の霧も御船をよきてたたなむ(明治十四年)

おなじころ裁菊といふことを

かへりますほどもちかしときくの花うゑてまつこそ楽しかりけれ(明治十四年)

みそのの花御覽ぜさせしゆふべ

庭ざくらみそなはす夜はともし火の花にも風のいとほるかな(明治十五年)

千葉県より還幸ましましける夜風はげしう吹きければ

いでましのほどにしあらばいかばかりこよひの風にもおもはまし(明治十五年)

御巡幸ましましし年の又の秋萩のさかりなるを見て

うれしくもともにみそのの萩が花こそはさびしき盛さかなりしを(明治十六年)

仰おほせごとによりて月前霧を

さざりたつこよひも月のさやけきは君がみかげのそへばなりけり(明治十六年)

くもりがちなりける夜おほせごとによりて空を仰ぎて

みこころにかからざりせば浮雲のひまゆく月の影も見ましや(明治十六年)

向が岡にみゆきましましける夜雨いみじうふりいでければ

御車みくるまをまつま久しき夕やみにむねとどろかす雨の音かな(明治十六年)

いづこまでかへりますらむ夕やみの空かきくらし雨のふりくる(同)

八王子の御獵場よりかへらせたまひける日狩場雪かりばのゆきといふことを

よませたまひけるに

兎とる網にも雪のかかる日にぬれしみけしを思ひこそやれ(明治十七年)

春動物

大君おほきみのいでましまつと花かげにいななく駒の声ののどけさ(明治十八年)

西の海へみゆきましましけるころ船中月明といふことを

波風もはばかる船のうちにしてさやけき月やみそなはすらむ(明治十八年)

おほきみのみふねすずしく照すらむあかしのうらの夏のよの月(同)

雨中梅

おほみや
まつりごと
大宮のみはしの梅もさきそひてつれづれならぬ春の雨かな(明治十九年)
政事いとまある日とみそなはず梅には雨も心してふれ(同)

明月契久

わが君のちとせの秋をちぎるかなくもりなきよの月に向ひて(明治十九年)

池水浪静

池の面になみなき見ればいでましの大御船路もしづけかるらむ(明治十九年)

香水

おほきみのみけしにそそぐ水の香にわが袂までかをりぬるかな(明治二十年)

○

みこち例ならずましましけるころ梅花盛といふことを

うめの花さかりもすぎぬ君が為風をいとひてたれこめしまに(明治二十一年)

観兵式の日

青山の広野せばしとつはものならぶを今やみそなはすらむ(明治二十一年)

若わか鮎ゆ

おほみけにまづそなへむとこの春もわかゆくむらむ玉川のさと(明治二十二年)

雁初来

めづらしとおまへのみすをあぐるまに遠ざかりけり初雁はつかりの声(明治二十二年)

駒

大君おほきみのみくらくおくべき若駒いななは嘶いなく声もたかくぞありける(明治二十二年)

三十八 坤徳対照 一その二一

○

名古屋にて大演習行はせたまはむとするころ海上霞といふことを

大みふねうかべむ春と風なぎてうちかすむらむ鳥羽とばの海原うなばら(明治二十三年)

春月

玉すだれなかばかかげてみそなはず朧月夜おぼろづくよのかげののどけさ(明治二十三年)

郭公一声

わが君はきこしめさずや時鳥ほととぎすみはしに近き今のひとこゑ(明治二十三年)

吹上のみそのにて内豎ないじゆのほたるがりするを見て

君がためしぶきにぬれて宮人もたきつ岩根いはねの螢ほたるおふなり(明治二十三年)

菊花第一

みそのふの菊をおきては大君のちよのかざしと見む花ぞなき(明治二十三年)

御船路をおもひやり奉りて

夢さめてみふねの上を思ふかな舞子の浜の波のさわぎに(明治二十三年)

日和ひよりまつみふねのうちやいかならむ霧たちわたる荒波の上に(同)

あるゆふべ仰ごとにより二重やぐらにのぼりしに博覧会に出品せる

花火をうちこころみるが見えければ

高どのにのぼらざりせばめづらしきこの花火をも見ずややみなむ(明治二十三年)

○

駒迎

君が為こまむかへむと司人つかさびとことしもゆくか千葉のみまきに(明治二十四年)

禁中月

大宮の軒ふかけれどおましまでさしわたりたる月のかげかな(明治二十四年)

大前の玉のすだれもおろさせむ月の夜風の寒くなりぬる(同)

落梅

みそなはすひまだになくて御園生みそのかの梅はをしくも散りはてにけり(明治二十五年)

折花

君がためえらびて折りし一枝におもひしよりは花のすくなき(明治二十五年)

折にふれて

御園みそのよりをりてかへりしさくら花おまへの瓶かめにまづぞさしてむ(明治二十五年)

こちそこなひてこもりけるころ時鳥のはじめて鳴きけるよしききて

大前おほまへにさぶらひたらば時鳥ほととぎす人つてならできかましものを(明治二十五年)

仰ごとによりて夏夜涼といふことを

軒たかくかけしともしびおろすまで夜風すずしくふき渡るなり(明治二十五年)

園中月

はしちかくおましようつしてみそなはす御園みそのの月のかげのさやけさ(明治二十五年)

茄子

そのもりがうゑしかきねの初茄子はつなすびおものとすべくなりけるかな(明治二十五年)

寒夜埋火

かり宮の窓の夜嵐さむからむしたしみたまへ埋火のもと(明治二十七年)

大宮の火桶ひをけのもと寒き夜に御軍人は霜やふむらむ(同)

神楽

まさりゆく国の光をみかぐらの庭火さやかに見そなはずらし(明治二十七年)

深夜神楽

おましまできこゆなるかなさよふけて物に紛れぬ御神楽の声(明治二十七年)

大本營にましましけるころ鶴声遙たづのこゑはるかなりといふことを

広島の海辺はるかにあしたづの千代よぶこゑはきこしめすらし(明治二十七年)

寄竹祝

ことしおひのそのの呉竹くれたけおほきみの千年ちとせの坂の御杖みつゑともなれ(明治二十七年)

広島にましましけるころ禁庭梅といふことを

かりみやの春いかならむみそのふの梅はのこらず花さきにけり(明治二十八年)

連日雨

ふりつづく雨をいぶせみ窓とちて御軍人をおもひやるかな(明治二十八年)
処せき宮ゐいかにと思ふかなきのふもけふも雨ごもりして(同)

楽隊

大君の軍のみうたしらべあぐるそのものねのいさましきかな(明治二十八年)
広島にましましける頃停車場といふことを

岩木たく大御車のみむかへにたちいでむ日はいつにかあらむ(明治二十八年)

○

民戸煙

にぎはへる民のかまどの朝けぶり御心やすくみそなはすらし(明治二十九年)

風静花盛

うれしくもかぜしづかなり御園生の花の盛をみそなはす日に(明治三十年)

風のみここちにてましましけるころ

あやにくにをすたれこめて見まさぬがをしき今年の花ざかりかな(明治三十年)

旭日照波

大君のみいつをのせてゆく船に朝日かがやく波のうへかな(明治三十年)

寄日祝

国といふくにのはてまで照す日は君がみいつにひとしかりけり(明治三十年)

賢かしこひら所のあとにて

君がため雨にぬれつつ摘む草は露もかかりて清げなるかな(明治三十年)

勾欄に毛蟲のはふを御覽ぜさせたまひてまだ昇殿はゆるさぬに

とたはぶれさせ給ふをうけたまはりて

位くらゐある松さへ庭にたちぬるをけむしのぼれり板敷の上に(明治三十年)

鉄道そこなはれしたため還幸御延引になりければ

風あらく雨たえまなき昨日より思ひしことのおふがわびしさ(明治三十年)

みそののながれのかれがれになりたるをいかでといぶかりしに

苗代なはしろにひきたるなりとのたまはせければ

いかばかりうれしかるらむゆるされてみかほの水を小田にひく日は(明治三十年)

御池には月影みちてそりはしの下のみくまとなれるよはかな(明治三十年)
仰おほせごとによりて小御所こごしよより月を見て

三十九 坤徳対照 — その三 —

○

鶯万春友

梅が枝にうたふ鶯うぐひすよろづ世の春の友とやきこしめすらむ(明治三十一年)

禁中花

大君の千代田の宮にさく花は昔の春もしのばざるらむ(明治三十一年)

をりにふれて

つみためてたてまつらむと思ひしを若菜のうへに春雨はるさめぞふる(明治三十二年)

声

国民くたみをあはれみたまふ一ことの玉のみこそぞ世にひびきける(明治三十二年)

述懐

君を思ふちちのおもひのひとつだにつらぬきかぬるわれやなになり(明治三十三年)

新年梅

としたちてはれのおものをきこしめす大床たかくかをる梅かな(明治三十四年)

花始開

いまいくかあれておましにかをりなむ片枝さきいでし庭の桜は(明治三十四年)

夕花

きこしめすことをはりしゆふべのみのどかに花をみそなはすらむ(明治三十四年)

月前落花

ちりかかる花こそかをれ朧夜の月見そなはす君がみけしに(明治三十四年)

盆栽竹

大前の玉のみはちにうつされてうれしきふしにあへる竹かな(明治三十四年)

親

御恵のあまりある身をなき親も苔の下にてかしくみぬらむ(明治三十四年)

心

しろしめす国やすかれとねがふこそなべての人のこころなりけれ(明治三十四年)

寄民祝

すめらぎのみ国の為と万民よろづたみよろづのわざにきそふ御代みよかな(明治三十四年)

新年梅

大君の千代田の宮のうめの花ゑみほころびぬ年の始はじめに(明治三十五年)

葵

神山の二葉のあふひ大前のをすにかけしは昔なりけり(明治三十五年)

机

おとどよりささげしふみの多きかな大みつくゑの上せばきまで(明治三十五年)

をりにふれて

世の中のいきとしいけるものみなにおよぶは君が恵めぐみなりけり(明治三十五年)

聞 蟲

大前にさぶらひながら聞きてけり御門みかどの原になくむしこゑ(明治三十六年)

熾仁親王
たるひと

御杖みつゑともたのみましけむ呉竹くれたけのをしくも雪にをれにけるかな(明治三十六年)

思往事

十年ととせあまり五いつとせすぎぬ新宮にのみやに移りまししは昨日と思ふに(明治三十六年)

折にふれて

君おもふ誠ひとつにたたかひのにはにも民のすすむ御代かな(明治三十七年)

観艦式

数そひて御国みくににかへる軍いくさぶねいかに嬉しとみそなはすらむ(明治三十八年)

葉山よりかへらむとしける時この日頃風ひややかなればよき日見定めてはいかに

といふおほせごとをうけたまはりてかしこさのあまりに

大君のあつきめぐみによべよりの風のさむさもわすれつるかな(明治三十八年)

都にかへらむとたのしみたりしかひなくその日しも雨ふりければ夕つかた

あたたけき昨日のひよりけふならば君のみまへにさぶらはましを(明治三十八年)

折藤花

春の日の長きしなひをえらぶかな君に捧げむふぢなみの花(明治三十九年)

時鳥一声

時鳥なくひとこゑに大前のみものがたりもしばしやみぬる(明治三十九年)

菊花第一

紅くれなるのみはたに匂ふみしるしの菊のうへにはたつ花ぞなき(明治三十九年)

羈中情

このけしき見せまつらぬがをしとおもふ処も多し旅にいでては(明治三十九年)

○

をりにふれて

大君のみいつおぼえて日かげさす剣が峯の雪ぞかがやく(明治四十年)

をりにふれて

おぼしめすこと多からむ大御代おほみよのみまつりごとのしげくなるにも(明治四十年)

みやのうちにかへりける日

うるはしき君がみけしきをろがみて心やすくもなれる今日かな(明治四十年)

初時鳥

さやかにもきこしめせとか玉くしげふたこま二声なきしはつ時鳥はととびす(明治四十一年)

初紅葉

君がへむ千年ちとせをいはふさかづき盃の色にいでたるはつもみぢかな(明治四十一年)

仁

しろしめす国ひろまれどみめぐみの露にはもるる民草もなし(明治四十一年)

忠

君がため心つくしてまめやかにつかふるおみ臣のおほき御代みよかな(明治四十一年)

天あまつ神しろしめすらむまめやかに君につかふるおみのころは(同)

誠

君がため心をつくすまめ人は神もうれしとたすけますらむ(明治四十一年)

風のみここちにてましましけるころ

時ならぬ雪ときくにもたれこめてまします君をおもひやるかな(明治四十一年)

一条順子の病あつしうなりける頃宝冠章を授けられぬとききて

ためしなき恵めぐみのつゆのかかるとは思ひもよらずはそばの上に(明治四十一年)

喪にこもりける頃内の御使に権典侍良子のまゐりて運動のことなど

あつきおほせごとをつたへけるを承りて

みつかひをたまはるだにもかしこきを大御詞おほみことばぞ身にあまりぬる(明治四十一年)

おはやけのいらへはばかる時なればただかしこさに袖ぬらしけり(同)

沼津にありしころ

大宮のうちいかならむあたたけき沼津の里もけさはさむきを(明治四十一年)

四十 坤徳対照 —その四—

○

新年雪

あらたまのとしのほぎごと聞食きこしむす千代田の宮に初雪ぞふる(明治四十二年)

月前秋風

あきのよの風ひややかになりにけり月もすごしにみそなはすまで(明治四十二年)

新年雪

豊年とよとしのみつぎのゆきぞつもりけるはれのおものをきこしめす日に(明治四十三年)

旅宿夢

大前おほまへにさぶらふとみるゆめのまは旅のやどとも思はざりけり(明治四十三年)

犬

いつくしむ御心しりて犬の子も大前さらず遊びたはるる(明治四十三年)

玉

大前のみたなにすゑてみそなはす玉にはちりもかからざりけり(明治四十三年)

をりにふれて

日のもとのくにひろごるのみのりぶみ神も嬉しとうけたまふらむ(明治四十三年)

おほけなき君が恵めぐみのかしこさは忘るるまなし老いにける身も(同)

沼津にて

みそのふは雪さむけれどすくよかに君ましますときくぞ嬉しき(明治四十三年)

たまものその品々に大君のふかきみこころこもるかしこさ(同)

禁庭花

みそのふの花はさけどもしづかにはみそなはす日ぞすくなかりける(明治四十四年)

大前にまゐりおくれぬわたどのの窓よりみゆる花をめでつつ(同)

遅日

きこしめすこと多ければ春の日もなほ短しとおぼしめすらむ(明治四十四年)

井

大君のおもものの為のほり井には清き水のみわきあがらなむ(明治四十四年)

寄水祝

わが君のうぶゆとなりし祐さちの井ゐの水は千代までかれじとぞ思ふ(明治四十四年)

惜落花

みいとまのあらむ日またで桜花をしくも風にちりみだれつつ(明治四十年)

○

『昭憲皇太后御集』のをはりにをさめられたる御文章二十二篇のうち、ここに引用しまつるべきものも、それは、読者が直接に御集につきて拝読すべき、をいふにとどめようとするのである。御文章の部の始めにある、明治二十三年(一八九〇)十月二十六日、茨城県に於ける近衛兵このまへいの演習をみそなはすために行幸・行啓ありしときの御文章のごとく、まことにおごそかに、またしなやかに、皇室の尊厳と人生の情趣とを表現せさせ給ふををろがみよみまつり、また、ここに引用しまつりたる数々の御歌みうたををろがみよみまつれば、道徳生活と芸術表現と、国家秩序と情意生活とのいひつくし難き関係を、さ

とらしめらるるのである。

いまここに引用しまつりたる御歌について謹解しまつることは、『明治天皇御集研究』を補足すべき註釈にゆづるのであるから、読者は、御歌をくりかへしよみまつりて、雲の上のあけくれの御ありさまをしぬびまつり、芸術の内容となりまたその対象となるものは、実人生であり、『しきしまのみち』は、『白雲のよそに求む』べきにあらざること、また、『しきしまのみち』としての日本芸術は、世界文化と人類精神生活との理想的創作であることの事実を、いまここにあふぎまつるべきである。またここに注意すべきことは、『しきしまのみち』によりて表現せられつつ、またそれによりて指導せらるるところの日本精神は、決して個人人格の特異威力によつて支へらるるものではなく、御祖みおやの御靈みたまとしての神のまもりによりて、神ながらの道をふみゆき、『千早ぶる神のひらきし道をまたひらくは人のちからなりけり』、とこそ信知すべきである。これ、個体と全体との関係について、哲学的考察の迂路をたどらず、芸術的直観に訴ふところの『しきしまのみち』によりて、教令せさせ給ふところである。

されば個人の道徳は、我を忘れて大君につかへまつることに極まるのである。かしこ

くも 天皇は、祖国無窮の生命を現しくしめさせ給ふのである。されば昭憲皇太后も

述懐

ためしなきこの大御代おほみよにあひてこそ人と生れしかひはありけれ(明治四十年)
とこそ、よませ給うたのである。また、

をりにふれて

世の中のいきとしいけるものみなにおよぶは君が恵めぐみなりけり(明治三十五年)

とも、よませ給うたのである。『明治天皇御集』ををろがみよみまつり、また、『昭憲皇太后御集』をあはせてをろがみよみまつることの不可思議、現実的不可思議の恩寵をかうぶるところの日本国民の幸慶は、いひあらはすべき言葉もなし、とここにふたたびくりかへさしめらるるのである。

○

ここに、『昭憲皇太后御集』より御歌十首を引用しまつり、読者が『昭憲皇太后御集』を拝誦すべきいとぐちたらしめようとするのである。

おとちばなひめ
弟 橋 媛

船の上に君をとどめてたちばなのいまはとちりし心をぞおもふ(明治十二年)

万葉集なる桜児をさくらこ

一方ひとかたになびかしつべき風ならば花ももろくはちらざらましを(明治十二年)

夫婦有別

むつまじき中洲なかつにあそぶみさごすらおのづからなる道はありけり(明治十二年)

男女同権といふことを

松が枝えにたちならびてもさく花のよわき心は見ゆべきものを(明治十二年)

対月思昔

たらちねの袖そでにすがりて見しかげも思ひぞいづる秋の夜の月(明治十八年)

懐旧

たらちねはしらですぎけむ国の風海の外までふき渡る世を(明治十八年)

写真

新衣にひごろもいまだ着なれぬわがすがた写しとどむる影ぞやさしき(明治二十二年)

明宮清見瀉はるのみやきよみにましましけるころ(註・明宮は大正天皇御幼少の頃の御称号)

雨につけ嵐につけてみほの浦のこまつが上を思ひこそやれ(明治二十二年)

鏡

朝な朝なががみにうつすわが影のいつともなしに老いにけるかな(明治三十五年)

櫛

くしのはに余りし昔しのぶかなすくなくなれる髪をときつつ(明治四十四年)

四十一 研究方法論 — その一 —

従来の文献学は、文献を研究材料とする他の科学の研究に着手するまでの用意であつた。故に文献学は、一般歴史科学的及び社会科学的研究の補助学科であつた。

しかしながら、著者の志すところの『文献文化史的研究』は、この従来の文献学的研究は、文化史的研究とむすびつけしめらるべきものである、といふ見地から、ここに、その研究の任務と方法とを新しい世界にみちびかむとするのである。文化とは、人間生活によりたがやされたる自然である。文化史的研究とは、人間生活と自然との、すべての關係に於いての全開展を理解するがために、これを整理しようとするのである。故に文化史的研究は、その研究対象と研究範囲と、したがつてその研究者の見地に於いて、

総合的・創作的・芸術的性質を有するのである。これに対して文献学的研究は、一定の文献に対する解釈及び決定をなす分析的性質を有するのである。故に文献文化史的研究は、分析・総合的研究であり、科学的認識と芸術的表現とを密着せしむるのである。

○

人間経験の対象は、『できごと』である。宇宙といひ、世界といふのも、この『できごと』である。『できごと』とは、起り現はれ、志し為されたることである。この『できごと』は、それを認識するところの主体としての人間と、その全体の『できごと』から認識するこの主体をぬき去つたのこりのものに分つて考へることができる。そののこつたものが、『自然』である。此の自然を研究するのが、自然科学であり、この『できごと』全体をそのまま研究するのが、精神科学である。今、社会科学・歴史科学といったのは、此の精神科学の二分科である。しかしながら、自然科学的研究に於ける研究者の精神科学的研究、又は道徳的修養と宗教的信念とが、その人の自然科学的研究事業を背後に支持することによつて、間接に影響を及ぼすことを知らねばならぬのである。又精神科学は、『できごと』の全体を研究するのであるからして、自然科学的研究の成果

をも、その研究対象とするのである。

故に自然科学的研究が、専門分科的に一定の見地から一定の対象を細密に研究するに比較すれば、精神科学は、すべての科学的智識を、研究者の体験に基づく人生観と道徳情操又は宗教信念と関聯せしめて、考察するのである。しかしながら精神科学のうちにも、その研究対象と研究見地との差に基く諸種の専門分科が派生せしめらるるのであるが、専門数学者・専門物理学者はあつても、専門哲学者・専門倫理学者はありうべからざるもので、哲学・倫理学等は、各人に要求せらるべき精神的修養としての人生観として体験・信知せらるべきである。

○
精神科学の研究対象としての人間生活の精神的産物は、言語・神話・宗教・習俗・道徳・法律・芸術等である。そのうち『言語』は、他のものの基礎となり、また一般に通じての重要な成分となつてをるのである。それ故に、『言語』またはそれを書きあらはした文献を直接の研究対象とするところの文献学は、一般精神科学の研究材料的基礎学となり、それは、研究方法的基礎学としての生理学的心理学と対立するのである。此の

文献学と人類学的原始人生活の研究と又心理学との共同的作業の下に、一般人類精神開展史としての民族心理学が成立し、それと各国民文化史的研究との共同作業の下に、各国民性格学が成立し、それが、やがて各国民宗教となり、進んで世界文化単位原理となり、それらすべてが、全世界歴史となり、全人類宗教となるのである。

○

ヴントの心理学的法則、たとへば『目的分化』のそれは、心理的原因が結果となつて現はるる時は、その動機に於いて予想せられたる範圍を超出することを意味するのである。人間行為の目的が異種・多様に分化するといふことは、一般自然科学的法則のやうに、ある具体的事実を、一定の見地から概括的にいひあらはしたものと異なるのである。即ち、人間行為の目的の分化するものであるといふことを気づかぬものに、それは常に異種・多様に分化するものであるといふことを警告しようとするのである。故に心理学的法則は、人間精神生活に於ける誤謬指摘・迷信打破のための法則であつて、それはまた、精神科学的研究そのものの任務と性質とを示すのである。

故にヴントの心理学的法則は、無内容の法則といふべきであり、無法則的法則、法則

否定の法則ともいふべきである。これは、『人生は無常なり』また『人生は不可思議なり』といひ、親鸞の『自然法爾』といひ『義無きを義とす』(末燈)といふも同じことであつて、人生の具体的内容の複雑と変化とは、概念的に認識し概括・抽象的に言ひあらはし尽すことを得ぬのである。

故に心理学的法則は、人間の直接経験または体験としての精神生活又は文化生活を、窮尽するについての概念的認識作用の限界を示すものであり、またそれ故に、それと補足すべき芸術的表現、ことに詩の任務を暗示するものである。故に『心理学法則』とは、『心理学法則とは本来いかなるものであるかを言ひあらはしたものであつて、そこにそれは、総合的原理を啓示して芸術的表現に接近し来り、心理学法則の『拈華微笑』的性質、即ち、人生に対する頓悟入信・安心解脱の機縁を誘ふものであるをさとしめらるべきである。

心理学的法則とは、生命・生活また人生の法則であつて、それは、創造・展開の法則

である。しかしながら人生の開展は、『行くへさだめぬ』進行である。

○ 自然科学的法則は、与へられたる対象を一定の見地から因果關係に分析し、概念的形式として構成するところのものである。

○ 読書

文字をのみよみならひつつ読む書の心をえたる人ぞすくなき(明治三十七年)

寄道述懐

白雲のよそに求むな世の人のまことの道ぞしきしまの道(明治三十七年)

をりにふれて

思はざるごとのおこりて世の中は心のやすむ時なかりけり(明治四十五年)

あやまたむこともこそあれ世の中はあまりにもを思ひすぐさば(同)

○

故に自然科学的法則と、精神科学的法則または人生法則としての歴史的開展法則とを、混同する

ところの、マルクス・エンゲルスの唯物史観の如き旧思想の誤謬を指摘することは、日本国民性格学としての『しきしまのみち』の任務である。『しきしまのみち』が本来の精神科学であり、作歌と和歌研究と、即ち歌の創作と鑑賞とが、日本精神科学的研究に於いて重要な位置を占むるに至るのである。それは、必ずしも『大学』に於いての研究教授を要せぬのである。しかしながら、今日の一般『歌壇』・各歌人団体及びその機関雑誌が、それに代り得るだけの十分の自覚と進歩とを示して居らぬのである。

『読む書の心』『世の人のまことの道』を求むることは、精神・文化・歴史・社会科学的研究の目ざすところであり、不可測ふかそくに分化・開展する『世の中』のまことのありさまに随順すれば、人智の及ぶ限界をさとしめられ、『あまりにもものを思ひすぎす』ことなく、いよいよ信順・寄託きよたくの帰依心をうながさしめらるるのである。

われら日本国民の帰依すべき原理、礼拝らいはいすべき対象、信奉すべき教義は、実に、われらの精神生活せいしんせいごうを此の世に於いて現実的に支持するところの、祖国日本とその無窮生命むきゆうせいめいとであり、その礼拝儀式は、文献文化史的研究と芸術・詩歌的表現とを、国民性格学の見地から相互補足せしむるところの『しきしまのみち』である。

四十二 研究方法論 — その二 —

○ 精神生活を窮尽きふうじんするについての概念的認識作用の限界を知れば、一般自然科学的認識とそれにもとづく生活技術とを排斥するのではなくして、それをもつて人生原理又は心理法則としようとする迷妄から目さめしめらるのである。此の心理法則の本質に就いての思想が、前駆的薄明のうちにはあらはれたのが、親鸞の他力宗たうきしやうである。彼が『善人なほもて往生おうじやうをとぐ、いはんや悪人をや』(嘆異)といつたのは、善悪といふ道徳的批評を無視しようとするのではなく、善悪の区別とまたその度合どあひとによつて、信仰生活に入り得るか否かを決定すべきではない、といふ意味である。

従来は『物・心』と対立せしめられてをつたのであるが、最近に至つて、生・生活・人生といふ概念が『物』を総括して、それを統一的合成体となしたるものと理解せられつつある。故に、心的・心理学的現象、直接経験、内的経験、実地体験、芸術直観等の概念は、人生といふ概念に代表せられ、心理学的法則及び原理は、やがて人生法則及び原理として理解せらるるのである。此の人生法則及び原理は、人間の知的生活のうちに求むべきではなく、却つて、一般概念的認識形式をして人生法則たらしめぬやうにすといふことが、人生法則である。これが『世をいとふ』ことであり、発心出家することであり、人生の無常を感じることであり、厭離穢土・欣求淨土であり、涅槃の悟境に入ることである。これが、過去に東洋精神ことに日本精神の成就したところのものであつて、今また、それをよびめさまして、現日本国民生活の帰依原理・随順法則を、そこに求めようとすべきである。

○

従来の文献学的研究は、史学の補助学科であり、また、心理学が精神科学の一般的基礎であるに對して、その特殊的基础であつた。また文献学は、法律学・国家学・哲学・

其他一般精神科学の補助学科であるのみでなく、自然科学や数学に対しても、その史的
研究資料の決定と解明との任務をつくすのである。故に文献学は、他学科に対して、あ
だかも他人の領地を耕すもの、といふべきである。

また従来の文献学は、研究対象としての個々の精神的産物について、そのかきあらは
されたる内容と意義とを認識し、また、偶然的又は故意的に変改せられたる部分を去つ
て、その本原的情態を確定しようとしたのであるが、それはまた、その組織開展の各階
次を知らうとすべきであつて、文献学的決定は、原本への溯源をのみその単一目的とす
べきではないのである。

○

言語は、唯一の思想表出法ではないけれども、最も普通なる精神的産物の形式であ
る。この言語に文法的分析を加へて、その一般の意味を解明するのが、文献学的研究の
任務である。人類一般の精神的産物の発生開展の史的條件を研究する民族心理学的研究
と、個々の作者の個性に就いて、その特徴を比較し微細の項目に及ぶところの文学史的
研究とに進むにいたるまでに、すなはち、内的批判をなすまでに外的決定をなすのが、

文献学の任務とせられたのである。

しかしながら此この外的決定も、内的批判、また一般的精神科学と個々の史学との知識を予想せねば、研究を始め得ぬのであるからして、それは、研究過程の一区劃に名づけらるべきものである。即ち文献学は、主として外的又は一般・抽象的批判と解明とをなすのであつて、個別的又は内的批判及び解明が始まれば、それは、史学・美学・法律学等の各分科的研究に入り、最後には、芸術的表現及び鑑賞の堂奥どうおくに進むのである。

ここに一つの注意を挿入せねばならぬのである。それは、外国語の学習といふ特殊の仕事が、日本の教育機関と国民精神生活とに於いて、重大の地位を占めてをるといふことである。此の外国語学習は、主としてその文法的分析によつて一般の意味を解明し、訳読翻譯又は実用的熟達を目的とするのである。しかしながら、それも内的価値批判と随伴せしめられて、始めてその本来の目的を達し得るのである。著者はここに、松田福松氏の英語教授に関する未公刊の意見書を引用し得ることを喜ぶものである。松田氏はいふ、『単に英語反訳の技術を与ふることとどめず、各人に対して、国民としての道徳的批判力を備へしむるやう努力せねばならぬと信じます。……単に技術のみを与へて、国民としての道徳的批判力を備へしめないならば、それは、銳利の武器を無分別の男に手渡してその使用法を練習せしむるものであつて、そこに、重大なる社会的秩序の紊亂びんらん・国民生活の破

壞が導かることは、余りに明白の事であります。』と。松田氏は、更に、その実行方法を詳細に論究し、それらを統一すべき原理は、『われらが国民生活の自由・進展、われらが国民精神の拡充・防護』であると宣説してをる。

○

この外国語反訳技術と道徳的批判力、また、心理学的・文献学的・精神科学的研究の各方面の仕事は、常に相互随伴せしめらるべきものである。また、文献学の研究範囲が広くなれば、おのづから比較研究法が発生して、そこに、諸精神科学が起るのである。故に、文献学的研究の知的・技術的・分析的批判もまた、情意的・人生観的・総合的・内的批判によつて指導せらるることによつて、始めて正しい道を進みうるのである。

——この外的批判に内的根拠を与へようとするときに、そこに、文献文化史的研究が、まるるのである。故に、この文献文化史的研究は、一般民族心理学から特殊民族性格学に入らうとするときに始まるのである。又それは国民にとつては、その精神的産物ともにもそれを分派せしむるところの諸流・諸派の諸説・諸主義に選択を加へて、帰依対象を確立し読誦とくしょうきやうてん經典を決定しようとするときに、実現せらるるのである。

○
国民性格学は、主としてその国民性格を代表すべき精神的産物としての、文、献、を、選、択、す、る、こ、と、に、於、い、て、その研究の出発点を見出すのである。

若し、歴史科学的・社会科学研究が余りひろき視野にその注意を分散せしむるときは、それは、自己の標準によらず、他より与へられたる一種の哲学的また形而上学的主義傾向から出発するところのもの、即ち研究者の直接経験を離れて、外部的基準によつて動かしめらるるところの非科学的・迷信的思想生活の曠野に、行くべき路を失ひて昏迷するに至るのである。

これに対して、研究対象の選択から出発するところの文献文化史的研究は、批判選択によつて精神的産物を淘汰するのであるから、誤謬指摘・迷信打破をなすのである。即ち、研究の出発点と帰着点又は到達点とは、つねに連結せしめられ、人生の行路に迷はぬのである。

即ち、それは、全人生・全感情から出発して、また、そこに帰着するのである。それは、人間精神生活の護持・養育方法であり、生、死、を、連、結、せ、し、む、る、こ、と、の、安、心、と、解、脱、あんじん げだつ

とを求むべき唯一の道路である。

——思へ、われらに与へられたるものは、われらの生である。生のみである。それは、それ自身にすでに一切である。われらの個的生命が全的生命につながりしめらるるのは、個的生命相互の理解と同情と尊敬とによつて、実現せらるるのである。個的生命にめさめて、全的生命に徹入するところの、情意的人格の表現として創作を選択して、それを研究し信仰するとき、永久生命感が実現せらるのである。

四十三 研究方法論 —その三—

○ 新聞紙

みな人の見るにひびみに世の中のとなしごとは書かずもあらなむ(明治三十八年)

教育

よきたねをえらびえらびて教草をしへぐさうゑひろめなむのにもやまにも(明治四十五年)

○

故に、『明治天皇御集』ををろがみよみまつるといふことの意義を説くことが、『研究方法』を説くことに外ならぬのである。それ故にまた、『文献文化史的研究』は『批判』である、ともいひ得るのである。また、『批判』は信仰であり、信念であり、各人の分

け入る道に於ける達人の能力である。此の批判の道場は、学术界、議會、定期刊行物等によつて、国内的にまた國際的に行はるる思想・言論宣伝戦場である。

○

歐洲大戦以來、この言論戦の重要であることが、全世界文化民族によつて確認せられたのであるからして、進んで精神科学研究方法論の重要であることも、やうやく一般に気づかしめられ、目下、『社会科学』といふ名義の下に、種々の研究範囲と宣伝動機とが、通俗的及び學術的刊行物に於いて頻りに取扱はれて居るのである。しかしながら、自然科学的研究に於ける専門、分科の区劃と平行して、精神科学的研究に於ける研究対象、文献の選択といふことの重要が、まだ十分に気づかれぬのである。

この選択批判は、体験に基くものであるからして、世界大戦に於ける思想宣伝戦の方面に於いては、アングロサクソン民族の常識と用心とに示さるる体験心理学が、ドイツ人の認識論だけの形式理論哲学に示さるる訓誥学精神の迂濶うかつに対して優勝したのであつた。しかしながら、この苦にがき経験は、ドイツ人に眞の人生科学又は人生観哲学の生命とその重要さとを、さとらしめたのであつた。欧米に於いて、マルクス思想の弁証法的形

式理論の誤謬を看破せしめ、イタリヤのムツソリニ氏をして『祖国』に人生原理を確信せしめ、それによつて、その政治的改革を断行せしむるに至つたのも、此の思潮の一表示に外ならぬのである。

故に、国民思想指導、政治教育、成人教育といはるるところのものは、此の批判としての精神科学的研究方法の信知によつてのみ、実現せらるるのである。

この文献文化史的研究の実験室であり、また、発表機関の主要なるものは、定期刊行物としての新聞雑誌であつて、定期刊行物は、文献文化史的研究の対象であり、また同時に、研究作業そのものである。

○
自然科学の發達におくれた精神科学の發達は、今日やうやく新聞雑誌の發達によつて、その新たなる歩みを始めたのである。

此の新聞雑誌の發達は、団体意志の發現に外ならぬのであつて、そこに、個体意志と、団体意志との指導統一關係が實現せられ、また、不可説の精神法則と人生原理とが、記者・読者間に行はるる同感共鳴作用に芸術的表現性を実現し、法則の普遍性に客観的根

抛なを、与よふるのである。そこに、各種の流行、党派・政派、また学派・宗派が分化せしめられつつ、それは更に、それらを綜合すべき唯一原理を信知して、それによつてその生活を統一し、生命化するところの、優勢・統御要素に帰向せしめらるべきである。

わが大日本帝国臣民は、此の精神的及び政治的統一の現実的中心を 皇室に仰ぎまつり、その精神生活の芸術的表現を、『明治天皇御集』に仰ぎまつるべきである。

○

文献は、各国語の分派にしたがつて区分せらるるのであるからして、ここに、研究対象選択に於いて、自、国、語、文、献、を、中、心、と、す、る、の、で、あ、る、か、ら、お、の、づ、か、ら、国、民、主、義、が、成、立、す、る、の、で、あ、る。

人、類、生、活、と、世、界、文、化、と、は、精、神、科、学、的、学、術、研、究、の、基、準、で、は、な、く、国、民、文、化、の、基、準、に、よ、つ、て、人、類、精、神、生、活、の、産、物、が、選、択、批、判、せ、ら、る、べ、き、も、の、で、あ、る。所、謂、いはゆる国、際、主、義、の、誤、謬、と、虚、偽、と、は、こ、こ、に、明、か、に、せ、ら、る、の、で、あ、る。故、に、『日、本、精、神』又、は、『日、本、主、義』は、その、現、実、国、家、生、活、に、於、け、る、自、立、主、権、と、と、も、に、精、神、科、学、的、研、究、の、原、理、と、し、て、要、求、せ、ら、る、と、こ、ろ、の、も、の、で、あ、る。

東西洋文化交流の中心に、ひとりさびしく、されどををしく立つてをる『日本』が、日本文献文化史的研究の現実的基礎である。この『日本』は、その祖先の生活要素をうけつぎてまきひろげ、永久に現在の生成をつづくるのである。そこには所謂過去はない、何となれば、建国以前に『日本』は無いからである。『日本』が生る前には『日本』は無く、またわれらにとつては、自立国家日本はほろびず、と信じて疑はぬのであるから、滅亡せねば死後の未来も無いのである。此の不可思議的現実としての日本と日本精神とを、われらにしめし給ふのが、『明治天皇御集』である。

○
かくのごとく自立国民生活は、滅亡せねば未来もなく、国民生活成立以前の過去もなく、あるものは、ただ生成的現実の無極の開展のみである。故に、『歴史』を『過去の生活』といふ意味に用ゐる場合には、それは研究者個人とその時代とより以前、といふ意味である。故に歴史は、個人と国民生活又は全体生活との内的・精神的關係に於いて成立するのである。即ち生成的現実の無極開展としての永久生命が、個人有限生活に関

聯せしめられ、反映せしめられて、そこに始めて現実生命化するのである。即ち、無常の個人生活が、永久生命と接触融合するとき、開發せらるる精神生活が、『歴史』である。故に歴史とは、史実でもなく、年代記でもなく、『世のうつりゆく次第』(愚管抄 卷七)として研究者の内心に開發せしめらるる『歴史哲学』である、といふべきである。故に研究者の現在社会生活に対する不満が、正しい歴史的研究の直接衝動因となるのである。即ち、個人がその現実生活を変改矯正し、または補足完成しようとする時に、歴史的研究が志さるのである。故に『歴史』は、その心理的動機と精神生活作業の内容から正しく理解すれば、それは、研究者の人生観であり、歴史哲学であり、また信条であり、信念である。故に、『歴史』は、『宗教』である。しかして、歴史の中心、また出発点・帰着点、は、国民史であり、宗教のそれは、国民宗教である。また、それらの精神生活の客観的根拠となるものは、芸術的表現であり、芸術の中心もまた、国民芸術であり、その核心は、国民詩であり、日本と日本人にとつては、『しきしまのみち』である。

○ 『しきしまのみち』は、祖国永久生命と個人無常生活との融合によつて生るる芸術的

表現及び鑑賞である。

『明治天皇御集』は、『しきしまのみち』の総合的表現であつて、世界に於いて、さびしくををしく立てる日本が、その自立を防護して苦難にたわむことなく、その世界文化単位使命をつらぬきとほすべき、指導光明であり、国民個人煩惱生活にとつての『無明長夜の燈炬』である。

○

をりにふれて

くろがねの的まといし人もあるものをつらぬきとほせ大和だましひ(明治四十一年)

河

岩がねをきりとほしても川水は思ふところに流れゆくらむ(明治四十四年)

『明治天皇御集研究』終り



明治40年(1907)
25歳ごろ

著者略歴

明治十六年(一八八三年)山梨県中巨摩郡松島村(現在の敷島町)長塚に三井樞六・はるの長男として生れる。甲府中学校のち上京して京華中学校に転入。明治三十三年旧制・第一高等学校文科入学。明治三十七年東京帝国大学文学部国文科入学、同年十一月「根岸短歌会」の「馬酔木」に連作短歌六首を発表、以後、正岡子規の歌風を継承。明治四十年(一九〇七年)二十五歳で東大卒業。昭和二十八年(一九五三年)七十一歳で長逝。甲府市外・青松院墓域に葬る。戒名「承命院無端甲之居士」(自撰)。

明治天皇御集研究

国文研叢書 No. 18

原本・昭和三年五月二十日・東京堂刊
昭和五十二年二月十日発行(資料出版)
昭和五十二年四月一日第二刷

頒価七〇〇円

著者 三井 甲之

発行所 社団法人 国民文化研究会

理事長 小田村寅二郎

東京都中央区銀座七一〇一八(柳瀬ビル)
電話(五七二)一五二六、七番
振替 東京七一六〇五〇七番

印刷所 奥村印刷株式会社

東京都千代田区西神田一―一四

落丁乱丁のものは、お取り替へいたします。

「国文研叢書」既刊目録（新書判）

No.8	No.7	No.6	No.5	No.4	No.3	No.2	No.1	No.
日本思想の系譜 —文献資料集（近代その二）	日本思想の系譜 —文献資料集（近代その一）	日本思想の系譜 —文献資料集（近世その二）	日本思想の系譜 —文献資料集（近世その一）	日本思想の系譜 —文献資料集（古代・中世）	弁証法批判の歴史	日本精神史鈔 —親鸞と実朝の系譜—	古事記のいのち —改訂版—	書名
小田村寅二郎編	小田村寅二郎編	小田村寅二郎編	小田村寅二郎編	小田村寅二郎編	高木尚一	桑原 暁一	夜久 正雄	著者・編者
四四・三二五	四四・三二五	四三・一〇・一	四三・二・一	四二・三二五	四二・一・二五	四一・一一・二五 （在庫ナシ）	四一・三二五 （原版） 四八・一一・一 （改訂版）	発行年月日
三八一頁	四〇三頁	四〇九頁	三一七頁	三〇九頁	二四一頁	二七九頁	三〇七頁	頁数

「国文研叢書」既刊目録(新書判)

No.17	No.16	No.15	No.14	No.13	No.12	No.11	No.10	No.9
日本における マルクス主義批判論集	国史の地熱 — 聖徳太子と楠氏の精神 —	白村江の戦 — 七世紀・東アジアの動乱 —	ヨーロッパにおける マルクス主義批判論集	短歌のあゆみ — 続「短歌のすすめ」 —	短歌のすすめ	続 日本精神史鈔 — 花山院とその系譜 —	欧米名著邦訳(明治)集 — 文献資料集 —	歴史と人生観 — マルクス主義の超克 —
戸田義雄編	桑原暁一	夜久正雄	桑原暁一編	山夜田久輝彦	山夜田久輝彦	桑原暁一	小田村寅二郎編	川井修治
五一・三・一〇	四九・一〇・二五	四九・一・一〇	四八・二・一〇	四六・二二・一	四六・四・一	四五・一二・二五	四五・三・二〇	四三・三・一五
三二二頁	二七九頁	二八九頁	三二八頁	三一六頁	三〇九頁	三一〇頁	四八三頁	二八三頁



